
ひそ、秘書？ばなし

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひそ、秘書？ばなし

【Nコード】

N6027T

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

藍花商事 営業一課 野神の恋人は……
秘書課のやり手？ でも、ちょっと天然で……
過去もいろいろ、未来はどたばた？

#0・誰？

初夏の風が頬をすり抜けて行く。
ゴールデンウィーク明けの昼休み、いつもの様に会社の屋上での昼寝をしていた。

ベンチに足を投げ出して壁にもたれ腕を組んで眠る。

他の社員は会社の前にある公園か社員食堂で昼休みを過ごす。

その故、屋上には俺以外に誰もいない。

毎日、独りだけという訳ではないが殆ど皆無と言った方が良いかもしれない。

しかし、その日は違った。

確かな視線を感じる。

欠伸をして投げ出している足を組みかえる。

それでもまだ視線を感じた。

「誰？」

目を開けようとすると太陽の光がもろに飛び込んできた。

片目を瞑り薄目を開ける。

「ん？」

誰かが俺の顔を覗き込んでいる。

それもかなり至近距離で。

ポニーテールにしている黒い髪が風で戦っている。

そして端正な整った顔つき、綺麗な瞳が優しく見つめている。

まるで可愛い子犬か子猫を見るように。

「えっ？」

驚いて目を開けたとたん、頬に何か柔らかい物が触れて黒いスーツ姿の女性は立ち上がり踵を返す。

髪の毛が孤を描きキラキラと光っている。

夢現で見ていると消えるように彼女は屋上を後にした。

「なんだっただ？」

時計を見ると1時までまだ20分程あった。

仕方なく起き上がり伸びをして頭を掻きながら営業部に戻る。

1 - 1 ・グロス？

藍花商事 あいかしやうじ 営業一課 それが俺・野神瑞貴 のがみずき の職場だった。

「おや、のっち。ずいぶん早いな」

3階にある営業部フロアーにある一課に戻ると昼休みだと言うのに、同期の藤堂一弥 とうどうかずや がパソコンに向っていた。

「会社でのっちは止める」

「なんだ、寝不足か？ 野神は」

同僚の藤堂はパソコンから視線を外さないまま顔も見ずに聞いてきた。

とりあえず藤堂はいつもこんな感じで仕事に集中している時は人の顔を見ないで受け答えをする。

それでもきちんとした答えが返ってくる。

一度で良いから頭の中を見てみたい。

「普通の脳みそが詰まっているだけだ」

もとい、藤堂はエスパーだった。

「顔を見ないで判るのか？」

「見ているよ、それに声だな」

「起こされた」

「誰に、それにお前を起こす奴なんていないだろ」

「いたんだよ、確かに」

「誰が？」

「侍？」

俺がそう言つと藤堂がキーボードを叩く手が止まった。

「ミス侍か？」

「たぶん」

「何で？」

「俺が知りたいよ」

俺が溜息を付くと藤堂が茶に付き合えと言うので、仕方なく通路の

喫煙スペースの横にある自販機に向った。

すれ違った女子社員が俺の顔を見て笑いながら走り出した。

藤堂と一緒に居ると時々こんな事が起きるので俺は別段気にしなかった。

「お前はミルク抜きだよな」

「ああ」

そう言っただけ紙コップを渡される。

目覚ましに丁度良い、珈琲の香りが立ち込めた。

2人で長椅子に腰掛けると通路の先を代表取締役の後ろを秘書の女性歩いているのが見えた。

「噂をすれば影だ。彼女に間違いないのか？」

「たぶん」

秘書課の一ノ瀬凛子いちのせりんこそれが彼女の名前だ。

長い黒髪をポニーテールにして黒いスーツを着ている。

端正な顔つきに切れ長の大きな目、そしていつも背筋を伸ばして歩く姿から『ミス侍』と呼ばれている。

クールビューティーで社内人気ナンバーワンらしい。

そんな事はどうでも良い事だった。

俺には関係ない。

毎日の仕事を小さな歯車の様にして、平凡で穏やかな生活がしたくて大きな商社に入社したのだ。

「まあ、何かの間違いだろう」

「間違いね、その頬に付いているグロス落としておけよ」

「はあ？ グロス？」

「リップグロス」

藤堂に言われて慌ててトイレに駆け込んで鏡を見ると頬に薄いピンクの跡が残っていた。

藤堂の奴は性格が悪い……

間違いなく、笑われていたのは俺だった。

1 - 2 ・ 珍獣が何か

藤堂に今夜付き合えと言われ馴染みの店『居酒屋たぬき』で落ち合う事になった。

約束の時間に少し遅れて店に入ると奥の座敷に案内された。

たぬきは藤堂の先輩がやっている店で会社からも近く飲み会はいつもここを利用していた。

「悪いな、遅れた」

「構わないさ、いつもの事だ」

とりあえずビールを頼み乾杯する。

「お疲れ。で、今日はなんなんだ？」

「お前、彼女とどう言う関係なんだ？」

「はあ？ 彼女って誰？」

「惚けるな、一ノ瀬だよ。秘書課の」

「……………」

恐らく藤堂は昼休みの事を言っているのだろう。

しかし、俺には何を言っているのか理解できなかった。

「侍がどうした？」

「あのなあ、野神。お前の頬に口紅が付いていたという事はそういう事だろう」

「判らん」

「殴って良いか？」

「いや、それは困る。寝起きだったからあまり記憶がはっきりしない」

とりあえず、昼休み屋上で起きた事を全て藤堂に話した。

寝ていたら誰かの視線を感じた事、目を開けると彼女ばい女性の顔が見えた事。

「それで、全部か？」

「俺がお前に嘘を付いた事があるか？」

「そうだな、しかし何でお前なんだ？」

「俺が知りたいよ、何で俺にキスなんかしたのか」

その時、開いている障子の影から声がした。

「ああ、瑞貴がいる！」

「下の名前で呼ぶな！」

この無駄に大きな声は同期で総務の宮里里美だった。

振り返るとショートカットが似合う元氣100倍娘のような里美がいた。里美の後ろには後輩だろうかワンピース姿とパンツルツクの女の子2人が立っていた。

「サトサト、今日はどうしたの？」

「そんな蟻が寄って来そうな名前で呼ぶな」
そう言いながら俺の首を絞めてきた。

「宮里、そこら辺にいとけよ」

里美が藤堂の声で一瞬動きを止めた。

「ああ、一弥、発見！ ラッキー」

「俺は珍獣か何かか？」

「うんにゃ、珍獣はこつち」

「うらあ！ 誰が珍獣だ」

俺が暴れて中里の手を解くと連れの女の子が笑っていた。

確かに俺はそんなに背は高くないし（自称170センチ）それに少し童顔だが珍獣は無いだろう。

「で、何の用なんだ。里美は」

「同席して良い？」

「駄目」

「そんな事、言わないの。後輩ちゃんがここに来たいって言うから連れて来たの」

里美の言葉で直ぐに理解した。

ここは営業一課の溜まり場だから恐らくここに来れば藤堂に会えるかもしれないと思ったのだろう。

「ほらほら、のっちは奥に行つて」

渋谷、藤堂の横に座りプチ合コンみたいな状態になってしまった。

藤堂は背も高く落ちていていて営業部の貴公子なんて呼ばれていた
りして女子社員に人気があるのだ。

「それじゃ、改めまして。お疲れ様！」

乾杯を皮切りにサトサトが仕切り始めた。

「それじゃ、まずは自己紹介から」

「今年入社 of 総務 of 片桐美和です。宜しくお願い致します」

パンツルック of 利発そうな女の子だった。

「わ、私も今年入社 of 村田果歩です」

大人しそうなワンピース姿 of、お嬢様タイプ of 女の子だった。

「俺らは良いだろ自己紹介は。俺が藤堂で、こっちが珍獣だ」

「だから、珍獣言つな」

藤堂の首を絞めて揺すると彼女達が声を上げて笑い出した。いつも
俺がこんな役割を担当している。

同期の中では藤堂は容姿端麗・沈着冷静で俺がムードメーカーと言
うかおちゃらけた役回りになっていた。

「そう言えば、さつきは何の話をしていたの？ 何でお前だとかキ
スしたとかなんとか」

「別に、そう言えばそちらの可愛らしい後輩ちゃん達は仕事に慣れ
たかな？」

何事も無かつたか of 様に話題を変えて、サトサトが興味を示した事
をかわす。

「まだまだですね」

「そうだよな、まだ研修中だもんね。俺なんか研修中は怒鳴られて
ばかりいたからね」

「そうなんですか」

「うん、でも直ぐに慣れると思うよ」

藤堂は相変わらぬ口数の少なさだったが、それでも後輩ちゃん達

の質問にはきちんと答えていた。

他愛の無い話をしていると時間も遅くなって来たのでお開きになった。

駅まで皆で歩き別れた。

1 - 3 ・俺はここで

俺の住んでいるマンションは会社から徒歩で20分くらいの所にある。

普段はクロスバイクで通勤しているが会社にクロスバイクを取りに戻ると遠回りになるので仕方なく歩いて帰る。

明日、少しでも早起きすれば良い事だ。

駅前を抜け繁華街を歩く。

少しすると小さな公園が見えてくる公園を過ぎれば俺のマンションがある住宅街だった。

「なあ、遊びに行こうぜ」

「良いじゃん。良いじゃん」

公園の中から若い男2人の声が聞こえて来た。

「こんな夜遅、こんな所で、ナンパか？」

チラッと公園の中を見ると街灯を背にして黒っぽいワンピース姿の女の子が怯えるように俯いている。

その前で男が2人言い寄っているのが見えた。

「まあ、俺には関係ないか」

平々凡々に生きていたい俺はトラブルに巻き込まれるのが嫌だった。公園を通り過ぎようとして俺は立ち止まってしまった。

何故、その時立ち止まったのかは判らない。

ただの気まぐれだったのかもしれないが、気が付くと俺は持っていたブリーフケースを女の子と男の顔の間に突き出していた。

「ああん、何だデメエ」

「邪魔すんな！」

2人に男は見るからにストリートファッションで遊び人風だった。会社の最寄りの駅はかなり大きな駅なので駅前は栄えている。

こう言う輩も沢山いる訳だ。

「嫌がつているんだから可哀相だろ」

「うるせえ！」

人の話も聞かずに俺の胸倉をいきなり掴んで殴りかかってきた。

「ひい！」

女の子の悲鳴が聞こえる。

「痛つてて」

殴り飛ばされて尻餅を着いて、殴られた口元を触ると少し血が出ている。

こりや痣になるな、そんな事を考えながら立ち上がりスーツに付いた土ぼこりを払い落とす。

男を見ると俺の事など眼中に無いのか女の子に詰め寄っていた。

男に向かって右足を勢い良く踏み出し右足を軸にして体を捻る。

一瞬だけ男が俺の方を見た、次の瞬間。

俺の左足の踵が男の腹にめり込み、男は腹を抱えて後ろに吹き飛んだ。

「野郎！」

もう1人の男が殴りかかってくる。

それをかわして男の腹に膝を叩き込み、蹲った背中に両手を振り落とすと男は地面に倒れこんだ。

近くにあったブリーフケースを拾い上げ、これ以上巻き込まれるのが嫌で立ち去ろうとすると俺の肘が引つ張られた。

見ると女の子が俺のスーツの袖を掴んでいた。

うな垂れて溜息をつき、再び顔を上げると彼女は俯いていて長い前髪で顔の表情は見えない。

スーツを掴む手を見ると僅かに震えている。

「家まで送るから」

仕方なくそう言う彼女は何も言わずに左手で指差した。

喋れないのか？

そんな事を思いながら彼女の指差す方に歩き出す。

彼女は黒いロントリーを来て肩紐のある黒地に赤いチェックのワン

ピースを着ていた。

そして俯いたまま何も喋らず指を差すだけ。コンビニの小さな袋を持ったまま。

たぶん、コンビニに買い物に来てあの男達に捕まったのだろう。

そんな事を考えていると大きなマンションの前で彼女の足が止まった。

「ここで良いのか？」

すると彼女が小さく頷いた。

「それじゃ、俺はここで」

「あ、あのう。お礼を」

「へえ？」

今にも消えそうな声がした。喋れるんじゃないか、そう思ったが丁重にお断りした。

「でも、怪我の手当てを……」

口元が少し切れただけでたいした怪我じゃない。

まあ、明日になれば痣になるだろうけれど、怪我の手当てってまさか……

彼女の部屋でって事なのか？

それにしても警戒心が無さ過ぎだ。

こんな遅い時間に見ず知らずの男を部屋に入れるなんて、まあ、助けてもらったお礼かもしれないがだ。

「それじゃ、俺はここで」

もう一度そう言って、俺はスーツの袖を掴んでいる彼女の手を外して彼女と別れた。

もう2度と会うことは無いだろう。

それに何処かで出会ったとしても俺は彼女の顔を見ていないのだから会ったとしても判らない。

#1-4・付き合っているのか？

翌日、時間ギリギリで出社する。

「はぁ、間に合った」

「遅いぞ、ギリギリだ」

「おはよう、藤堂」

「ああ、おは？」

会社にクロスバイクを置いて帰ったのをすっかり忘れていて、いつもどおりに起きてしまい走って会社まで来る嵌めになったのだ。

深呼吸をして一息ついてデスクに座ると、目の前のデスクにいる藤堂が口元の絆創膏をじっと見ていた。

「喧嘩か？」

「ち、違う。ぶつけたんだ。昨日、酔って帰った時に」

「しかし、それはどう見ても殴られた傷だ」

まあ、藤堂ならばれても仕方が無い。

藤堂一弥とは入社時の研修で同じグループになり初めて知り合ったのだが、その時からリーダーシップを取り皆に的確な指示を出して課題を進めていた。

俺はと言うと入社のも機が動機だけに、おちゃらけて皆の気分を和ませていた。

「野神。お前、猫かぶっているだろう」

「へえ？ 俺が？ 藤堂君、俺はこれが地だよ」

「それにしてお前の履歴は不思議だな。有名私立の超進学校を卒業してその後は海外生活で、ここに入社して来たのだろう。周りは大卒ばかりなのに」

「まぐれで試験に受かったんだよ」

「面接はにまぐれは無いだろ」

「俺はこんな性格だからね。口は上手いのさ」

「何で大学に行かなかったんだ？」

「家の都合だよ」

「そうか」

それからも度々突っ込まれたが、そのうちに諦めたのか突っ込まなくなり同じ部署に配属されて無二の友になった訳だ。

「それじゃ、俺は外回りに行つて来る」

「のっち、俺も行く」

「だから、のっち言うな」

そんな事していると回りから笑い声が聞こえた。

「本当に、お前達は凸凹漫才しているみたいだな」

「でも、私たちの癒しですよ」

そんな事を言われ足早にブリーフケースを持ち営業部を後にする。

代表取締役が若い所為かこの会社はかなり緩い。

それでも大きな企業なのでしっかりしてはいるのだけれど、業務をきちんとしていればそれ以外はかなり緩やかになっている。

だからこそ人気がある会社なのかもしれない。

それに代表取締役は何故か社長と呼ばれるのを嫌う。

入社式の挨拶でも『社員一人一人が社長なのだ。自分はただの代表にしか過ぎない』と言っていたくらいだ。

エレベーターを降りて1階のホールに出ると丁度入り口から件の代表取締役が歩いてきた。

「おはよう御座います」

そんな声があちらこちらから聞こえてくる代表はきちんと挨拶に答えてくれる。

俺と藤堂がすれ違い様に挨拶をすると手を上げて挨拶を返してくれた。

代表の少し後ろにはあの『ミス侍』が歩いている。

彼女とすれ違う寸前、有り得ない事が起きた。

彼女が立ち止まり俺たちに向って深々とお辞儀をしたのだ。

それもう少し頬を赤らめて瞳が揺れていたように見えたのは気のせいじゃないだろう。

一瞬の出来事なので何が起こったのか判らずボーとしていると藤堂が脇に肘を入れてきた。

「ぶふお」

思わず変な声を上げてしまう。

「お前、何をした？」

「お、俺？ 俺は何もしてないよ」

「それじゃ、何でお前をあんな恥じらい顔で見ながらお辞儀する」

「だ、だから知らないって」

気が付くと視線が痛い。

代表達はエレベーターに吸い込まれて行った。

藤堂の顔を見ると眉間に皺を寄せて俺を睨みつけている。

ただでさえ藤堂は背が高く営業部の貴公子なんて呼ばれるくらいだから社内でも知らない人は居ないくらいだ。

その上、あの『ミス侍』が俺達に？ 向ってお辞儀をしたのだ。

注目を集めないはずが無かった。

「ああ、俺、アポ取ってあるんだ。急がなきゃ」

堪らず表に出ようとすると思根っこを藤堂に掴まれた。

「アポなんているか、ただの店舗周りだろ」

「は、離してくれよ。大事な約束があるんだよ」

「殴るぞ」

「うう、にゃーん」

猫の真似をして頬に握り拳を当てると藤堂はまるで本物の猫を摘み出すみたいに俺を会社の外に連れ出した。

「昼に連絡するから社に一度戻って来い。いいな」

有無を言わさない様に言い放ち、藤堂は会社の駐車場に歩いて行ってしまう。

「はあゝ意味判らん」

溜息をつきながら俺は駅に向かい歩き出した。

都内の店舗を周り情報交換や新商品の説明をしいると携帯が着信を知らせた。

見ると藤堂からのメールだった。

『田澤に1時』

『田澤』と言うのは会社の近くにある蕎麦屋の名前だった。

仕方なく1時前に『田澤』に行くと既に藤堂は待ち構えていた。

「すいません。天蕎麦のセットで」

店員に声を掛けて藤堂の居る座敷に上がった。

「お疲れ」

「……………」

「一弥、何を怒っているんだ？」

「怒っていない」

どう見ても不機嫌なのが見て判る。

「お前、俺に何か隠しているだろう」

「なんも」

「嘘付け」

「お待ちどう様でした。天蕎麦セットです」

店員が蕎麦を運んできたので割り箸を割って食べ始める。

呼び出されたとは言え休憩時間は貴重だった。

それでも外回りをしているとそれなりに自分で時間はどうにでもなるのだが、今は一刻も早く藤堂の前から消えたかった。

「一ノ瀬と付き合っているのか？」

「ぶっふお、げほ、げほ、げほ」

いきなり藤堂が変な事を言うからネギが気管に入ってしまった。

「うう、死ぬかと思った。そんな事あるか！」

思わず突っ込みを入れてしまう。

「それじゃ何で？」

「知らん」

俺が一番訳が判らないのに聞かれても答えようが無く腹が立ってき

た。

無言で蕎麦を食べる。

「俺じゃなくて藤堂にお辞儀をしたのかも知れないだろ」

「そんなはずは無い、一ノ瀬にキスされたくせに」

「ば、馬鹿。こんな所でそれを言うか？」

驚いて辺りを見回すが社の人間はいない様だった。とりあえず胸を撫で下ろした。

「藤堂、マジで怒るぞ」

「悪い、悪い。お前をからかうと楽しくてな。つい」

「何がついなんだよ。あんな話を誰かに聞かれたら俺の平穏な日常は泡の様に消えてなくなるんだぞ」

「しかし、あれが本当に侍なら時間の問題だろ」

「確かに今は凄く社に戻りたくない気分満載だよ」

「でも、はにかみながらお辞儀だからいいが。泣いていたりしたら大騒ぎだぞ」

「冗談にしてはきついから止めてくれ。そんな事になったら会社に居られなくなるだろうが」

「まあ、そうだな。鬼畜扱いされて女子社員からは軽蔑されて男子社員からは嫉妬され憎悪の的になるだろうな」

「うう、怖」

会社に戻りエレベーターホールに向かい藤堂と歩いていると視線が突き刺さった。

「手遅れかも」

「まあ、気にするな」

藤堂は良いよな、部外者だからな。

そんな事を考えていると専務が前から歩いてくる。

専務はかなり年配で前代表取締役、今の相談役の右腕で今は自由奔放な若い代表のお目付け役の様な立場の人なのだが如何せん目立つ人じゃなかった。

その後ろからシックなワンピースを着て、軽くウェーブのかかった栗色の髪を揺らしながら秘書の双葉香蓮さん^{ふたばかれん}が歩いてくる。

香蓮さんが佇んでいる場所だけに蘭の花が咲いているようなオーラが満ちている。

地味で目立たない専務は他社でも双葉さんを見てうちの専務だと認識する人が多いと聞いた事がある。

因みに社内では『姫』と呼ばれ『ミス侍』と人気を二分しているらしい。

「あら、藤堂君。お久しぶり」

「ご無沙汰しています。双葉さん」

満面の笑顔で双葉さんが藤堂に嬉しそうに話しかけている。

何でも双葉さんは藤堂のお姉さんの同級生で大親友らしい。

その為に藤堂の事は子どもの頃から知っているると藤堂本人から聞いた事があった。

「あら、そちらは野神さん」

「へえ？ お、お疲れ様です」

「うふふ、やっぱり可愛い」

お辞儀をして思わず体が硬直してしまう。

何で俺の名前を知っているんだ？

藤堂なら兎も角としてあまり目立たない様にしているし営業成績だつて中の下だ。

そんな俺の事を彼女は知っていた。

それも『やつぱり』ってどう意味だ？

「それじゃ、専務参りましょうか」

そう言つて双葉さんは小さく手を振つて専務と歩いていってしまった。

「なあ、藤堂。お前さ、双葉さんに俺の事何か話したのか？」

「いや、ご無沙汰していますと言つた筈だが。入社してからまだ数回しか会つてないが」

「じゃ、何で俺の事知っているんだよ」

「知らん」

「お前以外に接点なんか無いんだぞ」

「キス」

藤堂がぼそつと呟いた。

そう言えば同じ秘書課か……

俺はうな垂れて営業部に戻り午後の仕事を卒なく終わらせて定時に退社した。

1 - 5 ・キリストの涙なのね。素敵

ここ数日色々な事があり真っ直ぐ帰る気になれず。
裏通りにある隠れ家的なワインバー『Vino』に寄ることにした。

この店は半地下になっていて奥には個室もあるが今日は1人なのでカウンターに座る。

「あら、今日は1人なの？ 藤堂ちゃんと一緒にじゃないの？ つまらないわね」

「独りで悪かったな」

「あら、私はのっち一人でも嬉しいわよ」

「嘘つけ」

線の細い『Vino』のマスターがいつもの真っ白なスタンドカラーのシャツに黒いパンツに黒いソムリエエプロン姿で出迎えてくれた。

因みにここのマスターはそっち系の人だ。

それでもシニアソムリエの資格を持っていてその筋では結構有名な人らしい。

「今日はどうするの？」

「グラスは何？」

「白がヴェルデッキオ、赤がダブルツオ。そうそうラクリマクリスティーもあるわよ」

「それじゃ、それで」

「珍しいわね、赤なんて」

「色々あつて泣きたい気分なんだよ」

「それで、キリストの涙なのね。素敵」

マスターはつまみにガーリックトーストとパルミジャーノレッジャノを出してくれた。

会社の事や藤堂の事などを話しながらワインを飲みチーズを摘む。

3杯目でいい気分になってきた。

「そろそろ帰るわ」

「ええ、もう帰っちゃうの？」

「まだ、やらなきゃいけない事があるんだよ」

「ネットのお仕事？」

「そう、副業と言いか趣味」

「ワーカーホリックなんだから、体に気を付けてね」

「大丈夫、昼休みにちゃんと昼寝しているから」

そう言って店を出る。

副業と言ってもメールのチェックや連絡事項を報告するだけなのだが結構時間がかかったりする。

まあ、最初は趣味のつもりだったが回りに流されていると言った方がいいのかもしれない。

この副業の所為で睡眠時間があまり取れないので、無駄な通勤時間を減らす為に会社の近くにマンションを借りている。

そのマンションに近づくともマンションの前に人影が見えた。

嫌な予感がしたが入り口はそこしかないのですそのまま歩いてその人影に近づいた。

その人影は俺に気が付いてこちらを見ていた。

やはり昨夜の彼女だったって……待てよ。何で俺の家を知っているんだ？

流石に昨今のニュースなんかを仕事柄チェックしているので少し怖くなってきた。

「こんばんは、あのう昨日はありがとう御座いました」

消えそうな声で彼女が俺に言ってきた。

「何故、君がここに居るんだ？ それに何でここが俺の家だと？」

「あ、あのう。それは……」

彼女が困ったようにモジモジしていた。

「もし、昨日みたいに変な男に絡まれたらどうするんだ？ 直ぐに

「帰りなさい」

俺が少し強く言うと彼女は俯いてしまった。

そして手に持つている手提げ袋に光る物が落ちた。

「えっ？ ごめん。強く言い過ぎた」

すると彼女は何も言わず俺の横を走り抜けて行った。

その時、確かに頬を伝う涙が街灯で光っていた。

「俺が泣かせちゃったのか？」

「一体何なんだ？ 俺が泣きたい気分満載だよ……」

2 - 1 ・嫌われたかもしれない

翌朝、出社すると昨日の侍の事が皆に知れ渡っていて。

特に男子社員からの視線が突き刺さりウニの親玉ガンガゼ見たいな状態だった。

すると後ろから声がした。

「野神、おはよー」

ロビーに響く朝から爽やかな、その声は藤堂だった。

すると今度は女子社員の視線が集まり棘の密度が急激に増した。

「藤堂、離れる。視線が痛い」

「俺の所為じゃないだろ」

「はあ、朝から疲労感満載だ」

「何があつたんだ？」

「ストーカーにあつた」

「はあ？ お前に？ 何で？」

「知らないよ。一昨日の夜、男に絡まれている女の子を助けたんだ。そうしたら昨日の夜にマンションの前に立っていたんだ」

「それで」

「『また絡まれたらどうするんだ、帰れ』って言ったらその女の子が泣きながら走っていった」

「刺されるな、確実に」

「一弥、助けてよ」

「知らん、知らない事に首を突っ込むのが悪い」

「じゃ、一弥は助けないのか？ そう言う状況で」

「いや、それはだな。でもなんでお前のマンションを知っていたんだ？」

「知らない、だからストーカーなんじゃん」

そんな話を話していると出勤する社員の数が増えてきた。

早朝会議を終えた代表がエレベーターから出てくる。

そしていつもの様にその後ろには『ミス侍』が……

俺達の前まで来ると俺の顔を見るなり一筋の涙を零し、流した本人の顔も強張り少し驚いていた。

周りの挨拶の聲が一瞬で消えて玄関ホールが静まり返る。

不審に思った代表が振り返り一ノ瀬さんに声を掛けた。

「どうしたんだね、一ノ瀬君」

「申し訳御座いません。目にゴミが入って」

「大丈夫かい？」

「はい。ご心配には及びません」

そう言つて立ち去った。

終わった、俺の日常が崩れ落ちた瞬間だった。

俺は思わず全身から力が抜けてブリーフケースを落としてしまった。

周りがざわつき初めて俺は藤堂に引き摺られる様にエレベーターではなく階段で3階の営業部に向つていた。

午前中は何の仕事をしていたのかも覚えていない、それでも何も言われなかったのはミスが無かったからだろう。

昼休みに社食で簡単に食事を済ませて俺は藤堂に連れられて誰もいない屋上に来ていた。

「お前、本当に何もしてないのか？」

「さあ」

「『さあ』ってな。あれは尋常じゃないだろ、泣いていたんだぞ」

「知るか！俺が一番混乱しているんだ！」

気が付くと俺は藤堂の胸倉を掴んでいた。

「すまん、俺が悪かった。お前が感情を露にしたのを始めてみたよ。本当に何も知らないんだな」

「はあゝ訳判らねえ。クソが」

「落ち着け、お前がカリカリしたら收拾がつかなくなるだろう」

その時、藤堂の携帯が鳴った。

「ん？ メール？ 姉貴からだ」

藍花商事本社ビル最上階の秘書課では……

「はあゝ疲れた。でも何があっただろう。完璧主義者の一ノ瀬さんがあんなミスするなんて」

「花、お疲れ様。人それぞれ誰にでもミスはあるでしょ。それをフオーするのが仲間の仕事よ」

「でも、香蓮さん。今日の凜子さんはおかしいですよ」
そこに一ノ瀬が戻って来た。

「凜子、こっちに来なさい。あなた何があつたの？」

「私……嫌われたかもしれない……」

一ノ瀬の瞳に光はなく憔悴しきっていた。

そして香蓮が事の顛末を一ノ瀬から聞きだしていた。

「花。今夜、時間取れるかしら？」

香蓮の言葉に直ぐに反応して御手洗がスケジュールの確認をし始めた。

「今夜ですか？ ちょっと待ってください。大丈夫です、今日の午後はフリーなので」

「それじゃ、のっちを召喚するわよ」

「えっ？ な、何で野神さんを？」

「凜子がこうなった元凶だからよ。うふふ」

「あいつ、締め上げてやる」

双葉は面白い事を見つけた子どもの様な笑顔になり、御手洗さんの目からは炎が吹き出し拳を握りしめていた。

藤堂が受け取ったお姉さんのメールは今夜『vino』に来る事、時間は7時。そして野神さんを必ず連れて来る事。

さもなくば……髑髏マークつきだった。

「と言うわけだ。判ったな」

「意味が判らん。大体、俺はお前のお姉さんと面識がない」

「じゃ、どうするんだ」

「行かない。帰る」

「子どもみたいな事を言うな」

「藤堂、可笑しいと思わないか？ 面識がないお前の姉さんが何で俺を名指しして来るんだ？」

藤堂は少し考えてから答えを出した。

「確かに同期に面白い珍獣が居るとは言ったが……」

「珍獣言っな。どういう紹介しているんだよ」

「でも、うちの姉貴が切れたら怖いぞ」

「ああ、判ったよ。行けばいいんだろ。行きますよ」

#2・2・トリオって古！

午後は流石に社内居づくくて、外回りの仕事を回してもらった。定時ギリギリに会社に戻り約束の時間までブラブラと時間を潰してから藤堂と『vino』に向う。

「帰って〜」

「本当に嫌そうだな」

「当たり前だ、何で俺がお前の姉さんに呼び出されなきゃいけないんだ？」

「さあな、行けば判るだろう」

大通りから裏通りに入りしばらくすると『vino』の看板が見えてくる、階段を下りると木のドアを藤堂が開けた。

「あら、藤堂ちゃん。いらっしやーい、今日は子ども連れなの？」

「子ども言っつな。けん……」

「それを言っちゃ。めっ！」

マスターの名前を言おうとすると目潰しの様に長い指が飛んできた。

「危ねえなあ」

「瑞貴ちゃんもね」

「瑞貴言っつな。マジで叫ぶぞ」

「嫌あ〜ん」

マスターが頬に手を当てながら腰をくねらせた。

藤堂がそんな事にはお構いなくマスターに尋ねた。

「姉貴と待ち合わせなんだけど」

「あれ？ お姉さんは来てないけれど。お姉さんのお友達なら来ているわよ」

「藤堂の姉さんの友達？」

マスターの言葉に俺は嫌な予感がした。

「それって、もしかしてうちの会社の人？」

「そう、花のトリオが揃い踏みよ」

「トリオって古！ 藤堂、悪い。帰る」

一応、突っ込みを入れて踵を返しドアに向おうとすると藤堂が声をかけてきた。

「アホが。真実を知るチャンスだろうが」

「いいよ、もう会社辞めるから」

その瞬間、ゴツンと鈍い音が店内と俺の頭の中に響きわたった。

「殴るぞ」

「痛つてえ！ 殴ってから言っな！」

俺が頭を抱えてしゃがみ込んで居ると、どこからか携帯の着信音が聞こえる。

藤堂がスーツの内ポケットから携帯を取り出した。

「姉貴からだ」

「なんて？」

「ほれ」

そう言つて藤堂が携帯を俺の目の前に差し出した。

『香蓮ちゃん達が待っているからね。お姉ちゃんはこれから仕事なの（ハート）』

「罨にまんまと嵌められた……」

一気にマリアナ海溝に気持ち沈む。

深海6500が深く深く潜行するように……

「とりあえず行くぞ」

「好きにしろ」

ゾンビの様に腕をダラッと下げてうな垂れて藤堂の後について歩いた。

「おいおい、そんなのっち始めて見たぞ」

藤堂の背中を見ながら奥の個室に向かう。

個室からは女の子が喋る声が聞こえていた。

「失礼します。藤堂です」

「いらつしゃい、待っていたわよ」

最初に挨拶をしたのは『姫』こと藤堂の姉さんの大親友の双葉香蓮さんだった。

そしてその隣には一ノ瀬さん。

奥には御手洗さんが座っていた。

この『御手洗 花みたらい はなさん』が秘書課のナンバー3だ。流石に一ノ瀬さんと双葉さんがいては目立たないかもしれないが、それでもハイレベルには違わなかった。

ショートカットで目鼻立ちがはつきりしている。

一ノ瀬さんと双葉さんを足して2で割ったようなオールマイティーな人らしい。

因みに通り名は『小町』と呼ばれていた。

その御手洗さんが俺の事を睨みつけていたが、俺は構わず一瞥して藤堂の横に座った。

グラスにワインが注がれて香蓮さんが乾杯の音頭を取った。

「それじゃ、チンチン」

「お疲れ様です」

「こうして、お2人と顔を合わすのは初めてよね」

「そうですね」

俺の機嫌の悪さを察して藤堂が返事をした。

「うーん。何か調子が狂うわね。いつもの野神君はどうしちゃったの？」

「ああ、こいつですか？ 騙されたから頭にきているんじゃないですか？」

「騙したつもりはないのだけど。こうでもしないと来てもらえないと思って美雪にお願いしたのだけど。ゴメンなさいね」

因みに美雪とは藤堂の姉さんの下の名前だった。

「香蓮さん、こんな奴に謝る必要ない。凜子さんを傷付けて」

御手洗さんのきつい言葉に俺が立ち上がろうとするのを藤堂が冷静に制して、俺を見てから藤堂が立ち上がった。

自分の姉が一枚咬んでいた事を気にしているのだろう。

「こんな雰囲気で呼び出されたのなら失礼させていただきます」

「花！ 今すぐ謝りなさい。どうしてあなたはいつも先走るの？

あなたの悪い癖よ。それに誰の為にこの席を設けたと思っているの？ 友達としては正解かもしれないけれど、これが仕事なら完全にアウトよ」

香蓮さんの叱責が飛んだ。

「香蓮さん、すいませんでした」

「謝る人が違うでしょ」

「野神さん、藤堂さん。出過ぎた真似をして申し訳ありませんでした」

御手洗さんが立ち上がり唇をかみ締めながら頭を下げた。

御手洗さんは座っても中々顔を上げなかった、恐らく香蓮さんに叱責されて今にも泣き出しそうだったのだろう。

俺はそんな御手洗さんを見てクールダウンした。

御手洗さんが怒り出し、そして双葉さんが裏で手を回してでも俺をここに来させた理由はただ1つだけしか無いからだ。

それは一ノ瀬さんの為だろう、しかし俺には理由が判らなかった。

「ふう、御手洗さん。そんなに気にしないで下さい。それに双葉さんも。俺は気にしてないですから。仕切り直しましょう」

そう言っただけは立ち上がった。

「おい、野神？」

「マスターに用事だよ。帰ったりしないから心配するな」

藤堂が心配そうに声をかけてきたが軽く返事をして、ヒラヒラと手を振りながらカウンターに居るであろうオカマもといマスターの方へ向った。

#2 - 3・イギリスに居たの？

席に戻りしばらくするとマスターが怪訝そうな顔でグラスとワインを大事そうに持ってきた。

「のっち、本当に飲んじゃうの？」

「もちろん、マスターも一口どうぞ」

「本当に良いの？ もう駄目って言ってもテイ스팅させてもらうわよ」

そう言いながらグラスを配り終わるとワインを丁寧に抜栓して、皆のグラスに注いで回った。

「マスターそのワインは？」

双葉さんが不思議そうな顔をしていた。

「のっちのコレクションよ。イタリアワインの元祖シンデレラワインと呼ばれる、ルーチエの2005ね」

「それじゃ、いただきましょう。チンチン」

何故かマスターが仕切っていた。

「うーん、美味しい。最高ね」

「本当だ、凄く美味しいし香りが素敵」

「それはそうやってスーパーナだもの、お値段もスーパーよ」

「マスター、そろそろカウンターに戻った方が良いかと」

「あら、お子様に怒られちゃった。それじゃご馳走様。のっち」

「お子様ものっちも言うな！ 健太が！」

「嫌ーん、のっちの馬鹿！」

自分の本名を言われて泣きながら女の子走りてマスターはカウンタ―に帰っていった。

「うふふ、いつもの野神さんに戻ったわね」

「俺の地ですから」

「そうかしら。幼い頃に母親と死別し父親に引き取られる。その後は小中高一貫教育の有名私立高校を卒業して海外暮らしをしていた。それ以外の事は何も判らないのよね。どう調べても」

「調べたのですか？ 個人情報をも？」

「あら、今時個人情報なんて調べようと思えばいくらでも調べられるわよ。私達にかかれば」

まるでどこぞの序列つきのメイドさん達みたいだと思いながら話題を変えた。

「それより、今日は何の為にここに呼び出したのですか？」

「それは判っているんじゃないの？ 野崎君。さつき雰囲気が変わった時に」

さすが藤堂のお姉さんの大親友と言つべきか双葉さんの洞察力も並外れているのを感じた。

隠してもたぶん大抵の事はお見通しなのだろう。

「一ノ瀬さんの事ですよね。でも俺には心当たりがなくて」

「それじゃ、これでも？」

双葉さんが徐に一ノ瀬さんのポニーテールのリボンを解いた。

「えっ？ はっ！ も、もしかして……」

「野神、どうしたんだ？ おい野神？」

一弥の声が右耳から左耳に抜けていき、体から力が抜けて椅子にへたり込んだ。

そんな俺を見て一弥が俺の肩を揺らした。

そこで何とか意識を繋ぎとめた。

「俺が助けた女の子って、もしかして一ノ瀬さんだったの？」

「はあ？ マジで言っているのか？ 瑞貴」

一弥も驚いて冷静さを欠いている。

俺を下の名前で呼ぶくらい動揺している一弥を初めて見た。

髪の毛をおろした一ノ瀬さんは間違いなくあの女の子だった。

すると、一ノ瀬さんが泣き出してしまった。

「ご、ゴメン。俺、気が付かなかった。だってあまりにイメージが

遠くって」

「これが凜子の素顔なの」

「わ、私、野神さんに嫌われちゃったから……」

嫌われた？ あの時、女の子が泣きながら走り出した訳が初めて判った。

「それは、誤解というか一ノ瀬さんだって判らなかった訳だし。もしもだよ、前の日に初めて出会った人が次の日に自分の家の前で待っていたらどう思う？」

「ええ、凜子さんそんな事したの？」

「だって、お礼がどうしても言いたくって」

「そりゃ、駄目しょ。まるでストーカー見たいじゃん」

「うう……」

御手洗さんの突っ込みに一ノ瀬さんが俯いてしまった。

しかし、真実が判ったのは良いが明日からの事を考えると憂鬱になる。

他の大多数の社員の誤解はそのままなのだから。とりあえずその問題は放置した。

考えても答えなど無いのが判っていたから。

「それで、いきなり涙なんか流したんだ」

「えっ？ 野神君それってもしかして社内で噂になっっている営業一課のマスコットがミス侍を泣かせたって言うやつかしら？」

「まあ、マスコットはともかく。そうですな多分」

「凜子も花と一緒にね。まだまだ鍛え甲斐があるわね」

「あうう……ゴメンなさい」

一ノ瀬さんがテーブルに頭が着くくらい俯いてしまった。

「まあ、噂なんて良いですよ。そのうち無くなりますから。謎も解けましたし、これで誰かさんが言っただみたいにストーカーに刺される事も無いでしょうから。なあ一弥」

藤堂の渾身の突きが俺のわき腹に炸裂した。

「へぶう！ 一弥お前なあ」

「突くぞ」

「突いてから言っな！」

今度は俺が一弥の首を絞めて揺すった。

「ぷっ、ふふふ。面白い」

俯いていた一ノ瀬さんが肩を震わせながら笑っていた。

「でも、まだ判らない事があるだろ。屋上のキ……」

左手で目の前の皿にあったバケットを一弥の口に突っ込んで言葉を瞬殺した。

「塞ぐぞ！」

「ぷふあ、死ぬかと思った。塞いでから言っな！」

一弥がバケットを口から吹き出して叫んだ。

一弥の事だ、半分マジ切れだったのだろう。でもそれは1人の笑い声で有耶無耶になった。

俺と一弥の目の前で一ノ瀬さんがお腹を抱えて大笑いしていた。

「あゝ苦しい、でも面白い」

一ノ瀬さんがひいーひいー言いながら笑い転げていた。

「初めてみた、凜子さんがこんなに笑っているの」

「そうね、やっぱりのっちは凄いわ」

一ノ瀬さんのお陰で一弥もいつもどおりに戻っていた。

少し顔が引き攣っていたがそこは無視をする。

「それで、野神君は凜子の事をどう思っているの？」

「はあ？ 双葉さん……いきなりとんでもない爆弾発言を、いったい何を言っているんですか？」

「そのままよ、凜子の事が好きなのか嫌いなのか」

「ちよつと良いですか？ 俺は一ノ瀬さんの事を何も知らないんですよ。そりゃ入社して1年経ちましたから秘書課のクールビューティーで人気ナンバー1のミス侍と呼ばれている事と、こんな言い方は失礼かも知れませんが、こんな可愛いらしいところがある事を今の今知った訳で、いきなりどうかと聞かれても返答に困ります」

「さすが、真面目ね。とりあえず付き合っちゃおうなんて考え無いの

ね」

「他の奴等はどうか知れませんが、俺はいきなり付き合ってくださいなんて言って付き合い始める奴を信用しません、男も女も」

「一目惚れでも？」

「それは稀なパターンですよ」

それは俺の本心だった。

「本当に真面目で良い子ね。でも凜子は野神君が入社する前から知っていたみたいだけれど」

「一ノ瀬さんが俺の事を入社前からですか？」

俺には覚えが無かった。

確かに会社に居る時とのイメージとかけ離れていたもので、俺が助けた女の子が一ノ瀬さんだと判らなかったがそれでも、入社前に出会っていた記憶が無いのだ。

「ほら、凜子。ちゃんとしなさい」

「でも、私……」

「私達は何も知らないとも思っているの？ 屋上で寝ている野神君にキスしたくせに」

「私、驚いたもん。凜子さんがあんなに積極的だなんて」

一ノ瀬さんの顔が真っ赤になった。

やはり一ノ瀬さんだったんだ、真実を晒されてなんだか気恥ずかしい。

「野神君も気付いていたんでしょ？」

「いや、何となく。ですね」

「謎が解けたな」

「まだ、解けてない」

一弥の言葉にボケも突っ込みも出来なかった。

すると一ノ瀬さんが一枚の写真をテーブルの上に置いて俺の方へ差し出した。

その写真を手に取って見る。

「これって、俺だ。それじゃあの時の女の子が一ノ瀬さんなの？」

「はい！」

その声は意思のあるはっきりした返事だった。

一弥が俺の手から写真を取った。

「ビッケベン？ ロンドン？」

その写真はロンドンのビッケベンをバックに立っている俺と女の子の写真だった。

「ロンドンってのっちはイギリスに居たの？」

「ええ、まあ」

2 - 4 . の事が好きです

それは俺がイギリスに居た時の事だった。

たまたま用事でロンドンに行った時に1人の女の子と出会った。

その女の子は待ちぼうけをしているようだった。

見るからに観光と言う感じの格好でキョロキョロしている。

無視すれば良いのだがその時は何故だか気になったのだ。

ただの気まぐれなのかもしれない。

「ねえ、どうしたの？」

「へえ？」

思い切って日本語で声をかけたら女の子が驚いて素っ頓狂な声を上げた。

しかし、直ぐに綺麗な英語で人違いじゃないかと聞いてきた。

それでも俺は日本語で話しかけた。

それはたぶん日本語で会話をしたかったからだろうと思う。

「ゴメン、ゴメン。なんだか待ち惚けしているみたいだったから。観光なの？」

「あつ、日本語」

「俺、日本人だもん。英語上手だね」

「いや、あのう……」

「それだけ英語が上手いのなら問題ないね。それじゃ」

「あの、ちょっと待ってください」

ひらひらと手を振って立ち去ろうとした時、女の子に呼び止められて振り返ると女の子が困った顔をしていた。

「どうしたの？」

「あのう、待ち合わせした両親がなかなか来なくて。心配でどうしたら良いのか判らなくて」

日本から来る両親と待ち合わせをしていたらしい、俺はその女の子

に両親が乗ってくる飛行機会社と経由地などを細かくゆつくりと話を聞いた。

携帯を取り出して飛行機会社に確認してみる。

すると経由地でトラブルがあつて大幅に到着が遅れるとの事だった。

「なんかトラブルで飛行機の到着が遅れるみたいだよ」

「ありがとうございました」

「これで安心できたね」

「はい」

女の子の笑顔がとても輝いて見えた。

「これからどうするの？」

「ええっと、適当に時間を潰します」

「良かったら食事付き合わない？」

丁度、お昼前だったので聞いてみると快く付き合ってくれた。

前に知り合いに教えてもらったパブに入り俺はフィッシュ&チップ

スとビールをそして彼女はハムのサンドウィッチを注文した。

「うわぁ、サラダも付いて来るんだ」

「大体ロンドンでは、こんな感じかな」

「お酒飲むんですか？」

「えっ、可笑的い？　もしかして俺って未成年に見える？」

「うっ、うん」

「俺は一応18だよ。君は？」

「私は20です。って未成年じゃない」

「えっ、先輩じゃん。同い年くらいかと思った。それにここは18からOKだから」

「ああ、酷いよ。後輩君」

「ゴメンゴメン。そうだ、この辺を案内してあげようか。まだ、時間はあるし」

「え、良いんですか？　私、ロンドンは初めてで」

「良いよ、どうせ暇してたし。それじゃ行こうか」

「はい！」

そんな会話をしながら食事をして、大英博物館に行きゆつくり時間を掛けて館内を見てまわる。

俺はクルクルと万華鏡の様に変わる先輩の顔が面白くて先輩ばかりを見ていた。

バッキンガム宮殿へ行つて夕暮れのウエストミンスター宮殿を見て彼女が待ち合わせしていた場所に向う。

するとそこには両親らしき心配そうに辺りを見回す男女の姿が見えた。

「本当にありがとう。後輩君」

「先輩と遊べて楽しかったよ。俺も暇をもてあましていたから。それじゃ、先輩。お父さん達が心配するといけないから」

「うん、最後に後輩君の名前を教えて欲しいのだけど」

「凜子！」

その時、彼女の後ろから手を振りながら駆け寄ってくる両親らしき人の姿が見えた。

見知らぬ男と一緒に居たら拙いだろうと思ひ踵を返した。

「俺は瑞貴です。凜子さん、さようなら」

たった半日だけの出会いだった。

それでも一ノ瀬さんは覚えてくれた。

あの時の楽しかった思い出が蘇ってくる。

「何でのっちはロンドンに居たの？」

「えっ、偶々です」

「なんだか怪しいな」

本当に偶々なのだがそれでも御手洗さんが突っ込みながら探りを入れてくる。

「事情があつてしばらく暮らしていたんです。イギリスに」

「事情ね」

まだ、喰らいついてきた。

「まあ、それは置いておいて凜子はどうしたいの？ はっきりしな

さい。ずーと探していたんでしょ彼の事を」

香蓮さんの言葉に心臓の鼓動が跳ね上がる。

俺の事を探していた？

「私は、その、瑞貴君の事が忘れられなくて。私、瑞貴君の事が好きです」

一ノ瀬さんはそう言うのと俯いてしまった。

あれから何年も探していてくれた事は正直に嬉しかった。

それでも俺には直ぐには答えを出せなかった。

「探していてくれたと言うのは正直嬉しいです。でも、だから付き合いたいと言うのはなんか違う気がするんですよ」

「それはどう解釈すればいいのかしら」

香蓮さんが真っ直ぐに俺の目を見ている。

「そのままです。俺は一ノ瀬さんの事を殆ど知らないですし、一ノ瀬さんも俺の事をそんなに知っていると云えないですよ。だから俺は付き合えないです」

俺が言い終えた瞬間。一ノ瀬さんの体から力が抜けた。

「これからじゃ駄目なのかしら？ 無下に断る事はないんじゃないの？ それとも別に好きな人がいるとか」

「僕には特別な女の子はいませんよ」

「特別ね」

香蓮さんの言葉になんとか棘があるような気がした。

まあ、何年も探していた男がこれじゃ仕方が無いのかもしれない。

「香蓮さん、花ちゃん。私の為に今日はありがとう。もう、大丈夫です」

横に座っている藤堂を見ると苦虫を噛み潰した様な顔をしている。ひよっとして機嫌が悪い？

そして、一ノ瀬さんの顔を見ると当然なのだろうが落ち込んで目が虚ろになっている。

俺と初めて会ってから何年も経っている。

一ノ瀬さんの口振りから他の男と付き合っていたりしてない事が良

く判った。

3度目の気まぐれか俺は口を開いていた。

「ありがとう、こんな俺の事なんか探してくれて。お詫びって言い方も変なんだけれど。もし一ノ瀬さんの都合が良ければ今度の日曜日にどこかに一緒に行かない？」

「えっ？」

一ノ瀬さんが驚いて顔を上げた。

「2人で、ですか？」

「うん、別に誰かを誘ってもいいけれど」

俺がそう言つと真つ赤になつて俯いてしまった。

御手洗さんが一ノ瀬さんを促した。

「ああ、もうじれつたい。凜子さん、返事は？ 返事！」

「あ、は、はい。是非」

その後、待ち合わせ場所や時間のやり取りをと思い携帯を取り出すと……

俺の携帯は秘書課に拉致られて、プライバシーの一部を強奪されてしまった。

#2・5・子どもみたい

日曜日の10時に俺は彼女のマンションの前にいた。

もちろんクロスバイクで。

何処に行きたいか聞いたら天気がよければピクニックに行きたいと言われたのだ。

「あつ、おはようございます」

「おはよう」

振り返ると彼女が立っていた。

ブルーのゆるやかなギンガムチェックのガリーなワンピースを着て黒いレースのあしらわれたレギンスを穿いてこげ茶の皮のショートブーツを履いている。

そしてワンピースの上にざっくりと編まれた生成りのカーデガンを羽織っていた。

最近こんな格好の女の子は『森ガール』と呼ばれているらしい。

それに対して俺の格好はシンプルだった。

ジーンズにスニーカー、上はブルーのシャツに茶系のカーディガンと言う出で立ちだった。

「どこに行こうか？」

「どこでも良いです。その……一緒なら……」

相変わらず聞き取れないくらい声が小さい、緊張の所為なのか？

「公園にでも行ってみようか？」

「はい」

彼女が返事をして、後ろ手に持っていたものを抱えて歩き出した。

それは籐のバスケットだった。

「一ノ瀬さん、それは何？」

「あ、あのう、お弁当。ピクニックだから……」

それだけ言って赤くなり俯いてしまった。

こりゃ重症だ。

なんだか俺が苛めているような気になってきた。

この状況じゃあまり遠出は無理だ、俺の方が耐えられそうに無い。

仕方なく会社の前の大きな公園に来てみた。

「うわあ、初めて来ました」

一ノ瀬さんが嬉しそうに走り出す。

その顔はロンドンで大英博物館に連れて行った時そのままの笑顔だった。

一瞬ドキツとするが平静を装う。

「初めてつて会社の目の前なの？」

「はい、いつもは代表と一緒にですから」

「ああ、そうか。毎日美味しいご飯食べているんだ」
すると、ほんの一瞬だけ彼女の顔が翳った。

「そうでもないですよ。結構忙しくて食べられない時もあるし、あまり他の人と食べた事が無いんです」

「そうなんだ、大変だね。俺らは結構時間が自由だからね、外回りに出ている時は開いた時間に食べるしね。会社にいれば誰かと食べる事もあるけれど殆ど藤堂と一緒に多いかな」

「ええ？ 女性の社員さんと一緒にじゃないんですか？」

「へえ？ どうして？」

「あ、あのう藤堂さんも野神さんも社内では人気があるから」

「藤堂はともかく俺はそんなに人気があるとは思えないけど、まあ珍獣とかマスコット扱いじゃないかな」

「そんな事無いです、野神さんは素敵……あつう……」

もうこれで何度目だろう。また、真っ赤になって俯いてしまった。
俺は自転車を押しながら一ノ瀬さんの横を歩いている。

なんだか今日は一ノ瀬さんが小さく見えた。

「そう言えば、市ノ瀬さんは身長どれくらいなの？」

「私ですか？ 160ちよつとです。仕事中はヒールを履いていることが多いので」

160ちよつとつて微妙な言い方だなあ。まあ、俺も自称170な
んだけど俺と背丈はあまり変らない気がした。
しばらく歩くと噴水が見えてきた。

休日とあつて人も多いが広い公園なので込み合っているという感じ
は全くしなかった。

噴水の近くの木陰に彼女が持ってきたシートを引いて2人で座る。
もちろん自転車は遊歩道の柵にロックして。

「気持ちが良いな」

俺が伸びをして横になると彼女が笑っていた。

「そんなに気持ちが良いですか？」

「うん」

「それじゃ私も。うわあ、空が広い」

隣で一ノ瀬さんが両手を上げながら横になった。

しばらく2人は何も喋らずに空を見上げる。

5月の風が2人の間をすり抜けていく。

すると俺の足に何かが当たった。

「ん？ 何だ、これ？」

起き上がってみるとそれはフリスビーだった。

見ると小学生くらいの男の子がこちらに走ってくる。

座ったままでフリスビーを軽く投げると緩やかに飛んでいく。

それを男の子がキャッチした。

何気なく噴水を眺めていると、フリスビーがまた足に当たった。

今度は先ほどの男の子より小さな女の子が走ってくる。

今度は立ち上がって優しくフリスビーを投げるとフリフリのピンク
色の花柄のワンピース姿の女の子が両手で挟んでキャッチして飛び
跳ねて喜んでいた。

「どうしたんですか？」

一ノ瀬さんが起き上がり、不思議そうな顔で聞いてきた。

「いや、フリスビーで遊んでいる兄妹がいるでしょ」

「はい」

「可愛いなっておもってさ」

「そう言えば、野神さんは一人っ子ですか？」

「俺？ 一人っ子に見える？ 一応、妹が居るけれど」

「一応なんて言ったら妹さんが可哀相ですよ」

「そうだね。ごめん」

どこからか赤ん坊の泣き声が聞こえてきた。

泣き声のする方を見るとフリスビーの兄妹が立っていて母親が赤ん坊をあやししながら兄妹に話しかけていた。

「車に荷物忘れて来ちゃったから、ここで待っていてね」

「ええ、嫌だよ」

「わがまま言わないで、ね。オムツを取ってくるだけだから」

「嫌だ、本当は今日パパも来るって約束したのに」

「ママ、どこに行くの？」

妹は不安そうに兄のシャツを掴んでいた。

「俺がこの子達を見てましようか？」

俺が声を掛けると母親が怪訝そうな顔で俺を見た。

まあ見ず知らずの男が声を掛けてくれれば当然の反応だろう。

小さな子どもが3人もいるのだから。

「ああ、俺、この先の会社に勤めている者なんですけど今日は彼女と遊びに来ているんですよ」

一ノ瀬さんは別に彼女では無いのだが1人で来ていると言うより女の子と来ていると言った方が安心すると思ったからだ。

そう言うとも母親が一ノ瀬さんのほうを見た。

「お兄ちゃんとフリスビーで遊んでお母さんが戻って来るのを待っているか？」

「うん」「うん！」

しゃがんで兄妹と同じ目線になって話しかけると元気良く返事をしてくれた。

「それじゃ、お願いできますか？ その駐車場まで行って来ますので」

母親の顔から緊張感がとれ笑顔になっていた。

「はい、任せて下さい」

母親が赤ん坊を抱きかかえて足早に駐車場に向かった。

俺は兄妹とフリスビーで遊ぶ事にする。

2人と俺で投げあいっこをする事になった。兄妹が代わり番に投げてくるのをキャッチして投げ返す。

お兄ちゃんの方はなかなかどうしてきちんと投げ返してくるが妹ちゃんはまだ小さい所為か上手く投げられなくて方向が定まらない、それを走って行き何とかキャッチする。

ジャンプしてキャッチすると兄妹がとても喜んだ。

兄妹が喜ぶ顔を見たくなりバックハンドや足の下でキャッチしていると母親が戻って来た。

「お母さんが戻ってきたから2人で遊んでね」

「うん、お兄ちゃんありがとう」

「ばいばい」

「それじゃあね」

そう言つて一ノ瀬さんがいる所に戻ると、一ノ瀬さんが楽しそうに俺を見ていた。

「ごめんね、一人にしてしまつて。あゝ疲れた」

「うふふ、優しいですね。野神さんって」

「そうかな、普通だよ」

「なんだか親子みたいでした」

「ええ、せめて歳の離れた兄弟にして欲しいな。おじさん見たいじゃない」

「えへへ、ごめん、ごめん」

シャツの胸元を掴んでパタパタさせてクールダウンする。

噴水のある池を渡る風がとても心地よかった。

「あのう」

「はい？」

後ろから声がして顔を上げると先ほどの親子だった。

「主人が迎えに着ましたので、私達はこれで失礼します。もしよろしければジュースでも」

「あ、ありがとうございます」

「そちらの彼女さんにも」

「すみません、なんだか」

「本当に助かりました。それじゃ」

「「お兄ちゃん。バイバイ」」

ジュースを2本受け取ると、母親が妹ちゃんの手を引いて歩き出すと兄妹そろって手を振ってくれた。

振り返ってジュースを渡そうとすると一ノ瀬さんが真っ赤になってボーとしている。

ちよつとふざけてよく冷えたジュースを頬につけた。

「ひゃあう」

「ふふふ」

「ああ、野神さん酷い！」

俺が笑うと一ノ瀬さんが俺の肩を叩いた。

「心ここに有らずだったからね」

「もう、彼女なんて言うからです」

一ノ瀬さんが頬を膨らませて怒っている、胸がちくりとして申し訳ない気がしてきた。

「ごめんね。でも、ああでも言わないとお母さんが信用してくれそうに無かったからね」

「私は別に……お、お弁当にしましょ」

「そうだね、お腹ぺコぺコだ」

一ノ瀬さんがバスケットから次々に包みを出していく。

あまりの量に驚いてしまった。

「重かったんじゃない？」

「全然、だつて普段は書類とか沢山持つて移動するからこのくらいは平気ですよ」

「でも凄い量だね。作るの大変だつたでしょ」

「料理するの好きだから」

「へえ、俺は全然駄目なんだ」

「ええ、いつも何を食べているんですか？」

「外食か弁当かな」

「それじゃ、今日は沢山食べてくださいね。はい、これ」

「えっ、これって」

「一ノ瀬さんが渡してくれたのは、フィッシュ&チップスだった。

そして嬉しい事にビネガーまで用意されていた。

「ハムサンドも作つて来ました」

ロンドンで初めて出会つた時の再現の様だった。

「いただきます。ん？ 美味い。それにこれ一番人気の鱈だ」

「良かった、喜んでもらえて」

あまりに美味すぎて喋るのも忘れて腹を空かせた子どもの様になつてしまつた。

貰い物のペットボトルのジュースの蓋を開けて喉に流し込む。

ゴクゴクと喉が鳴つていた。

「ぷっふあゝ うめえ！」

「うふふ、野神さん子どもみたい」

伸びをして一ノ瀬さんを見るとそんな事を言われてしまつた。

恥ずかしくなり照れ隠しに背中から倒れこんだ。

「はあゝ、なんだか俺だけが楽しんでいるみたいでごめんね」

「そんな事、無いですよ。普段は忙しくてバタバタしているから、休みの時はこうしてゆっくり過ごすのが好きなんです」

「そっか、そうだよ。毎日……忙し……」

昨夜も遅くまでメールのやり取りをしていた所為で、お腹が満たされて睡魔に襲われ眠ってしまったようだった。

2 - 6 . あの、やっぱり……

どれ位寝ていたのだろう何か柔らかい物が口に触れて目を覚ますと、日はすっかり傾いて風も少し冷たくなっていた。気が付くと着ていたカーディガンが体に掛けられていた。

慌てて飛び起きる。

「ごめん、マジで寝てしまったみたいだ。本当にすまない」

「ううん、大丈夫です。野神さんの可愛い寝顔も見られたし」

「はあ、面目ない」

「そうだ、紅茶も入れて来たんですけど飲みます?」

「えっ、ああ。それじゃお言葉に甘えて」

一ノ瀬さんがステンレスボトルから紅茶を注いでいる。

日が傾いて黄昏時に近い所為なのか、一ノ瀬さんの顔がどこと無く寂しそうに見えた。

「野神さんはお砂糖だけでしたよね」

その時、ロンドンで大英博物館の後で彼女とカフェに寄ったのを思い出した。

イギリスで紅茶と言えば普通にミルクティーが出てくる、その時も確か珈琲の気分じゃなかったのでミルク抜きを頼んだ覚えがあった。こんな事まで一ノ瀬さんは覚えていてくれた。

その事に胸が締め付けられた。

紅茶を飲んで帰る事にする、公園を出る頃には暗くなっていた。

「今日はありがとうございました。私の為に」

「そんな事ないよ、俺の方が楽しんじゃったみたいだし、それに寝ちゃったからね」

「気にしないで下さい。あの、やっぱり……」

「あのさ、寝ちゃったお詫びに晩飯でもどう? ご馳走するから」

一ノ瀬さんの言葉の続きを聞きたくなくて声を掛けてしまった。

自分自身に腹が立ち、齒を噛み締めた。気付かれてしまったらどうか返事が無い。

沈黙が訪れるのが嫌で声を掛けなおす。

「イタリアンでも中華でも何でもご馳走するよ」

「えっ、本当ですか？」

「うん、何が食べたい？ それとも行ってみたいお店があるとか」

「あの、皆さんが良く行く居酒屋さんは駄目ですか？」

「へえ？ たぬき？」

「そ、そうです。たぬき」

気が抜けてしまつて笑い出してしまつた。

「あはははは、ふっふっふっふふふ」

「私？ 何か可笑しいこと言いましたか？」

「いや、OK！ たぬきでいいなら」

「ああ、もう。なんだか馬鹿にされている気がします」

「そうじゃなくて、ごめん、ごめん。なんだか今日は謝つてばかりだな。それじゃ行こうか」

「はい」

一応、営業しているか確認してたぬきに向つた。

「ちわ、大将」

「おお、休日出勤か？」

「まあ、そんなところ」

「2人ならカウンターでいいな？」

大将が俺の後ろを見て眉間に皺を寄せた。

「のっち、誰だ。お前の後ろにいるのは」

「一弥に見えますか？」

「いや、可愛い女の子にしか見えん」

「じゃ、女の子でしょ」

「お前の連れだよな？」

「はあ、そうですよ。初めて俺が女の子連れでたぬきに来ました。」

これで良いですか？」

「おう！」

「生2つ！ それに熱いお絞りも！」

少し自棄になつて声を上げる。

時間が早い所為もありまだお客もまばらで日曜日と言つ事もあり会社の人間は1人もいなかった。

「お待ち」

お通しとビールが運ばれてきた。

「それじゃ、お疲れ様」

「はい」

乾杯してビールを喉に流し込む。

「ぷふあゝ染みる」

「うふふ、野神さんてやつぱり男の人なんですね」

「それって褒められているの？」

「もちろん、褒めているんです、女の子を連れて来たりしないんですね」

「あ、うん。仕事帰りが多いからね」

「それとも他のお店に連れて行くのかなあ」

一ノ瀬さんの話を聞きながら適当にお勧めを注文する。

「それも無いかなあ。俺、女の子と付き合つた事無いから」

「えっ……」

そんな話をしていると大将が突つ込みと言うチャチャを入れてきた。

「駄目だよ、お譲ちゃん騙されたらのつちの常套手段なんだから」

「あのなら、大将。マジで怒るぞ。それに彼女はそんなんじゃないよ」

「はあ、お前。本気でそんな事を言っているのか？ こんな可愛い子を前にして、ガキだな相変わらず。だから彼女も出来ねえんだ」

無性に腹が立った。一ノ瀬さんと居ると感情を抑えられないでいる自分に気付く。

席を立ち上がり一ノ瀬さんの後ろに立った。

「ちよっと、ごめんね」

「え？」

「髪触つても良い？」

「はい、大丈夫です」

一ノ瀬さんの了承を貰ってから彼女の髪を後ろから両手でポニーテールの様に束ねた。

「大将、この女の子はだれ、だ？」

「さ、さ、さ、侍？」

大将の顔が引き攣り、声が裏返っていた。

「ピンポーン、正解です。俺の言った意味理解してもらえたよね。大将？」

「は、はい」

「それじゃ、この事は藤堂以外には他言無用で」

「はい！」

大将の声が裏返っていたが聞き流して ビールを少し飲んでたぬきのお勧めを食べて店を後にする。

外に出るとすっかり暗くなり街はネオンに彩られていた。

「明日から仕事だ。帰ろうか」

「はい、ご馳走様でした」

「こちらこそ。それじゃ、バスケットを貸して」

「えっ」

一ノ瀬さんの手からバスケットを取り普段はブリーフケースを乗せているクロスバイクのフロントキャリアに括りつけてバイクに跨る。
「乗って」

「えっ、でも二人乗りは」

「気にしない、気にしない、ね」

「はい」

一ノ瀬さんが恥ずかしそうに横向きに乗る。

「ちゃんと掴まっついていてね、行くよ」

バイクを漕ぎ出すと酔って火照った体に夜風がすり抜けてとても気

持ちが良い。

漕ぐ足に力が入りビルの谷間を駆け抜ける。

「気持ち良い、私も自転車通勤にしようかな」

「良いかも」

「それよりたぬきの大將がなんだか可哀相だった」

「良いんだよ、俺のモットーは平々凡々と生きると、売られた喧嘩はすべてお買い上げの倍返しだから」

「変なの、それって両極じゃないですか？」

「俺、変人だから」

「もう、馬鹿」

そんな話を話しているうちに一ノ瀬さんのマンションに到着した。

「今日は、ありがとうございました」

「こちらこそ。それじゃ、明日、会社で」

バイクに跨り自分のマンションに向う。

まるで逃げ出す様に。

3 - 1 . 敵わないな

朝、目を覚ましてカーテンを開けると青い空が広がっていた。
そんな空とは相對するように俺の体の中にはモヤモヤした物が蠢いていた。

まさしく月曜病、ブルーマンデーそのものだった。

「おす、野神。早いな」

「おはー」

「なんだ、なんだ。朝パラから不景気な面して」

「朝だからだろ。月曜の朝」

月曜は連絡事項や書類に目を通してから仕事が始まる。そしてパソコンに向い始めると藤堂が話しかけてきた。

「昨日のデートはどうだった」

「デートじゃねえよ」

「男と女が2人で出掛けるのをデートって巷じゃそう言うんだよ」

「はいはい、そうですか」

仕事に集中して余計な事は考えたくないのに藤堂が話しかけてきてイライラし始めていた。

藤堂の気持ちも判らなくは無いが放って置いて欲しかった。特に今日だけは。

「で、どこに行ったんだ？」

「ピクニック」

「ピクニック？ どこに？」

「そこ」

「そこ？」

「公園」

「お前、本気か？」

「本当だ、その後でたぬきに行った。大将に聞いてみる。俺が侍を

連れて来たかどうか」

藤堂が携帯を取り出した。大将に確認でもするのだろうか。
しばらくすると腕を掴まれた。

「野神、ちょっと付き合え」

「はぁ？ 工作中だ」

「ここでも俺は構わないぞ」

パソコンの電源を落として立ち上がり溜息を一つ付いて藤堂の後を歩き出した。

階段で屋上にでも行くのだろう。

途中の廊下から御手洗さんらしき人が手を振っているのが見えたが気付かない振りをした。

屋上に出るなり藤堂が俺に向ってきた。

「お前、何を考えているんだ」

「お前に話す必要は無い」

「彼女の気持ち判らないのか？」

「藤堂には関係ねえだろ！ そんなに気になるなら、彼女にお前がアタックすれば良いだろうが」

「野神、本気で言ってるのか？」

いつもは沈着冷静な藤堂がヒートアップしている。

「たりめえだ、ゴチャゴチャ口出すな！」

「彼女が探していたのはお前だ！ 次に会う約束はしたんだろうな」

「するか、そんな……」

「げっふお」

俺が言い放ち終える前に、藤堂の左フックが俺の腹にもろに入った。顔を殴らない所は流石が営業マンだ。

蹲ると藤堂が右を放つのが見えると同時に誰かが屋上のドアを開けた。

「ふざける！」

咄嗟に声を上げて拳を振り出すと藤堂の右フックが俺の体に打ち付

けられた。

「げほ、げほ、げほ」

「そこまでにしなさい、これ以上は報告するわよ」

双葉さんの声が屋上に響いた。

御手洗さんが連絡したのだろう事は直ぐに察しがついた。

「藤堂君。あなたの気持ちも判らないでもないけれど、今日の凜子はとても楽しそうに仕事をしているわ。その意味が判るわよね。それに野崎君、あなたって子は何で本当の事を言わないの。たぬきに行きたいって言ったのは凜子でしょ。それにあの子はとても喜んでいたわ、いっぱい野神君とお喋りできて野神君の事を教えてもらったって」

「俺、仕事に戻ります」

藤堂が屋上から出て行く、蹲る俺に双葉さんが近づいてきた。

「あなた、最後の一発わざと受けたでしょ」

「双葉さんには敵わない」

そう言つて横になり、そして屋上に大の字になった。

「あれは自業自得です。それに、人を好きになった事ないから怖いんですよ」

「野神君。本気で言っているの？」

「ええ、恋愛する余裕なんて無かったですから。だからただのガキなんですよ」

「後でゆつくりね。仕事に戻りなさい。あなたならあの程度のパンチなんて訳無いでしょ」

「ははは、マジ敵わないや」

それ以来、藤堂とは話もせず別行動をしていた。

そんな事があつた2日後の水曜日の朝、俺と藤堂は課長に呼ばれた。「藤堂君と野神君には申し訳ないんだが今度の日曜日の午前中だけ休日出勤扱いで住倉商事との野球の試合に行ってもらいたいんだ。一課の代表として。大丈夫かな」

「課長、なんだか決定事項みたいな言い方ですけど」

「まあ、上から直接だから頼んだよ。羨ましい限りだね、秘書課の美女が応援に行けらしいから、くれぐれも失礼のないようにね」

羨ましいのならお前が行けと思ったが、課長の『秘書課』の一言で俺も、そして恐らく藤堂も理解した。

誰が野球に出る社員を選抜したのか。

3 - 2 ・この大馬鹿が

日曜日の朝、俺は渋々藤堂の車で球場に向っていた。球場に着いてユニフォームに着替える。

相手のチームはもう練習を始めていた。

因みに相手チームの住倉商事はライバル会社だった。

草野球で住倉に勝つに越した事はないが負けても関係ないと俺は思っていた。

住倉の練習が終わり、藍花の練習が始まるが藤堂はベンチから出てこなかった。

「あの馬鹿、まだ拗ねてんのか」

最初に集まってポジションを決める外野は直ぐに決まり内野も決まってい、経験者が優先的にそのポジションに着く。しかし、ピッチャーは毎回最後まで決まらなかった。

他の部署は上からのプレッシャーが凄いらしい、何でも負けたらそれこそ左遷なんて噂まであった。

故にピッチャーがもつとも重荷に感じるのだろう。俺は中学まで野球をかじっていたのでどのポジションでも構わなかった。

「あー面倒臭い。俺が投げる」

どういつもこいつも根性なしばかりなのか俺が大雑把なのか？

練習を始め出すと相手チームから歓声があがるどうやら秘書課の3人が登場したらしい。

見ると出勤先が球場とはいえきちんとした格好をしていた。

一応、出勤扱いだから当たり前なのかも知れないが。

俺は眼鏡を掛けなおして練習を開始する。

普段の生活で眼鏡は必要ないが車を運転する時には掛けている。

今日は野球と言う事でボールが見えないと困るので掛けていた。

天気が良いので少し色が入ったサングラス仕様になっている。

キャッチャーを座らせて肩慣らしを始める。

ベンチでは相変わらず藤堂が不機嫌顔で腕を組んで座っていた。

「あら、今日は野神君が投げるんだ、珍しい。藤堂君は出ないの？」

「俺の出番は無いですよ。多分」

双葉さんが藤堂に声を掛けると投げやりに答えた。

「へえ、アンダー気味のサイドスローなんだ、のっち」

「良かったね、凜子さん。のっちの活躍が見られるかもよ」

「えっ、あ、うん」

御手洗さんが話しかけても一ノ瀬さんは曖昧な返事をした。

試合が始まり藍花はじゃんけんで後攻を勝ち取った。

はなからやる気の無い俺はアンダー気味のサイドスローで投げ始める。

のらりくらりと打たせて取る戦法をとったのだがそれが裏目に出た。背の低い俺がアンダー気味に投げると打ちづらいらしい。

藍花の秘書課の面々の前で良い格好がしたい相手チームは悔しがっていた。

うちのチームもそれくらいの余裕が欲しいのだが……

草野球は大体時間の兼ね合いもあり7回までで終わりとなる5回が終わった時点で1対1の引き分けだった。

すると相手チームの応援に来ていた女の子達の歓声が上がる。

見ると住倉の営業部のエース『王子様』こと中原真治なかはらしんじが現れた。

嫌な奴が来たものだ。言うなれば俺達1課の宿敵である。

それ以上に俺はこのチャライ男が大嫌いだった。

その大嫌いな中原が事もあろうに俺達のベンチにいる一ノ瀬さんの手を取ったのだ。

直ぐに一ノ瀬さんは手を引っ込めて俺の方を見て気にしていた。

「はぁゝ勘弁してくれ」

体を少し動かして気にしない様にする。

6回は両チームとも点が入らず最終回になった。

中原が試合に出て来そうに無いので気にせず投げていたら内野のミスでノーアウトのランナーが出てしまった。

「ドンマイ、ドンマイ」

とりあえず声を掛けると相手チームが選手交代を告げてきた。

嫌な予感がして案の定、中原が出てきた。

中原は高校時代にピッチャーで4番を打ち甲子園にも出た事があると聞いた事がありバリバリの経験者だった。

恐らく美味しい所を総取りするつもりだろう。

訳が判らず一気にイライラが爆発した。

スパイクでマウンドを慣らす。

「マジ、ムカつく！」

「キャッチャー、藤堂に代わります」

独り言を言っているとベンチから声がした。

見ると藤堂がマスクとプロテクターだけを着けてミットに拳をポンポンと入れて感覚を確かめていた。

それを見ただけで本気で来いと言うのが判った。

サイドスローからオーバースローに変えて数球だけ投球練習をする
と、中原が一ノ瀬さんに目をやってからバッターボックスに入った。
バットをクルンと回してバットを俺に向けて挑発してくる。

中原とは野球での対決は初めてだった。

それでも入社当時は藤堂と真剣に練習していたので何も気にせず投
げる事が出来る。

住倉のベンチから歓声が上がる。

中原が王子様らしく投げキッスをする。

大きく振りかぶりウィンドアップから体を捻り、腕を振りぬく。

ボールは一直線に藤堂のミットに吸い込まれた。

ガチンコの直球勝負だ。

中原が首を捻り目が真剣になる。

構わずにミット目掛けてボールを投げる。

空振りをした中原が俺を睨み付けた。

次のボールも中原のバットには掠りもしなかった。

そして残りの打者も三球三振に討ち取る。

最終回になり中原がピッチャーマウンドに立っていた、何が何でも引き分けて終わらせたいのだろう。

流石に甲子園に出ただけはあつて直ぐにツーアウトと追い込まれてしまった。

そして何の因果か最終打席は俺だった。

勝ち負けは関係ないと思っていたが、ここまで来たら欲が出てきたと言うより売られた喧嘩は全てお買い上げで倍返し気分満載だった。打つ気満載で素振りをしてからバッターボックスに入り、念入りに足場を鳴らしてバットを構える。

初球を俺はいきなりセイフティーバントに出た。

バントに無警戒だった守備がまごつく間に俺は一塁まで走り抜けていた。

次のバッターも中原相手じゃ歯が立たない、仕方なく足で掻き回す。連続盗塁で三塁まで進んでいた。

プライドの塊の様な中原の顔から焦りが見え苛付いているのが手に取るように判る。

リードを大きく取り挑発する。

サインの読み違いか中原の暴投かキャッチャーがボールを後ろに逸らした。

俺はそれを見逃さずにホームに突っ込む。

キャッチャーがやっとボールに追いつきダイレクトに中原に送球する。

俺が足から滑り込むのとタッチするのは同時だった。

しかし、中原は足にタッチせず俺の顔面目掛けてグローブを叩き付けた。

帽子が叩き飛ばされる。

「セーフ！」

審判の声が聞こえベンチから皆が飛び出してくるのが判り直ぐに起き上がる。

地面を見ると眼鏡が割れて壊れていた。

帽子を深く被りなおし、割れた眼鏡を拾い上げて俯いたままベンチに戻った。

「大丈夫なの？ 野神君」

双葉さんが心配そうに聞いてくる。

「大丈夫ですよ」

そう言つて顔をタオルで拭いて、代えの黒いサングラスを掛けた。

ホームベースに集まり挨拶をして藍花の勝利で試合が終わった。

「勝利の打ち上げはどうする」

そんな声が聞こえてくる。

秘書課の周りはチームメイトが取り囲んでいた。

「この後、約束があるんでお先です」

藤堂が秘書課の面々と先輩方や仲間に関に声を掛けて俺を連れて球場を後にし、駐車場で藤堂の車に放り込まれた。

「藤堂、悪いな。病院に行ってくれ」

「この大馬鹿が！」

藤堂が怒鳴り飛ばして車を急発進させた。

3 - 3 ・待っていないさい

月曜日は代休として午後出勤になっていた。

午前中、眼科に寄ってから会社に向かう。

運良く視力やその他に異常は無いがガラスで眼球を傷付けてしまい。充血じゃ説明付かないほど左目は真っ赤になって仕方なく眼帯をして出勤する。

藤堂には硬く口止めして誰かに聞かれたら結膜炎になったと説明すると念を押した。

俺は出勤して直ぐに総務に立ち寄る。

目ざとく俺を見つけて同期の宮里里美が話しかけてきた。

「のっち、昨日は大活躍だったらしいじゃん。王子様をバツサリ三振にして、ホームスチールまで決めてさ」

「サトサトそれより挨拶がまだなんだけど。おはよう。サトサト」
「そんな蟻が寄って来そうな名前で呼ぶな」

地獄突きが俺の喉元に炸裂する。

「ふげえ」

「おはよう、珍獣」

「珍獣言うな」

いつもの挨拶が交わされる。

「それより、その目どうしたの？」

「気付くのが遅いよ、名誉の負傷。慰めて」

「はあ？ どうせ物貰いかなんかでしょ」

「ハズレ結膜炎です、残念賞として名刺の発注を頼みます」

「もう、わざわざ。それを言いに来ただけなの？」

「はい」

「バーカ、電話しろ」

営業部に戻ると藤堂も出勤してきていた。

「お前、総務に行っただろう」

「用事があったからね」

「嘘つけ、宮里にわざわざ眼帯見せに行ったな。もう噂になっていたぞ」

「用事だよ、用事」

「俺の言った事守れよ。彼女に知られたら大騒ぎになるからな」

「お前があそこまでするとは思わなかったよ」

「売られた喧嘩は全てお買い上げで倍返しが俺のモットーだからね」

「試合に勝つても怪我させられたら世話ないだろ」

「一応、スポーツだからね。あいつがここまでするとは思わなかったけどね」

「で、どうするんだ？」

「どうもしないよ。これ以上騒ぎを大きくして彼女に心配させたくないし、彼女の泣き顔見るなんて真つ平ごめんだからね」

「本気なんだな」

「まあね、昨日はつきり判った」

「遅すぎだ」

「俺は鈍いからね。さあ、仕事、仕事」

直ぐに会社中に俺が結膜炎になったと広まっていた。

基本女の子はお喋りで女の子が多い総務であんな話をすればあつという間だった。

企画室に向かう為に5階のフロアーにある小会議室の前まで来ると急にドアが開き誰かが俺の首根っこを掴んで会議室に引きずり込んだ。

「うにゃ〜？」

「静かにしなさい」

「へえ？ 双葉さん」

後ろを振り返ると秘書課の『姫』こと双葉さんが……

鬼の様な形相で……

「ゴメンなさい」

「なんで謝るのかしら？ 野神君」

「いや、双葉さんの顔が凄く怖いからです」

「何でこんな顔していると思っっているの」

「さあ、僕には何の事やら、さっぱり」

するといきなり双葉さんがパイプ椅子を掴み……座らされた。

「その眼帯は何？」

「結膜炎ですよ、貰います？」

「何で嘘を付くの！」

双葉さんの鋭い声が響き渡り、眼帯を剥ぎ取られてしまった。

「目の下まで傷を作って、まだ白を切る気なの？ 目を開けなさい」
目の下は確かに折れた眼鏡のフレームで怪我をして瘡蓋になっていた。

小さく溜息をつき左目を開けると双葉さんの顔が強張った。

「そんな顔をされるのが嫌で黙っていたんです。一ノ瀬さんなら泣き出しますよ。俺、一ノ瀬さんの泣き顔なんて見たくないですから」

「なんで、あんな無茶をしたの？」

「……………」

俺は視線を外して答えなかった。

「少し傷が付いただけで視力とかに異常は無いですから数日で治ります」

「答えになってないんだけど」

「自分自身に腹が立っただけです」

「言う気は無いみたいね、待っていなさい」

「仕事が終わってからにしてください。何時でも構いませんから」

俺は慌てて、携帯を取り出した双葉さんの腕を掴んだ。

双葉さんは一ノ瀬さんと呼び出すつもりなのだろう。それだけはして欲しく無かった。

知ってしまえば恐らく仕事どころでは無くなってしまいそうな予感

がしたのだ。

「藤堂君はもちろん理由は知っているわよね」

「俺はあいつを親友だと思っていますから」

営業部に戻ると藤堂は外回りに出ていて居なかった。

眼帯姿で都内を歩き回るのも嫌なので大人しくパソコンに向った。

3 - 4 . ば、か

憂鬱だった月曜が終わっていく。

その前に……双葉さんに呼び出しをくらっていた。

そして足取りも重くオカマバーもといワインバー『vino』に向う。

「いらっしやい。瑞貴ちゃん」

「奥？」

「そうよ。全くどいつもこいつもそんな不景気な顔で店に来ないでちょうだい。湿っぽくなってお通夜みたいじゃない」

「まあ、お通夜になるかも知れないし」

マスターが呆れかえって腕組みをして首を横に振っていた。

カウンターの横を抜けて奥の個室に向う。

中を覗いて帰りたくなった。泥沼の様な淀んだ空気が漂っていた。

「ご愁傷様です」

「お前の所為だろうが」

藤堂の突っ込みが入る。

「失礼します……」

って皆の視線が怖すぎる。誰も何も言ってくれない。すると、今にも消えそうな声がする。

誰も口を噤んだままなのでその声は良く聞こえた。

「野神君、その目は本当に結膜炎なんですか？」

一ノ瀬さんの声だった。

双葉さんからは何も聞いていない様だ、つまり俺の口から直接伝えろと言う事なのだろう。そしてここで肯定すれば確実に一ノ瀬さんとの関係が終わるだろう。

「一ノ瀬さん。落ち着いて聞いてくれる？ 単刀直入に言えばこの目は結膜炎じゃない。日曜日の野球の試合があったでしょ、あの時

の一ノ瀬さんに対する住倉の中原の行為に腹を立てて俺から勝負を挑んだんだ。勝ち負けなんてどうでも良い試合だったけれど中原には負けたくなかったんだ。だから、少し無茶をした。でもこれは野球の試合で怪我をしてしまった結果なんだ。一ノ瀬さんが責任を感じないで欲しい」

「あんなものスポーツじゃないだろう。足にタッチすれば良い筈なのにあいつはお前の顔面にグローブを叩きつけたんだろうが」

「だからって藤堂が住倉の営業先をうちに引っ張るのもどうかと思うけどな」

「な、何でそれを……」

藤堂が明らかに動揺していた。

「研修中にお前が言っていただろ。俺は猫だから」

「野神君、眼帯を外してください」

「一ノ瀬さん？」

「後輩君！ 外しなさい！」

「判りました。先輩」

普段は大人しい一ノ瀬さんが初めて声を荒げた。

そして真っ直ぐな真剣な目で俺を見つめている。

俺はその瞳に負けた。

後輩君と先輩と言う呼び方はロンドンで初めて出会った時の呼び方だった。

肩から力が抜けていく。

俺が眼帯を外してゆっくり左目を開けると一ノ瀬さんの瞳が揺れて涙が溢れ出した。

一ノ瀬さんが立ち上がり彼女の平手打ちが俺の頬を突き抜ける。

「馬鹿！ もう無茶な事はしないで」

「俺の自己満足です」

「本当に馬鹿なんだから」

そう言つて俺に抱きついてきた。

抱きつかれた勢いで椅子から落ちて床に座り込み一ノ瀬さんを抱き

しめて天井を仰いだ。

一ノ瀬さんは声を上げながら泣いている。

「野神君、凜子を泣かせた責任はどうするのかしら」
双葉さんの静かな声がする、もう逃げ出すなど。

「それなら、一ノ瀬さんに責任をとってもらいます。ファーストキスを奪われちゃいましたから」

「まさか、凜子。そんな事を……」

「り、凜子さんが？」

「普通、逆だ。バーカ」

三人三様の驚きと呆れた声が聞こえると一ノ瀬さんの泣き声が変わった。

「ば、か……」

「大好きです。凜子さん」

「瑞貴君が大好き……」

そうして2人は恋人宣言をした。

俺の心の隅にしこりを残したまま。

4 - 1 . あなたって一体

最近、困った問題が俺達の周りに一つだけ出来てしまった。

「先週の日曜はどこに行ったんだ」

「新宿御苑に散歩&ピクニック」

「はあ？ お前らは爺と婆か？」

「爺婆言うな。良いだろう何処に行こうが。彼女がゆっくり過ごしたいって言うんだから」

「先輩、僕にも先輩の彼女を紹介してくださいよ」

「絶対に嫌だね。友長なんかを紹介したら絶対ネットに流すだろ」

「そりゃ、趣味ですから」

「プライバシーと肖像権の侵害だ」

「固い事言わないで下さいよ」

いきなり俺と藤堂の会話に割り込んで来たのは、営業一課に研修で配属されている新卒の友長光家ともながみついえだ。

この戦国時代に出てきそうな名前の友長は簡単に言くと五月蠅いネットオタクだった。

俺が趣味兼副業でネットをしていると知るなり急に懷かれて困っていた。

因みに会社には俺と一ノ瀬さんの関係は秘密にしてある。理由はいたって簡単。

社内人気ナンバーワンの彼女に彼氏が出来た、それも社内恋愛なんてばれたら会社が傾くほど大騒ぎになるからだ。

「友長いい加減仕事にも戻れ、仕事からだぞ」

「はーい。判りました」

「ちゃんと返事くらいしろ」

「はい」

藤堂に一喝されて友長が仕事に戻った。

「野神もきちんと注意しろ。先輩がそんなんでどうする」

「俺は俺の仕事をきちんとしている。あいつの仕事が遅れようが怒られようが俺の知る由もない」

「お前、それを狙って」

「万が一あいつが俺達の秘密を知った時は、即抹殺する」

「ブラック野神だけは敵に回したくないな」

最近、昼休みには社食で秘書課の面々と一緒に過ごす事が増えてきた。先日の住倉との野球の試合で俺が怪我をしてまで勝ちにいった話が広まり、その怪我の仇討ちを藤堂が営業で勝ち取った事も知れ渡ってしまっている。

この話をリークしたのは恐らく……知らない方が良い事も有るとしておこう。

サトサトもとい総務の中里に話の真相を聞くと俺達が秘書課の貞操を守ったなんて言う武勇伝になっているらしい。

そんな訳で秘書課と食事をしていようが妙に勘ぐる者は1人もいなかった。

そして俺は昼休みまで付き纏ってくる友長にいい加減閉口していた。秘書課の双葉さんが噛み砕きながらどんなに言い聞かせても直ぐに元戻りお手上げ状態だった。

その日の昼休みも友長は俺に付き纏って社食に来ていた。

「先輩、知っています。ここ数年で急成長を遂げた。セキュリティシステムなんかを作っている『N・O・E・L』ってIT企業。

俺の夢なんですよ」

「それならうちを辞めて、システムを作っている企業に行け」

「ちい、ちい、ちい。判ってないなあ、先輩は。この会社だって『N・O・E・L』のセキュリティシステムを使っているんですよ。だからこそこんな会社でIT関係の仕事に就いたほうが手っ取り早いじゃないですか」

友長が舌をならしながら指を振る。酷い言われようだ。傍若無人が

闊歩している。

「お前みたいな奴にセキュリティを任せる会社なんて何処にも無い」

「嫌だな、僕の才能を判っていないだけです、皆。それに僕は憧れているんです『N・O・E・L』の創設者に、噂では日本人じゃないかって言われているんです」

「それじゃ、会いに行けば良いだろう」

「本当に先輩は何も知らないんですね。プロフィールが抹消されてしまっていて謎の人物なんです。丁度、数年前の飛行機爆破テロが遭った時くらいからですかね」

「テロ？」

「そうテロです。ペンタゴンが絡んでいるなんて噂があった●@

\$ 航空の。もしかして巻き込まれて今頃は海の藻屑だったりして」

友長が航空会社の名前を言った瞬間、一ノ瀬さんが顔面蒼白になりガタガタ震え出した。

一ノ瀬さんの動揺に気がついて友長が言い放った。

「あれ？ もしかして一ノ瀬先輩ってあの事故の関係者ですか？

そうなら話を聞かせてくださいよ。良いでしょ」

一ノ瀬さんが泣き出し、その場から逃げ出してしまった。

「最低ね、あなた。彼女の両親はその事故で亡くなったのよ。彼女の態度に気付かなかったの？」

「俺、なんかしました？」

双葉さんの言葉にも友長はどこ吹く風だった。

興味本位だけの自己中心的で人の心の傷を土足で踏みつけるような友長の無神経さに俺は辺り構わずに切れた。

「何かしましたかだあ？ テメエは人の心の傷を踏み潰したんだよ！」

座っていた友長の胸倉を左手で掴み上げて力任せに友長の体を壁に叩きつける。

右手で殴ろうとする藤堂が俺の腕を掴んで止めた。

「藤堂、離せ！ 絶対に許さねえ！ こいつだけはぶつ殺す！」

俺達の騒ぎに社食は静まり返る、双葉さんが俺に声を掛けた。

「野神君、今は一ノ瀬さんを」

「御手洗さん、一ノ瀬さんをお願いします」

俺の返事に御手洗さんが慌てて走り出した。

恐らく俺の後ろで藤堂も双葉さんも啞然としているであろう事が良く判った。

それでも俺は彼女を追いかける事が出来なかった。

心の奥底の何かが俺の足を止めた。

俺が友長から手を離すと、友長がしゃがみ込んで嗚咽をあげながら震えていた。

騒然としていたが構わずに社食を後にする。

気が付くと俺は少し前までは毎日の様に昼寝をしていた屋上のベンチに座っていた。

そこに双葉さんが現れた。

「らしくないわね。野神君」

「一ノ瀬さんは？」

「今は秘書室で落ち着いているわ。花がついているから安心しなさい」

「すいませんでした」

「一体どうしたの？」

「友長に腹が立ったのも事実なんですがそれ以上に自分に腹が立って」

「少し聞かせてもらって良いかしら」

「ええ」

俺が了承すると双葉さんが俺の横に腰を掛けて俺の目を見ていた。大きく息を吐いて話しはじめる。

「本当は俺もあのテロに遭った飛行機で日本に向うはずだったんです」

「えっ、それじゃ」

「乗っていれば俺もここには居ません。仕事の所為で乗り遅れたんです」

「でも、あのテロはあなたの責任じゃないでしょ」

「狙われたのは俺です」

「野神君、もしかして一ノ瀬さんの両親の事を」

「はい、何となくですけど。報道された搭乗者の中に同じ苗字があったので。もしかしてって、確信に变っちゃいましたけど」

「それじゃペンタゴンとかって」

「それも事実です。それで狙われたのですから」

「でも事故当時ってあなたは未成年で、あなたって一体……」

「今は言えません。言える事は彼女の両親達は俺の所為で死んだんです」

双葉さんがうな垂れる俺の頭を優しく抱きしめてくれた。

「いつ頃からなの？　もしかしてって」

「入社した時です」

「あなたって子は、だから躊躇っていたのね」

「はい、でも今は後……」

「それ以上言ったら私があなたを殴るわよ。あれは事故なの。悪いのはテロリストであってあなたじゃないの。それに凜子にはもうあなたしか居ないのよ」

双葉さんが泣いていた。

一ノ瀬さんの為なのか俺の為なのかそれは今の俺には判らなかった。

「お願いがあるの。きちんと向き合いなさい。事故の事にも凜子の事にもゆっくりで良いから」

「判りました。時期が来たら全て話します。一ノ瀬さんにも皆さんにも」

「約束よ」

「はい、ありがとうございました」

双葉さんは俺に独りじゃ無い事を教えてくれた。

一ノ瀬さんが居て仲間が居てくれる事を。押し潰されそうな心が少しだけ軽くなった。

4 - 2 ・と一緒にいたい

午後の仕事を終えて俺は会社の玄関前にいた。

あの後。藤堂があの場合を鎮めたが友長は仕事にならず早退した。

俺は課長に事の顛末を報告したが時間が昼休みと言うプライベートタイムだったので不問に付された。

しばらくすると秘書課の3人が現れ一ノ瀬さんは俺と目が合うと視線を外した。

すると御手洗さんが一ノ瀬さんの背中を後押しした。

「何やってんの、凜子さん？ 誰の事をのっちが待っていたと思っているの？ ほら、行つた。行つた」

双葉さんは何も言わずにこちらを見て微笑んでいた。

「一ノ瀬さん、少しだけで良いから話がしたいんだけど」

俺がそう言うで一ノ瀬さんは小さく頷いた。

2人で会社の前にある公園を歩く。

初めてデートした公園、今はすっかり暗くなりところどころにある街灯だけが2人を照らしていた。

「座って話をしようか」

「うん」

ベンチに座ると一ノ瀬さんが少しだけ間を開けて俺の横に座った。

そして俺の決意を伝えるために一ノ瀬さんの顔をみた。

「一ノ瀬さん、俺と一緒に……」

「嫌、嫌だ。私はそんなの嫌」

一ノ瀬さんが俺の伝えようとした事を遮り泣き出してしまった。

「また、泣かせちゃったね。先輩、聞いてくれる？ これからも先輩の事をたくさん泣かせてしまおうと思う。それでも俺と一緒にいてくれる？ 俺は先輩と一緒にいたいんだ」

俺の決意、もう逃げないと決めた。俺には仲間が居ると教えてもら

ったから。

「駄目かな？」

「駄目じゃない、ずーと後輩君と一緒にいたい」

「ありがとう」

右手で優しく流れ出す涙を拭い、頬に手を当てて軽く口付けをする。もう一度。2人の思いを確かめ合うように深く長く。

そして左手で携帯から空メールを送ると近くの草むらから着信音が鳴り響いた。

その音に驚いて一ノ瀬さんが俺から離れた。

「覗き見は感心しませんね。先輩方」

「花の馬鹿！」

双葉さんの御手洗さんを叱責する声がする。

「えっ、ええええええー」

一ノ瀬さんの声が夜の公園にこだました。

「さあ、凜子さん。先輩方に何かご馳走してもらいましょう」

近くのレストランで双葉さんと御手洗さんに食事をご馳走になる。

一ノ瀬さんは始終俯いて真っ赤になったままだった。

5 - 1 ・お前がナイトだな

最近、夕食を一ノ瀬さんのマンションで食べる事が多くなった。

彼女の部屋はフローリングの2DKでカントリー調とさえいいの
だろうか、白や木目が綺麗な家具で統一されていた。

「今日は、和食にしてみました」

「うわぁ、美味そう」

ご飯に味噌汁、それに里芋の煮っ転がしや太刀魚の塩焼きが所狭し
と、白木のテーブルの上に並べられている。

「いただきます」

「ん！ んめえ」

「うふふ、やっぱり子どもみたい」

「子どもの頃はいつも独りで食べていたから、社会に出るまで誰か
と食事する事が無かったからね」

一ノ瀬さんの箸が止まって少し緊張した表情になっていた。

「どうしてなの？」

「俺の家は母子家庭で小学校4年の時に事故で母が死んで、突然現
れた俺の父親だと言う人に引き取られ、親父だと名乗る人の奥さん
と上手くいなくて。それでいつも食事は自分の部屋で食べてい
ましたから」

「でも、継母さんが食事を作っていたんでしょ」

「いいえ、家政婦さんがいましたから」

「そうなんだ」

空気が重くなり何となく気まずい感じになった。

「そんな事もあって俺、人に家族の事を話すのが苦手で。でも、凜
子さんには知って欲しいと思ってているんですけど……」

「少しずつでいいから瑞貴君の事を教えてね」

言葉に詰まった俺に一ノ瀬さんは優しく微笑んでくれた。

「そう言えば、最近の仕事の方どうなんですか？」

「なんだか行き詰っている感じがなあ。あの話は知っているんですよ」

あの話とはイタリアのブランドとコラボして商品を企画販売する話があるのだが、ブランドが打診してきたのがうちとライバル会社の住倉で今度のプレゼンとその後の会食の話だった。

そして何でもそのデザイナーが彗星の如く現れた新進気鋭のデザイナーで、気が難しく気に入らない仕事はしないと言う噂があるくらいで、情報が少なく対応に困っている状態らしかった。

「そうか大変だね」

「うん、情報が少なすぎるんだよね。プレゼン自体は問題無いと思うけれど、その後の会食をうちが任されていて場所は住倉が指定してきたんだけどね。そのレストランはうちも良く使うレストランなだけだね」

「それってもしかして住倉の中原が一枚噛んでいます？」

「えっ、なんで判ったの？ 彼の推薦だけだ」

「なんとなくです」

嫌な予感がした。

野球の試合はともかくその後の藤堂が住倉の営業先をうちに引つ張り込んだ事を中原は知っている筈だ。

今までの経験であいつは一番食えない奴だった。

次の日、秘書課に一通の封書が届いた。

「香蓮さん、送り主がわからない封書が届いたのですけど」

「花、何も書かれていないの？」

「いえ、それが怪しいと言うか差出人はUMAって」

「UMAと読むのかしら」

「でもUMAだったら『Unidentified Mysterious Animals』つまり未確認生物の事ですよね」

「考えても仕方が無いから慎重に開けなさい。危険は無いと思うけど」

「えっ、は、はい」

恐る恐る御手洗が封書を開けて中の書類を取り出した。

「か、香蓮さん。イタリアのデザイナー・ジョルジヨ ヴエルディさんの情報です」

「誰がこんな物を？」

「でも信賴して良いんですか？ 差出人も判らないんですよ」

「今は時間が無いわ、急いで裏を取るのよ」

「は、はい」

プレゼンも会食も無事に終わって数日後の昼休み。

社食で秘書課の3人と藤堂と久しぶりに食事を一緒にしていた。

「お疲れ様でした。まあ、下っ端の俺たちは労をねぎらう事くらいしか出来ないですけどね」

「うふふ、相変わらずね野神君は。あつちは上手くいつてるの？」

双葉さんが一ノ瀬さんを見る。

「え、まあ、ぼちぼち」

「ぼとぼちね」

言葉少ない藤堂が突っ込できた。

「うう、何が言いたいんだ。藤堂」

「別に、ただ最近やたらと元気だなと思ってな」

それは、きちんとした食生活が……

「誰かさんのマンションに入り浸りだしね」

「花ちゃん、それは内緒って言ったのに」

御手洗さんの言葉に一ノ瀬さんが俯いて真っ赤になった。

「でも、あの情報元のUMAって誰だったんでしょね。香蓮さん」

「そうね、それともう一つ不思議なのはあのレストランで『vin

o』のマスターがソムリエをしていた事ね」

「へえ、そうなんですか。オカマバーのマスターがね。まあ、あの人は結構有名なシニアソムリエらしいですから。レストランから頼まれたんじゃないですか」

「野神君、でもね。マスターが『ナイトによろしくね』って私に耳元で言ったのよ。ナイトって誰の事かしら」

双葉さんがそう言うと、テーブルの下で誰かが俺の脛を蹴った。

「藤堂、お前がナイトだな」

「なんで、俺がナイトなんだ。馬鹿」

「馬鹿言うな。ナイトはお前みたいに容姿端麗で沈着冷静な男じゃないだろ」

「お前じゃないのか野神？」

「俺は友長のお陰で大変なんだ。それどころじゃねえよ」

俺がテーブルに突っ伏すと双葉さんが聞いてきた。

「また、彼が何かしたの？」

「双葉さん、実は……」

研修期間も終わろうかと言うこの時期に友長は配属先の事で会社ともめていた。

その矛先が付き纏われていた俺に向けられたのだ。

何とかしてくれと、実際問題としては最悪解雇も考えているとの連絡を俺は受けていた。

「それで野神はどうするんだ」

「首になる前に死んでもらいますか。ああ言う馬鹿は1回死んでみた方がいいんだ」

「冷たい奴だな、相談に……」

「藤堂、あいつは俺に喧嘩を売ったんだ。きちんと答えてやらないと」

俺が苦々しい顔をするのと心配そうに一ノ瀬さんが声をかけてきた。まあ無理も無い、ただの草野球であんな無茶をしたのだから。

「私の事はもう大丈夫だから」

「俺はあいつの事を許さない。俺の大切な人を傷付けたんだ。俺に喧嘩を売ったも同じ事、それにあいつは1回潰されないと判らないんだ。きっちり俺が判らせてやる」

そう言うで一ノ瀬さんは俯いていて真っ赤になり、双葉さんと御手

洗さんが笑っている。

そして藤堂は呆れていた。

「俺、何か変な事言ったか？」

「ニブチン」

一ノ瀬さんは俯いたまま、俺は訳が判らずポカンとしていた。
藤堂の言葉で3人が大笑いした。

5 - 2 ・ キャラだから

その週の日曜日。俺は会社の小会議室にいた。

友長の件で休日に会議室を使わせてくれと会社側に説明して許可を取ってあった。

会社の会議室にはネット回線が引かれている。

回線には俺が会社で使っているノートパソコンが接続されており。俺の対面には友長が普段使っているタワー型のパソコンが接続されていた。

先だって友長にお前の力を試してやると言うと言を輝かせて俺の挑発に乗ってきたのだ。

「言っておくがこれが最初で最後だからな」

「ええ、構いませんよ。先輩に僕の力を見せ付けてやります。負けたら何でも言う事聞いてくれるんですよね」

「ああ、約束する」

「それじゃ、先輩の彼女とデートさせてください」

「お前が勝てばな」

友長に対する俺の返事に一ノ瀬さんの顔が強張るが、後ろから双葉さんが優しく抱きしめて落ち着かせていた。

「もしも、俺が勝った場合はそれなりの覚悟は出来ているんだろうな」

「絶対に負けませんから覚悟なんてしなくていいです」

どこからその自信が出てくるのかが判らないが本当に1回死にたいらしい。

「万が一、僕が負けたら先輩の好きなようにしてください」

「判った」

「のっち、あんた本当に大丈夫なの？」

御手洗さんが俺の顔を覗き込んだ。

俺は友長との対決の立会人に藤堂を呼んだのだが何故か秘書課の3人も会議室にいたのだ。

「さあ、始めよう」

俺の言葉がスタートの合図になった。

簡単なゲームだ。

俺のノートパソコンにはNOELの廉価版のセキュリティソフトがインストールされており使っているOSは日本で一般的に使われている物だ。

そして友長のパソコンには自分が組み上げたセキュリティソフトが入っていてOSも少し毛色が違った。

ハッカーなんて崇高なもんじゃないクラッカー勝負だ。

先に相手のパソコンに侵入した方が勝ちになる。

あっという間にゲームは終わった。

「友長、お前は本当に口だけみたいだな。もし他のパソコンにリンクさせているのならこれで全部終わりだ」

「そんな……」

友長が立ち上がり呆然としている。

それは友長のパソコンが死んだ瞬間だった。

あまりにもあっけなく終わってしまったので見ていた4人も呆然としていた。

で、会社の近くのレストランに拉致される嵌めになってしまった。

「のっち、何が起きたのか説明しなさい」

御手洗さんがテーブルに手を着いて体を乗り出して迫ってきた。

「ち、近いですよ。顔が……」

「野神君、あれはハッキングでしょ。つまり」

「双葉さん、それは違います。俺がしたことはクラッキングです」

「何が違うの？」

「ハッカーと言うのは元々高度なコンピューター技術と能力を持って何かを創造する人の事を言い、クラッカーはそういった技術や能

力を悪用して破壊したりする人の事を言うんです。因みにハッカーを名乗る奴等の殆どがクラッカーです」

「でも、一般的には」

「そうですね残念ながら、でもそれはメディアが混同しているからなんです」

「しかし、野神にあんな能力があるなんてな」

「藤堂、あれは能力でも技術でもないただの犯罪だよ」

「でも、野神なら悪用なんかしないだろ」

「どうだかなあ、俺はハッカーだから」

「ハッカー言うな、お前が」

惚けた顔を見ると藤堂に小突かれた。

「でも、のっちなら個人情報なんて直ぐに手に入りそうね。今度、頼んじゃおうかな」

「それはプライバシーの侵害ですよ。御手洗さんの個人情報でも公開しますか？」

「ば、馬鹿。お嫁にいけなくなっちゃうじゃない」

「ええ、お嫁にいけなくなるような事しているんですか？」

「ああ、のっち。鎌かけたでしょ」

「なんも」

「しばく！」

メニューの角で思い切り御手洗さんに叩かれた。

「うっ、痛い」

「はいはい、痛くない、痛くない」

頭を押さえると一ノ瀬さんが頭を撫でてくれた。

「さあ、出ましようか。お邪魔みただし、残りの時間は2人きりにしてあげましょ」

「たまに覗き見している人達がいますけどね。双葉さん」

「痛ってててて」

双葉さんに頬を抓まれると一ノ瀬さんが拗ねていた。

「もう知らない。野神君はいつも一言多いんだから」

「キャラだから」

「へぶう……」

「ノ瀬さんの肘鉄砲がわき腹に炸裂して俺は撃沈した。」

5 - 3 ・ 気のせいです

レストランを出てみんなと別れて、一ノ瀬さんと2人でブラブラしていた。

「結局、全員から一発ずつかそのうち死ぬな」

「自業自得です」

「凜子さん、どこか行きたい所ある？」

「瑞貴君の部屋」

「???」

「凜子さん？ どこか行きたい所ある？」

「瑞貴君の部屋」

立ち止まり腕を組んで考え込む振りをする。

「凜子さん、どこか……」

一ノ瀬さんの視線に言葉をかき消された。

腰に手を当てて頬を膨らませて口を尖らせて俺を睨んでいる。

「そんな可愛い顔をしてどうしたんですか？」

「私達は恋人同士だよ」

「はい。会社には内緒にしてありますけど」

「瑞貴君は私の部屋に来るけれど。私を瑞貴君の部屋には呼ばないのは何故なの？」

「俺の部屋に来て何も楽しくないですよ。何も無いですから。それに男の部屋につて、ね」

「じゃあ、いい！ 私、帰る！」

一ノ瀬さんが踵を返してスタスタ歩いて行ってしまった。本気で怒らせてしまったみたいだ。

「先輩、待ってくださいよ。先輩！」

「後輩君なんかもう知らないんだから！」

走り出して後ろから抱きしめた。

「離しなさい。後輩君」

「嫌です。本当に何も無いですよ。それでもいいんですね」

「だって私の部屋だけ知ってて、ずるい」

「それじゃ、行きましょう」

「えっ」

一ノ瀬さんが驚いて、目をまん丸にして俺の顔を見ていた。

「手を繋ぐのは嫌ですか？」

「嫌じゃないけど、会社の近くだし」

「大丈夫ですよ、今日は日曜日だし。髪を下ろしている時の凜子さんはミス侍に見えませんかから」

「それは褒められているの？」

「貶してはいません。入社した時から見て俺が気付かないんですから」

「ええ、それって」

「言葉の通りです、入社した時から気になってました」
「どうして？」

「それは部屋で話します。ここで話したら凜子さんがどこかに行ってしまう気がするから」

その後、一ノ瀬さんは何も話さなかった。

しばらく歩くとマンションの前にやってきた。

「うわぁ、凄いマンション」

「えっ、知っていたんじゃないんですか？」

「う、うん。でも夜だったから。勇気を出して来たのだけど……」

その後の言葉は聞かなくても判っていた、身に染みるほど。

自動ドアを通り郵便受けから郵便物を取り出しエレベーターに乗り込む。

「何階なの？」

「一番上ですよ」

そう言ってエレベーター内の認証装置に暗証番号を入力して指をスキャナーに差し込むとエレベーターが動き出した。

一ノ瀬さんが戸惑っているのが繋いでいる手から伝わってきた。

「怖がらないでください、襲ったりしないから」

「馬鹿」

エレベーターが最上階に着きドアが開くとそこは玄関先になっていて天窓から太陽の日差しが注いでいた。

ドアノブを握るとカチャンと音がして鍵が開いた。

「うわぁ、凄く広い」

玄関から直ぐにある無駄に広いリビングには2段ほど下がった所にまん丸のソファードローテーブルが置いてあるだけだった。

「凄い景色がいいね。都内が見渡せそう」

リビングはルーバルコニーに面していて一ノ瀬さんは外にでて景色を眺めていた。

「凜子さん。飲み物は何が良いですか？ 冷蔵庫の中にあるものしかないんですけど。適当に選んでください」

俺が呼ぶとまるで子犬の様に走ってきた。

「はい。キッチンも凄く使いやすそう広いし」

「何が良いですか？」

冷蔵庫を開けるとそこにはペットボトルや缶コーヒーが並んでいた。

「それじゃ、オレンジジュース」

「どうぞ」

「ありがとうございます」

一ノ瀬さんは大英博物館の中を見て周った時と同じように万華鏡みたいに、クルクル表情を変えて部屋の中を歩き回っていた。

「この部屋はなに？」

「そこは、パソコンが置いてある部屋です。夜は殆どそこにいますよ」

「見ても良い？」

「どうぞ」

部屋の中は窓に面した所に木の机が置かれていてその上には3台の

液晶とキーボードやマウスが置いてある。

その両側の棚にはプリンターやマシンが壁を覆い尽くしていた。

「凄い、パソコンだね」

「趣味のひとつだからね。俺、オタクだし」

「オタクには見えないな。オタクって言うよりIT企業の社長さんみたい」

「そんなに褒めても缶コーヒーかジュースしか出てきませんよ」

「他の部屋は？」

「俺のベッドルームと今は使っていないベッドルームが2つです」

リビングに戻りソファに座る。

まん丸のソファに座ると体を優しく包み込んでくれた。

「気持ち良い！ このソファ」

「そうですか」

「うん。けどなんだか瑞貴君、そっけないなあ」

「すいません」

「それにこの部屋は生活感が無い」

「寝に帰るだけですからね」

「お金持ちなんだね」

「俺がですか？」

「うん、だってこんな凄いペン트ハウスに住んでいるんでしょ」

「ああ、ここは友達の所有するマンションなんですよ。そこをただみたいな金額で借りているだけです」

「そうなんだ。そう言えばさっき言っていた話の続きを聞かせてもらえる？」

凜子さんの表情が少し強張った。

「入社した時からと言う奴ですね」

「うん」

「凜子さんのご両親に係わる話なのですが良いですか」

「えっ、うん」

一ノ瀬さんの表情が暗くなる、でも逃げないと決めたのだ。
体を起こしてゆっくり話し始め凜子さんに向き合う。

「この話は双葉さんにはもう話してあるんです。あの昼休みの騒ぎがあった日に。実は凜子さんのご両親が乗っていた飛行機に実は俺も乗る予定だったんです」

「えっ……」

一ノ瀬さんの顔が引き攣り強張った。

「急用で乗り遅れたんです。理由は全て話せないんですけど、あの飛行機がテロに遭ったのは俺が乗る飛行機だったからなんです。だから俺が」

「違うでしょ、後輩君。後輩君は悪くない。悪いのはテロを起こした人達。それに私の父と母は翌日の便に乗るはずだったの。偶々キヤンセルがでた前日の便に乗ったの」

一ノ瀬さんの頬に涙が伝う。

側に近づいて涙を拭こうとすると抱きついてきた、勢いで自分が座っていたソファーに押し倒される形になり一ノ瀬さんを優しく抱きしめた。

「私が誕生日に帰ってきてなんて我がままを言わなければ、あんな事故に遭わなかったのに、私が……」

その後は言葉になっっていなかった。

「それじゃ、あの事故の日が凜子さんの誕生日だったんですか？」
小さく頷くだけだった。

「入社して初めて凜子さんを見た日に名前も知りました。でも、搭乗者名簿にあった苗字と同じ苗字だったので怖くて声を掛けられな
いでいたんです」

「ロンドンは？」

「それは、なんとなくです。『りんこ』と言う名前しか知りませんでしたから。あの子かな？　なんて。でも見た感じは変わっていたので、別人だと」

「私は変わったつもりは無いけどな」

「とても素敵になっていました」

「煽てても何もでないよ」

「その、できればいつまでも一緒にいて欲しいのですが」
自信が無くなり語尾が尻すぼみになってしまった。

すると凜子さんが驚いた様に顔を上げて俺の顔を見つめた。

「なんで、そんな事を言うの？」

「怖いんですよ、あまり人付き合いが上手くないから」

「嘘でしょ、だってあんなに場を和ませるのが上手なのに」

「子どもの頃から周りに気を使っていたのでどっちが本当の自分が判らなくなつて。初めてひとりの女の子を好きになつて気付いてしまったんです。人に嫌われる怖さ、人との別れの哀しさに」

知らない間に俺は泣いていた。

堪えようとすればするほど涙が溢れ出した。

「偶然にあの飛行機に乗つて私の両親は死んでしまった。同じ飛行機に瑞貴君が乗れなかったから、私は探し続けていた瑞貴君と会えた。泣いているの？」

「俺、本当は泣き虫なんです。でも孤独ひとりになった時から變つたはずなのに」

「私の前では素顔でいてね」

一ノ瀬さんが軽く口付けをしてくれた。

「凜子さんは、俺が何者か聞かないんですね」

「だって、私が好きなのは目の前にいる野神瑞貴だから」

「ありが……」

俺の言葉を遮るように一ノ瀬さんが唇を重ねてきた。
熱く静かに。

どの位そうしていたのだろう凜子さんを抱きしめたままソファーに寝転んでいた。

すると携帯が着信を知らせた。

「誰から？」

「友達から、仕事です」

「お仕事？」

「はい、一緒に来ます？」

「うん」

凜子さんの手を引きながらパソコンの部屋に向う。

ドアを開けると直ぐにパソコンを起動させる。少しすると全てのマシンが立ち上がった。

メールのやり取りを始める。

部屋の中にキーボードの音が響いた。

「凄い、英文なんだ」

「はい、アメリカに居る友達なんで」

「そう言えば海外に居たんだもんね。初めて会ったのもイギリスのロンドンだったし」

「まあ、友達と言っても3人なんですけどね」

「3人？」

「少ないでしょ。これで良しと」

CD-Rに焼きこみ、動作確認をしてからディスクをケースに入れて凜子さんに渡す。

「これは、何？」

「友達に頼んでおいたファイル管理ソフトです。使ってみて気に入ったら使ってください」

「職場で？」

「ええ、もちろん。動作確認もしてあるので簡単だと思いますよ」

「ふうん、ありがとう」

「それと、凜子さん。このスキャナーに好きな指を入れてください」
「う、うん」

俺がスキャナーを指差すと恐る恐る人差し指を入れた。

「好きな数字ありますか？ 4桁以上で」

「じゃ、誕生日の****年7月18日」

キーボードのEnterを押すとスキャナーが動き出した。

「もう良いですよ。いつまでも指を入れておくと指が無くなりますよ」

「ええ！」

凜子さんが慌てて指を引き抜いた。

「嘘です」

「もう、本当に怒るよ」

「凜子さんに怒られるのなら構わないですよ」

「嫌い」

「嫌いですか？　せつかくこの家のスペアキーを渡したのに」

「えっ？　す、スペアキー？」

凜子さんが不思議な顔をして俺の顔を見ていた。

「好きに使って良いですからね、俺の仕事部屋以外は。それと各部屋にネット回線が引かれているのでどの部屋でもパソコンは使用可能です」

凜子さんが小首を傾げて両手を差し出し子どもがする頂戴のポーズをしていた。

「その手は何ですか？」

「ええ、鍵は？」

俺は凜子さんの差し出す手を包み込んだ。

「凜子さんのこの可愛い指と凜子さんがお父さんとお母さんに感謝する日がこの部屋の鍵なんです」

「パパとママに感謝する日？　あっ」

「そう、産んでくれてありがとうって」

「私の誕生日！」

そう言いながらチェアに座っている俺に凜子さんが抱き付いてきた。

「今年からは2人でお墓まいりに行きましようね」

「うん、あれ？　今、何だか聞き忘れた気がするけど」

「気のせいです」

6 - 1 . ショック死寸前です

鬱陶しい梅雨空が続いていた。

「はあゝ 外回りか……」

「それも給料の内だ」

「この梅雨空を何とかしてくれ。一弥あ」

「グダグダ言わないでとっとと外回りに行つて来い！」

「仕方が無いかあ」

雨の中の営業ほど辛いものは無い。

車で周れば良い事なのだが都内だとそうもいかないのが実情だ。

それに営業先の殆どが駅前か駅ビル内にあったりするからなお更なのである。

「止まないかなあ」

空を見上げてても止め処なく雨の雫は落ち続け。

鉛色の空が憂鬱そうな顔をしていた。

そして憂鬱な梅雨空が俺の体まで侵食してきた。

「おい。野神、生きてるか？」

「……………」

俺は社に戻ると直ぐに課長に呼ばれ一枚の紙切れを渡され、自分のデスクに倒れこんだ。

すると藤堂が紙切れを手を取った。

「出張命令書？」

「藤堂、代わつてくれ。何で俺なんだ？」

「さあな、あそこかもしれないしな」

藤堂が視線を上にした。

「それは無いと思うぞ。土曜が休日出勤扱いで日曜を挟む出張なんて酷すぎるだろ」

「ゆっくり観光でもしてくれば良いだろ」

「独りでか？ 詰まらん。それにだ、京都には……」

「居たな、たしか……」

俺と藤堂は一時期だけ関西の方で営業の手伝いをしていた事があり。そして京都支社には支社を牛耳るお局……おっとうご婦人がいらつしやるのだがそのご婦人に好かれてしまい大変な思いをした記憶がトラウマになるほど残っている。

「まあ、彼女の機嫌がよければ大阪本部は円満だからな」

「うう、生贄に行けと……デートをキャンセルしてまで」

「その天秤はかなりきついものがあるな。業務命令だ。死んで来い」
藤堂に肩を叩かれて、溜息をついてデスクに突っ伏すと頭の上に紙切れを乗せられた。

「うにゃ？」

「飴玉だ」

それは、俺が提出した休暇届に認証印が押されていた。

「誕生日なんだろ」

「まあ、な」

「冴えない返事だな」

「あの、飛行機テロが起きた日だからな」

「そうか」

藤堂はいつも3くらいまで話すと10を判ってくれた。
だから藤堂とは良い友達になれたのかもしれない。

仕方なく週末のデートをキャンセルして出張に向った。

「うはゝ疲れた」

帰りの新幹線は流石に自由席だときついので指定席に変更し、シートに体を投げ出しての第一声がこれだった。

朝から先ほども京都支店のご婦人の相手をさせられて疲労困憊で何もする気になれず、窓の外の暗闇を流れていく景色を見ていた。
「早く会いたいな……」

彼女と付き合い始めて仕事が終わるのが待ち遠しくて仕方が無い自

分が居る事に最近気付いた。

それは今までに感じた事の無い感情だった。

仕事が終わっても藤堂と『たぬき』に行くか『Vino』でマスターと馬鹿話をするか位しかする事が無かったからだ。

それが嫌かと言えば嫌だった訳じゃない、そんな平々凡々な暮らしをしたかったのだからそれはそれで楽しかった。

会社の最寄り駅になんとか辿り着いた。

一ノ瀬さんを少し驚かせてやろうと悪戯心から連絡もせずに彼女のマンションに向った。

エレベーターに乗ろうとすると管理人さんに声を掛けられた。

「こんばんは。あれ？ 一ノ瀬さんなら引越しましたよ」

「こんばんは。へえ？ 引越した……」

管理人さんの言葉に頭の中が真っ白になってしまい、何も考えられなくなりパニックになっていた。

気付くと自分のマンションに向かい走り出している。

俺が何かしただろうか？ この週末に何が起きたのだろうか？

もしかして彼女の身に何か……

それなら連絡があってもいいはずだ。

色んな事が頭の中をグルグルと駆け巡る。

マンションに着きエレベーターに飛び乗る、いつもより動きが遅い気がしてイライラする。

ドアを開けると明かりが点いていた。

「凜子さん！」

そう言いながらリビングに行くところエプロン姿の凜子さんが立っていて美味しそうな匂いが部屋に立ち込めていた。

「お帰りなさい」

凜子さんの笑顔を見た瞬間、全身の力が抜けてヘタリ込んでしまった。

「えっ、どうしたの瑞貴君。大丈夫？」

「凜子さんのマンションに行ったら引越したって」

「う、うん。瑞貴君が好きに使って良いって言ったからこっちに引越して来ちゃった」

凜子さんがこれでもかと言う悪戯っ子の様な笑顔で俺の顔を見ていた。

部屋を見渡すと殺風景だった部屋がすっかりカントリー調の部屋に様変わりしていた。

「良かった……」

俺はフローリングの上に倒れこんだ。

「えっ、本当に大丈夫なの？」

「凜子さんが知らない間に引越したんかするからですよ」

「えへへ、驚かせようと思って。驚いた？」

「ショック死寸前です」

本当に心臓の鼓動がありえない位に早くなり死にそうだった。でも嬉しそうにしている凜子さんには言えない。

今は噴出しそうになる感情を必死に押さえ込んだ。

胸の奥深くに……

「着替えてご飯にしよう」

「は、はい」

凜子さんに起こされて着替える為に寝室に向う……ドアを開けて直ぐに閉めた。

「あれ？」

もう一度、ドアを開けて中に入ると俺の寝室もすっかりカントリー調になりって？

思考が止まったまま、とりあえず着替えを済ませてダイニングに向うとすっかり食事の用意が出来ていた。

「いただきます」

「お疲れ様」

「んん、美味い」

「良かった。出て行けって言われたらどうしようかと思っちゃった」「いやいや、言えるわけ無いでしょ」

「えっ、駄目だったの？」

「駄目じゃないですよ。俺だって凜子さんとは一緒に居たいと思いますし。でも順番があるんじゃないですか？」

「それは、連絡しなかった事？」

凜子さんが小首を傾げて不思議そうな顔をしていた。

突っ込みどころが満載なのだが凜子さんを見ていると何も言えなくなってしまうた。

「それで、凜子さんの部屋はどこですか？」

「瑞貴君と一緒に部屋だよ。寝る時も一緒だったら楽しいでしょ、それに眠るまでいっぱいお話出来るし」

「……………」

再び思考も体も停止する。

「ん？ どうしたの？」

「いや、凜子さんそれがどう言う意味だか判って言っているのかなあて？ まだ、お互いのマンションにもお泊りもした事が無いんだよ」

「はあっ！ うう……………」

俺の言葉で初めて気が付いたらしい、耳まで真っ赤になり俯いてピクリとも動かなくなってしまった。

一息ついて凜子さんに声をかけた。

「寝る前まで好きな人と居られたら楽しくって幸せだよな。俺もそう思うよ、だからそんなに困った顔をしないで。俺は何もしないから凜子さんの心の準備が出来るまで、ゆっくりと進んでいこうね」
「うん」

食事の後片付けをしてまったりとする。

リビングで凜子さんの入れてくれた紅茶を飲みながら出張の土産話やお土産を堪能する。

そして夜も遅いので風呂に入り覚悟を決めて寝室に向う。

海外で暮らしていたのでベッドは大きいサイズを使っていた。

凜子さんが先に横になっていた。

「しつれいします?」

変な声をかけてベッドにもぐりこんだ。

「瑞貴君、ごめんね。私、頭がいつぱいっばいで」

「平気だよ、まだ知らない凜子さんの一面も見れたしね」

「うう、それって……」

「少し天然で、猪突猛進なところかなあ」

「意地悪……」

会話が遠い、何故か?

凜子さんが遠慮気味にベッドの端の方で向こうを向いて横になっているから。

「なんで、そんな端にいるんですか?」

「だって、瑞貴君が……」

ここまで来て自分が何をしてしまったのか気付いて恥ずかしいらしい。

少しでも後ろから押されたら落ちそうだった。

俺は少し体を起こして凜子さんの背中を指で押してみる。

「ひゃあ! 落ちちゃうよ」

「そんな端にいるからです」

「知っていてやったでしょ」

「もちろんワザとです」

「馬鹿!」

俺を睨みつけて頬を膨らませて口を尖らせている。

「可愛いですよ」

「もう、知らない」

「おいで」

横になり凜子さんに向けて赤ちゃんにおいでをするように両手を広げた。

「うん」

凜子さんが嬉しそうに飛び込んできた。

甘くいい匂いがする、そして柔らかく温かい。

壊してしまいそうに優しく包み込んだ。すると直ぐに凜子さんは小さな寝息を立て始めた。

引っ越して疲れたのだろう、部屋の中は完璧に片付けられていて綺麗に掃除もされていた。

凜子さんが独りで頑張ったのが良く判り、愛おしく思えてしょうがなかった。

それはギガトン級の破壊力だったが出張（殆ど京都支社）の疲れの所為か直ぐに俺自身も深い眠りに落ちた。

6 - 2 ・ お土産

翌日の火曜日は出勤すると直ぐに出張の報告書をパソコンで作り始めた。

「珍しいな。野神が出勤してから報告書を書くなんて」

「京都で力尽きて帰りの新幹線では何もする気が起きなかったんだ」
「相変わらずだったのか？」

「ああ」

「生贄ご苦労」

「生贄言うな」

報告書を仕上げて課の皆へのお土産と共に課長に提出する。

「ご苦労様」

「それじゃ、失礼します」

「おい、野神からのお土産だ。お茶の時間にも食べなさい」

俺が課長の席を後にすると、課長が女子社員に土産を渡した。

「うわあ、おたべの京ばあむだ。流石、野神君はいいセンスしているわね。いただきまーす」

そんな声が聞こえてきた。

書類を取りに席に戻る。

「はあ」

「ん？ どうしたんだ？ 心配事か？ 彼女とは上手く行っているんだろ」

「まあね、でも大変な事になった」

「何だ？」

「あとでな」

藤堂に向い掌をひらひらとさせ直ぐに出張の清算をしに総務に向う。

総務部に入ると目ざとく俺を見つけて同期の宮里が駆け寄ってきた。
「おはよー、サトサト。暇そうだね」

「私はそんな甘ったるい名前じゃないし、暇でもない」

何だか今日は機嫌が悪い？ 里美の口調が固かった。

「どうしたの？ サトサト」

「野神、あんた私に隠し事してない？」

「別に無いと思うけど」

「最近、彼女が出来たんじゃないの？」

「まあ、ガールフレンドの1人や2人いてもいいでしょ。それにここは一応職場だからね」

「うつ……」

「はい、出張の清算書とお土産」

「お土産？」

「うん、生八ッ橋」

「へぶう……」

俺が置いた紙袋の陰で宮里の貫手がボディーに突き刺さり、顔を引き攣らせながら耳元で宮里が囁いた。

「今日日、生八ッ橋って高校生か？ お前は、あん？ のっち」

「すみません、エストのマカロン・クリュです。何故、耳元で？」

「一応職場だからね。清算が済んだら連絡するから」

「はい、お願いします」

ズボツと音がしてサトサトが手刀を引き抜いた。

一課に戻ると今度は藤堂が手薬煉を引いて待っていた。

「さあ、あとでなの話を聞かせてもらおうか」

「会社じゃ、無理」

「それじゃ」

「田澤でも無理」

「はあ？ そんなに大変な事なのか？」

「藤堂の腹が攣じれるぐらい」

と言っわけで、昼休みに俺と藤堂は会社から離れた定食屋に来ていた。

「さつて、俺の腹が攀じれるかな？」

「たぶんね」

「で、何があつたんだ？」

「押しかけてきた」

「何が？」

「侍が」

「何処に？」

「俺のマンション」

「はあ??」

全てを話すと藤堂は俺の目の前で腹を抱えて大笑いしていた。

「く、苦しい。息ができねえ」

いつその事止めを刺してやろうかと思つたが、少ない友達が減るのが嫌で思いとどまつた。

「はあゝ で、どうするんだ？」

「どうするも無いだろ、マンションは引き払つちやつたんだし。それにあんな幸せそうな彼女の顔を見たら何も言えねえだろうが」

「まあ、愛おしい侍だもんな」

俺は藤堂の言葉に反応せずに溜息をついた。

「本当に心臓が止まるかと思つたんだぞ。俺の母親は……」

「そうだったな、すまん」

「もう、2度とあんな思いはしたくないんだ」

「で、伝えたのか？」

「言えるか？ 子どもの様に喜んで嬉しそうにしているのに」

「溜め込むのはお前の悪い癖だぞ」

「ああ、いつか伝えるよ」

その頃、秘書課では……

「あれ？ 凜子さんなんかいい匂いがする」

「あら、本当ね。微かだけど」

御手洗さんと双葉さんが凜子の顔を覗きこんだ。

「あう、お土産に貰ったんです。京都の練り香水を……」

「へえ、そうなんだ」

「あつ、お2人にも渡してくれって。野神君からです」

そう言つて凜子が可愛らしい包みを2人に差し出した。

「ん、ちゃんと名前まで書いてあるのね」

「それじゃ遠慮なく」

2人が包みを受け取り練り香水を手にした。

「へえ紫雲だつて。この匂いは金木犀かな。双葉さんののは？」

「天の川よ、シトラスフローラルムスクね」

「凜子さんののは？」

「私のは水琴です。フレッシュフローラルアンバーだつて言っていました」

「へえ、お土産はそれだけだったわけじゃないわよね。凜子には」

「食事の後でコムシノワのメープルマドレーヌと林檎の恋つて言うお菓子をリビングでお茶をしながら一緒に食べました」

凜子が2人を見ると2人の顔が目の前にあった。

「リビング？」

「あなたのマンションって確か2DKのはずよね」

「あう、その野神君のマンションにゴニョゴニョ……」

凜子から詳細を聞いて大騒ぎしそうになった御手洗さんを双葉さんが御して、凜子に真面目な顔で双葉さんが言い聞かせた。

「あのね、凜子。驚かすにも限度があるんじゃないの？」

「えっ、でも好きに使つて良いって……」

「そう言うことを言っているんじゃないの。本当にあなたは野神君の事になると周りが見えなくなっちゃうんだから。もう少し相手の立場になつて考えなさい。あなただつていきなり野神君がマンションを引き払つていたらどんな気持ちになるの？」

凜子から血の気が引いた。ただ嬉しくて、驚く顔が見たかっただけなのに……

「わ、私、耐えられない……」

「そうでしょ、彼だって幼い頃にお母さんと辛い別れをしているはずなのに。泣き出してもフォローはしないわよ。罰です」

「はい」

「野神君にきちんと謝る事」

「はい」

「それと凜子がだした休暇届が認可されたわよ」

「はい、ありがとうございます」

「はあ、はあん。誕生日か」

御手洗さんが軽く突っ込みを入れた。

「うう、それとお墓参りです。今年からは2人で行くって」

「へえ？ それで何て答えたの？ 凜子さん」

「花ちゃん？ 少し変だと思ったんですけど『はい』って」

「双葉さん！ 由々しき問題ですよこれは」

「凜子には『恋の秘書課』が必要かもね」

凜子は訳が判らずうつろたえていた。

すると御手洗さんが噛み砕いて説明し始める。

「あのね、凜子さん。良く聞いてね。のっちは『今年は』じゃなくて

『今年からは』って言ったんだよね」

「ああ！ うう……」

「大丈夫よ、安心しなさい。野神君はそんなに小さな男じゃないわ」

「本当に大丈夫かなあ」

御手洗さんが心配そうな顔で凜子を見ていた。

俺が仕事を終えてクロスバイクを取りに行くとそこには一ノ瀬さんのクロスバイクはもう無かった。

俺と自転車通勤する気満載で一ノ瀬さんは俺と色違いのクロスバイクを購入していた。

「ただいま」

「あ、お帰り」

「今日は早かったんだね」

「う、うん」

あれ？ 少し普段と違う感じがしたが気にせず普段どおり食事をし
て他愛の無い会話をして横になる。

横になってからも、何だか違和感を拭えなかった。

「凜子さん？」

声をかけると凜子さんの肩が震えていた。

起き上がり肩にそっと手を置くとピクンと体を振るわせた。

俺に判らないように泣いていた。

「凜子さん、何があったんですか？」

「うわぁーん。ゴメンなさい、ゴメンなさい……」

突然、俺に抱きついてきてただ謝るだけだった。

「もしかして、俺に何も言わずにマンションを引き払っていた事を
謝っているんですか？」

凜子さんが小さく頷いた。

「楽しくて嬉しかったんですね。それで周りが少し見えなくなっ
ていただけなんですよね。俺は怒ったりしていませんから気にしな
くて良いですよ」

「本当に？」

グジュグジュな顔で俺を見上げている。

そんな顔さえ愛しいと思ってしまう。

「でも、あんまり驚かせる事をしないで下さいね。今回は本当に心
臓が止まるかと思いましたから」

「うっ、ごめんなさい」

「横になりましょう」

俺は凜子さんを抱きしめたまま横になった。

しばらくすると泣き疲れた子どもの様に眠ってしまった。

6 - 3 ・ 7月18日

7月18日

俺と凜子さんは休暇をとり鎌倉に来ていた。

凜子さんの両親のお墓参りの為だ。

凜子さんの両親のお墓は湘南の海が見渡せる丘陵地にあった。

綺麗に掃除をして墓石にたつぷりと水をかけて、凜子さんが選んだお供え物とお花を供える。

線香に火をつけ手向ける。墓前に2人並んでしゃがみ手を合わせた。俺が目を開けると隣で凜子さんはまだ両親と何かを話しているようだった。

彼女の横顔を見ているとゆっくり目を開き俺に気付いた。

「ゆっくりお喋りできた？」

「うん、いっぱいお話したよ。瑞貴君は何を話したの？」

「俺？ 内緒」

「うう、ずるい」

凜子さんに言えるはずが無い

「娘さんを僕に下さい」

なんて言ったらそれこそ恥ずかしがって一日中俯いたままになるだろう事は簡単に予想できた。

「はい、凜子さん。お誕生日おめでとう」

俺はポケットから可愛らしいリボンのついた小箱を取り出した。

「え、ありがとう。開けて良いの」

「良いよ」

凜子さんが慎重にリボンを解いてラッピングを外していく小箱の中にはリングケースが入っていてケースを開けるとシンプルなV字ラインのプラチナの指輪が現れた。

「これって……ルビー？」

「うん、誕生石だね。凜子さんの」

「ありがとう」

そう言って抱きついてきた。

お墓参りの後は鎌倉の町をブラブラとして湘南の海が見えるイタリアンレストランに来ていた。

「瑞貴君はこの辺も詳しいんだね」

「ええ、そんな事ないよ。それに今の時代はネットで調べられない事なんて殆ど無いからね」

「それじゃ、私のリングサイズもネットで調べたの？」

「それは、トップシークレットです」

「うう、ずるい」

数日前に『恋の秘書課』を名乗る人からメールが来てお勧めのお店やスポットが網羅されていて追伸に凜子さんのリングサイズが書かれていた事は伏せておこう。

何故って？ それは俺の目の前で嬉しそうに微笑んでいる彼女の薬指に指輪が光っていたから。

そして営業マンにとって辛い夏がやって来た。

「あつちい……」

仕事をひと段落させ机に突っ伏す。

「まるで暑さでだれているヒバゴンみたいだな」

「なんにしても俺は珍獣なんだ。そう言えば藤堂は盆休みどうするんだ？」

「特に決めていない」

「あつそ、『小町』とどこかに行くのかと思った」

普段の藤堂はデスクでパソコンを使っている時は顔も見ずに打ち込みをしながら普通に会話をして的確な返事をしてくるが、その藤堂の指がぴたりと止まった。

「どう言う意味だ」

「別に、そのままだよ」

『小町』とはもちろん秘書課の御手洗さんの事である。

「お前はどつするんだ？」

「う、うゝん。お墓参りかな」

「お袋さんのか？」

「うん、彼女がどうしても行きたいって言うからね」

「どこにあるんだ？」

「沖縄の宮南島の離島」

「夏の沖縄か……」

何だか嫌な予感がしてきた。

#7-1・なんで、皆さんがいらっしゃるのですか？

そして盆休み兼夏休みに突入って……

「なんで、皆さんがいらっしゃるのですか？」

羽田第一ターミナルの南ウイングにある出発ロビーには秘書課の2人と藤堂が居た。

「あら、奇遇ね。これから3人で沖縄にバカンスしに行くの」

「あつ、そうなんですか」

双葉さんが平然とたたまった。突っ込まずに放置する。

灼熱の太陽！

抜けるような空！

白い入道雲！

七色に輝く海！

緑茂る南の島！

ここは沖縄本島より更に南の宮南島

そして、隣には麗しき恋人が……

「凜子さん、行きますか」

「で、でも……」

「なんで、皆さんがいらっしゃるのですか？」

羽田のターミナルと同じ言葉・同じ口調で聞いてみた。

そこには羽田に居た3人が立っていた。

「実はね、本島の方は野神君達と同じホテルが取れたのだけど、どうしても宮南島の宿泊先を押えられなかったのよ」

羽田のターミナルと同じ口調で双葉さんが返してきた。

「……………」

「それでね……………」

「好きな所でビバークしてくださいね。この島は毒蛇のハブも居ませんし。お勧めは人の居ないビーチです。蚊もあまり寄って来ませ

んし、海でトイレも済ませる事が出来るんで。あつ、そうそう防虫スプレーを持ってるんで進呈します」

双葉さんに真顔でスプレーを差し出した。

突っ込み所が満載で突っ込む気にもなれなく放置を……

「って、何で藤堂が助手席に乗っているんだ？」

「知らん」

「はあ、てつきり『小町』と旅行だと思っていたのに」

「何でお前がそんな事を言う？」

「見た。見つけた。見かけた。どれでしょう」

「……………」

藤堂はそれ以上何も言わず外を見ていた。

ルームミラーを見るとワイワイと楽しそうに秘書課の3人はお喋りに花を咲かせ、窓の外を流れる景色に声を上げていた。

市街地を抜けキビ畑の道を進むと20分もかからずに来美島に渡る長い橋に差し掛かった。

橋の中ほどで車を止めると後部座席の3人が飛び出した。

「うわあ、綺麗！」

「こんな海が日本にもあったのね」

「色んな青が輝いている」

コバルトブルー、エメラルドグリーン、マリンプルーや空を映したような水色そして砂浜の白、島の緑が鮮やかに光り輝いている。

「ふう、ただいま」

車を降りて欄干に凭れて呟いた。

「凄く、綺麗だね」

俺の腕を取り一ノ瀬さんの瞳が島の太陽を反射してキラキラと輝いていた。

「そうだね」

何も言わず寄り添ってくれる。これ以上を望めば罰が当たりそうな気がした。

「行こうか」

「うん」

「行きますよ！」

声をかけると双葉さんと御手洗さんが顔を見合わせて、直ぐに笑顔で車に乗りこんだ。

#7-2・なんだか、凄い事になっちゃったね

大きな赤瓦屋が見えてくる。

車を敷地の駐車場に入れて荷物を持って珊瑚の石垣の前をとり屋敷の庭に入り縁側に向って声をかける。

「平良おばあ、ただいま」

「あい、あい、今年も来たね。瑞貴い、大きくなったねえ？」

「あはは、おばあ。もう大きくはならないよ」

「はっしえ、今年は大勢さんだねえ」

「何だか人数が増えちゃって、ゴメンね」

「なんくるないさあ。1人も2人も一緒。大勢の方が、しに楽しいさあ」

三番座に荷物を置いて一休みしていると平良おばあの娘さんの寿美子ネエがやってきた。

「あい、もう着いたね。はあ、瑞貴いはなんで声かけないかねえ」

「あつ、ごめん。今、来た所だから」

「お茶でもだそうねえ」

そう言いながら寿美子ネエは台所に行きよく冷えたサンピン茶とサーターアンドギーを出してくれた。

「皆さん、会社の人ねえ？」

「うん、双葉さんに御手洗さんに一ノ瀬さんと同僚の藤堂」

「宜しく願います」

それぞれが挨拶をした。

「瑞貴いが2人って言うから布団用意してないさあ」

「ああ、平気、平気。自分達で乾して準備するから。押入れに入っているんですよ」

「いやあ、お客さんに悪いさあ」

「気にしないで良いよな、藤堂」

藤堂の脇を小突くと藤堂が立ち上がり照れたように頭を下げた。こ

んな時の営業マンだろうが。

「すいませんでした。急に大勢で押しかけちゃって。自分達でするので気にしないで下さい」

「そうねえ、それじゃ、おばさんは買い物に行こうかねえ」

「寿美子ネエ、俺が行ってくるよ。メモに書いてくれる？」

「助かるさあ。その前にする事があるでしょう、瑞貴いは」

「あはは、そうだった。皆に紹介しておくね。平良おばあは僕の母の親戚で寿美子ネエは平良おばあ娘さんで子どもの頃からここに来ると良く遊んでもらっていたんだ」

「それにしても綺麗な人ばかりだねえ」

「あはは、僕の会社の秘書課の3大美女だからね」

寿美子ネエからメモを受け取り一ノ瀬さんに声をかけた。

「一ノ瀬さん、買い物に行くから付き合って」

「えっ、はい」

藤堂に一番座と二番座の押入れから布団を出して石垣の上で乾して置くように伝えてから屋敷を後にした。
車を出して来た道を戻る。

「なんだか凄い事になっちゃったね」

「良いんじゃない。皆には色々とお世話になっっているんだし」

「へえ」 私はつきり後輩君が拗ねているのかと思っちゃった

「俺は、先輩が楽しく過ごしてくれているのが嬉しいからね。まあ、2人きりで旅行もしたかったけど旅は道連れだからね」

「ありがとう、私も瑞貴君と2人が良いけど秘書課の皆と泊りがけで旅行なんて初めてだから」

「そうか、社員旅行とかも中々都合がつかないみたいだもんね」

寿美子ネエのメモを見ながらスーパーで買い物をしていると一ノ瀬さんが腕を組んできた。

「う、うわあ！」

「何でそんなに驚くかなあ」

「いや、急にそんなに大胆になられても」

「腕組むことが大胆なの？」

「まあ、違う気もするけどさあ」

「良いじゃん、ここなら誰かに見られる心配も無いんだし」

「そうだね」

一ノ瀬さんの顔を見るととても嬉しそうだった。

買い物を買わせて宿に戻ると藤堂が縁側で大の字になっていた。とりあえず買い物してきた物を台所に居る寿美子ネエに渡した。

「藤堂。双葉さんと御手洗さんは？」

「散歩に行くつて出て行ったぞ」

「で、3日間着たおしたワイシャツみたいになってるけど」

「人使いが荒い。女に布団なんて重い物を持たせるな、やれ喉が渴いた。それにしても暑い……」

「じゃ、来なければ良かったじゃん」

「そ、そう言う訳……」

深く追求するのは止めた、藤堂の性格は判り切っているつもりだから。

一ノ瀬さんがお茶を持ってきてくれたので藤堂は放置して2人で庭を眺めながらまったりとしていた。

そこに散歩に行っていた双葉さんと御手洗さんが帰ってきた。

「のっち、何も無いんだけど」

「橋を渡れば直ぐに町ですからご自由にどうぞ」

「何だか言葉に棘があるんだけど」

「さあ、俺が無理やり連れてきた訳じゃないので。可哀相なのはそこで打ち上げられた海月みたいになっている藤堂じゃないかと」

「な、なんでそれを私に言うのよ！」

「別に」

御手洗さんに少しからかった様に言つと御手洗さんが拗ねて、横になつている藤堂の足元に座った。

すると双葉さんが話しかけてきた。

「この島って時間が凄くゆっくり流れている気がするわ」

「離島の離島ですからね、それにあの橋が架かったのも10年位前ですから」

「それまでは船だったのかしら」

「定期便が行き来していましたよ。日に数本だけ」

「野神君は子どもの頃からここに來ていたの？」

「ええ、ここは祖父の家ですから」

そんな話を話していると台所から寿美子ネエの声がした。

「瑞貴い、少し早いけど夕食にするさーね。お昼ごはんもまだですよ」

「判った、今行く」

俺が返事をするより早く一ノ瀬さんが台所に向っていた。

「私、お手伝いします」

「あい、お客さんにそんな事させたら罰が当たるさあ。瑞貴い、ガサガサよお！」

「今、行くよ」

寿美子ネエが作った料理を三番座の丸い座卓に運ぶ。

一ノ瀬さんが手伝ってくれたお陰で夕食の準備が直ぐに整った。

テーブルの上はゴーヤちゃんぶるーや魚のマース煮など沖縄の家庭料理のオンパレードだった。

「それじゃ、後は瑞貴いよろしくね」

「うん、寿美子ネエ。ありがとう」

寿美子ネエが表にあった自転車で帰っていった。

「野神君、おばさんはここに住んでいるんじゃないの？」

「集落に自分の家があるから」

「それじゃ、ここは？」

「双葉さん。ここは、民宿みたいな感じで使っているんですよ。家は人が住んでいないと傷みやすいですから」

「でも、のっち。看板なんか出てないじゃない」

「御手洗さん、完全予約制の宿だからです。それも1日1組限定の」
「隠れ家的な宿なんだね」

「いえ、むしろ隠れ家ですかね。□□ミでそれもネットでしか予約できない仕組みになっていますから」

「□□ミってどう言う事なの、野神君」

「宿泊した事のあるお客様の紹介が無いと利用できないんです」

「双葉さんが少し不思議そうな顔をした」

「それじゃ、一般のお客さんは？」

「無理ですね。だから隠れ家なんです。この島は夏場でもあまり観光客は多くないですからね」

「どんな人が利用しているの？」

「国内外の有名どころといったところですかね」

「たとえば」

たとえばと聞かれても直ぐには頭に浮かんでこなかった。

「うーん、この間までス波尔ディング監督が泊っていたはずですよ」
「……………」

皆が押し黙りしばらくして絶叫の様な驚きの声が上がった。

ス波尔ディング監督はSF映画の巨匠で彼を知らない人間は世界中探しても居ないくらいの監督だった。

「彼は日本が大好きですからね」

「のっち。あんたね、しれつと言っているけれどとんでもない事を言っているのに気付いているの？」

「やだな、ただの映画監督ですよ」

「はあ」 のっちが大物に見えてきた

御手洗さんがガツクリとうな垂れて肩を落とした。

「大騒ぎにならないの？」

「こんな小さな島に大物の俳優さんや女優さん、それにそんな偉大な監督が居ると双葉さんは思いますか？」

「普通は考えられないわね。似ている人が居るくらいしか」

「もし大騒ぎになったらこの宿は閉める事を明言してあるんです。だから皆さんお忍びでそれもレンタカーで来ますよ。ここを利用した事がある人は殆どリピーターですから。それと多少でも日本語が出来る人が限定です。なんせ寿美子ネエが仕切るんですから」
皆が不思議そうな顔をしながら俺の話聞いていた。

俺の横では黙ったままで目を輝かせている一ノ瀬さんが居た。

「他に聞きたい事はありますか？ この際だから話しますよ」

「それじゃ、野神君が宿泊の管理をしているの？」

「そうですね。俺が連絡を受けて下調べをして篩いにかけます」

「の、のっち。篩いつて……」

「当然です、寿美子ネエやおばあに迷惑をかける訳にはいきませんから。この家の主は俺なのですから」

「それじゃ、宿泊費って」

「大体、基本3食付で1泊6万くらいですね。高いですかね？ 双

葉さん」

「妥当じゃないかしら。数人で割れば安いくらい」

「それじゃ、のっち。私達もこれからは利用できるの？」

「うーん、厳しいかも」

「ま、まさかそれは篩いにかかれて、って事なの？」

「いや、来年まで予約でいっぱいなんですよ」

「へえ？ そんなに人気があるの？」

「長期でステイする人が殆どなので。この時期だけは俺の為に空けてありますけどね」

そう言うつと御手洗さんが腕組をして何かを考え込んでいた。

「それじゃ、また一緒に」

「却下です。今回だって羽を伸ばしに来たのに」

「それは凜子とって事なのかしら、野神君？」

「双葉さん、みなまで言わせないで下さいね」

「瑞貴君はお金持ちだったんだ……」

一ノ瀬さんが始めて口を開いた。

「俺の懐には1円も入ってこないですよ。屋敷の修繕費や管理費それに寿美子ネエの手間賃。それに島の為に何割か寄付もしていますから」

「それでも、余裕があるんじゃないの？」

「双葉さん、そのうち島の為に何かしたいんです。今の俺があるのは島のお陰ですからね」

食事も終わり片づけをしていると一ノ瀬さんが手伝ってくれた。

2人で洗い物をする、双葉さん達は交代で風呂に入っていた。

「なんだか凄いな瑞貴君は」

「何がですか？ 俺は何も凄くないですよ。この家には沢山の思い出がありますからね、どうしても守りたかったんです。その為の苦肉の策です」

「苦肉の策か、だから夜はパソコンなんだ」

「まあ、それもありますけどね」

俺と一ノ瀬さんも交代で風呂に入って皆で泡盛を飲んで盛り上がり、夜も更けてきたので寝る事になった。

「野神君はどこで寝るの？」

「俺は裏座で寝ますよ」

「裏座？」

「ええ、この奥に子どもの頃使っていた部屋があるんでそこで寝ます。双葉さん達は1番座と2番座を使ってくださいね」

「凜子はずっと聞くまでも無いみたいね」

一ノ瀬さんが俺のシャツの裾を握り締めていた。

「それじゃ、後は適当に部屋割りしてください。川の字で寝るもよし。1対2で分かれて寝るもよし。まあ、分け方は色々ですから。

なあ、藤堂」

ここに着てからあまり話さない藤堂に爆弾を放り込んでみた。すると案の定、御手洗さんと顔を見合わせていた。

「ええ、それじゃもしかして私だけ1人モノなの？」

「まあ、仕方が無いんじゃないですか。誰が発起人が知りませんけど」

「花と藤堂君、きっちり話は聞かせてもらっわよ」

この部屋の人達の夜はまだ長そうなので、俺は一ノ瀬さんの手を取って奥の座敷に向った。

#7-3・ざわわ、ざわわだよ

私は慣れない布団で寝ていた所為か朝早く目が覚めた。

昨夜、瑞貴君に連れられて奥の座敷に行くとそこは2間続きになっていて別々に布団が敷いてあった。

すると、瑞貴君が布団を隣同士に並べてくれたの。

「ありがとう」

「いつもと寝床が違うと寝付かれないからね」

少しだけお喋りしていると私が眠くなつて来たのを見計らっていつもの様に『おいで』と言ってくれる。

とても嬉しいのだけど時々どちらが年上なのか判らなくなる時がある。

それでも甘えてしまう自分が何だか恥ずかしい。

目を開けるとそこには瑞貴君の姿は無かった。

起き上がって窓の外を見るとまだ夜明け前で空が白み始めていた。

ふと隣の座敷の方から物音が聞こえる、襖を開けると音は座敷の向こうからだった。

「おはようございます」

「あい、早起きね。おはようさん」

座敷の向こうは台所で寿美子さんが朝食の準備をしていた。

「あのう、野神君は？」

「瑞貴いは浜に居るはずよ」

「浜ですか？」

「あい、あい。あんたが瑞貴いの大切な人ね？ 確か一ノ瀬さん」

「は、はい、一ノ瀬凜子です」

うう、何でこんな早朝からハイテンションなんだろう……

「上等さあ、瑞貴いにはもったいないくらい。あの子はよ、子どもの頃から辛い思いをいっぱいしているサーネ。でも一ノ瀬さんみた

いな子が側に居るならイッペー上等さあ」

「辛い思いですか」

「そう、あの子はあまり自分の事を話したがらんさあ。でもアンマもワツタアも肝苦しいかったけどよ。一ノ瀬さんみたいな上等の女の子が居るのなら安心さあ。これからも瑞貴いの事を宜しく願いますねえ」

「いえいえ。私こそ宜しく願います」

深々と頭を下げられて初めてそんな事を言われて恥ずかしくなってきたのと同時に瑞貴君の身内の人に認められて何だか嬉しかった。

「私、瑞貴君の所に行ってきます」

「直ぐ右の浜に居るからよ」

「はい」

寝間着代わりのワンピースのまま、私は屋敷を飛び出した。

朝の空気が少しひんやりしていて気持ち良かった。

直ぐ近くの浜に行くと瑞貴君が波打ち際で道着を着て空手か何かの稽古をしている。

近くにあつた流木に腰をかけると瑞貴君が私をチラッと見たけれど稽古を続けている。

いつに無く真剣な表情にドキツとしてしまう。

しばらくすると島の反対側から太陽の光が差し込み始める。

瑞貴君の真剣な眼差し、そして迸る汗が朝日でキラキラ輝いていた。見蕩れてしまっていると不意に名前を呼ばれた。

「凜子さん、おはよー」

目の前にはいつもの子どものような笑顔の瑞貴君が噴出す汗をタオルで拭きながら立っていた。

「おはよう。瑞貴君は空手をやっていたんだ」

「うん、空手と言うより古武道かな、子どもの頃に爺ちゃんに叩き込まれたんだ。周りの子より体が小さかったからね。まあ、今もそんなに大きい方じゃないんだけどさ」

「マンションでも稽古はしていたの？」

「時々、気分転換にね。島に居る時は毎朝稽古をするようにしているんだ」

「明日も見に来て良い？」

「凜子さんが眠くないのなら」

「うん、全然平気」

眠いはずが無いだって大好きな人の知らなかった顔が見られるのだもの。

「それじゃ、朝ごはん食べに行こう。シャワーも浴びたいし」

「うん」

瑞貴君が少しだけ前を歩いている。彼の背中が何だか大きく見えた。

屋敷に帰ると、すっかり朝食の準備が整っていた。

先輩達と藤堂君を起こす。

双葉さんは寝起きが悪いのか不機嫌そうな顔をしている、花ちゃんと藤堂君は2人ともげんなりした顔をしていた。

恐らく双葉さんに事細かく説明を求められたのだろう。

私は瑞貴君の観察力の凄さに驚かされることがある、花ちゃんと藤堂君の事もそうだ。

それと、時々黒いオーラを放っている。昨日は常に黒っぽいオーラに包まれていた。

その結果が今朝の3人の表情に表れていた。

「いただきまーす」

「……………」

「皆、元気ないですね」

「……………」

「野神君、今日の予定は？」

「さあ、勝手について来たんですからご自由に」

「そうだったわね、その仕打ちがこれな訳？」

「俺は何も藤堂達の事だつて直に判る事だし早めにと申っただけですよ」

「何で君に花達の事が判るの！」

双葉さんが少しイライラしている。

「デートをしている時に見かけたんですよ、仲良く歩いているところを。で、ちよつと鎌を……」

「黒いな、野神は」

藤堂君がボソツと呟いた。

「俺は猫の下も猫だからね。それも『ケット・シー』猫の王様だから」

相変わらず瑞貴君は掴み所が無くユラリユラリとかわしていた。

朝食を食べておばさんと片づけを終えたとおばさんが手提げ袋と小菊の花束を渡してくれた。

「お墓参りに来てくれたんでしょう。瑞貴いに行つておいで」

「はい、ありがとうございます」

「あい、瑞貴い。バケツに水を汲んでからよ、朝のうちに行つてくるといいサーネ」

「うん、判った」

箒とバケツを持って歩く瑞貴君の後を着いて行く。

しばらく屋敷の前の道を歩いていると背の高いサトウキビの畑の細い道に入つていった。

「うわあ、なんかザワザワ鳴ってる」

「ザワワ、ザワワだよ」

「ああ、それ知ってる。哀しい歌だよ」

「沖縄戦の歌だからね。まあ、この辺は関係なかったみたいだけど。着いたよ」

そこはサトウキビ畑の中にぽつんとあるコンクリートで作られた四角い箱みたいなお墓だった。

「これがお母さんのお墓なの？」

「うん、野神家のお墓かな。この箱みたいなお墓の中に先祖代々の骨壺が収められているんだ」

瑞貴君は説明しながら箒でお墓の上や周りを綺麗にしていた。

徐にバケツの水をお墓にかけて花瓶や茶碗を綺麗にして花瓶に水を入れた。

「バツクをちょうだい」

「うん」

バツクを渡すと中からサンピン茶と黒いお線香を取り出した。

「花を二つに分けてもらえるかなあ」

「うん、判った」

花を渡すと花瓶に差して供えている。

「今日は、爺ちゃんがメインじゃないんでサンピン茶で我慢してくれ。美紅、お兄ちゃんが会いに来たぞ」

「えっ、お兄ちゃんて……」

「まだ、話して無かったね。実は妹も母と一緒に事故で亡くなったんだ」

「何歳だったの？」

「6歳かな入学式を楽しみにしていたのに。未だに妹の事を考えると辛くって」

「でも、一応妹がつて……」

「それは、俺の事を引き取った親父だという人の娘。丁度同い年で名前も一字違い、あり得ないでしょ。だからあまり会いたくないんだ」

「そうだったんだ」

「うん、でも凜子さんが気にする事じゃないからね。ここに来て」
瑞貴君が左手で地面を叩いた。

私が瑞貴君の横に座ると黒いお線香を半分にして火を着けて手向けて目を閉じた。

私も目を閉じて手を合わせる。少しして目を開けると隣の瑞貴君はまだ目を閉じたままだった。

「何をお話しているの？」

「色々、凜子さんの紹介とか見守ってくださいって。凜子さんは」

「宜しく願いますって」

「じゃ、帰ろうか」

瑞貴君が手を差し出してくれた。

「うん！」

彼の手を取って歩き出す。

今はこんなに明るくって（時々黒いけど）ムードメーカーなのに彼の過去は知れば知るほど哀しいものだった。

これがおばさんの言っていた肝苦しいってことなんだろうか？

そんな事を考えていると、笑顔で私の顔を覗き込んできた。

「どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ」

私も笑顔で返す。いつも瑞貴君の側で笑っていたらいいな。

#7-4・でも、気持ちいいね

墓参りを済ませて屋敷に戻ると相変わらず藤堂はゴロゴロしていて、双葉さんと御手洗さんは縁側でお茶を飲んでいた。

「あちゃ、50年後を見ているみたい」

「もう、そんな事を言うとな怒られるよ」

冗談を言うところ瀬さんに怒られた。

「どこにも行かないんですか？」

「花と藤堂君には車で出かければって言ったのよ」

双葉さんの後ろで御手洗さんが必死に両手で×印を作って首を横に振っていた。

「双葉さんはどうするんですか？」

「私はここで良いわよ、どうせ50年後と同じ姿でしょうから」

聞こえていたらしい、どこまで地獄耳なのだろう、とりあえず笑って誤魔化した。

「あ、はははは……しょうがないなあ、海にでも行きますか？ せっかく沖縄の離島に来たのに泳がないなんてもったいないですからね」

「でも、水着しか持って来てないわよ」

「うちは一応、宿ですよ。シュノーケリングのセットからシーカヤックまでご準備しています」

「それじゃ、着替えて集合ね」

30分後、着替えを済ませて三番座に居ると寿美子ネエが顔を出した。

「あい、海に行くね。間に合ったさあ、はい、島じょーり」

寿美子ネエが袋から取り出したのはカラフルな島ゾウリだった。

紫、ピンク、グリーン。それに定番の赤・青・黄色。

「へえ、最近はカラフルだね。俺が知っているのは定番の3色だけ

ど」

「最近はナイチャーにも人気サーネ。おばさんも儲かせてもらってるサー」

寿美子ネエが一人一人に渡し始めた。

「うわあ、可愛い。名前が彫ってある」

「私のは亀も彫ってある」

「素敵な、ビーチサンダルですね」

藤堂は相変わらずゴロゴロしていた。

「寿美子ネエは器用だからね」

「ええ、これって寿美子さんが彫っているんですか？」

「あい、そうよ。でも、始めは瑞貴いに教えて貰ったサー。泊ってくれたお客さんにヨ、あげると喜ばれるサーネ」

「ありがとうございます」

「凜子ちゃんの柄は瑞貴いとお揃いだからヨ」

一ノ瀬さんが赤くなって俯いてしまった。

「俺、道具とって来るから」

そう言っでどつばに嵌まる前にその場を逃げ出して裏にある納屋に向った。

そしてシュノーケルセットやビーチパラソルを準備して庭に戻る。

「行くよ」

「「「はい」」」

藤堂の返事が無く、見るとまだ眠っていた。

「藤堂！ 行った！」

そう言っでビーチパラソルを藤堂の腹を目掛けて投げた。

「げっふあ！ ううううう……」

「死んだか？」

「死ぬわ！ ボケ！」

藤堂がビーチパラソルを振り上げると秘書課の3人が大笑いしている。

「クソ、面白くない！」

「腐るなよ、海に行くから荷物持ちを手伝え」

「仕方が無い」

渋々、藤堂が起き上がりパラソルとシートが入ったバッグを持った。人数分のシュノーケルセットを持って10分程歩きビーチに向って細い道に入る。

「瑞貴君、重くないの？ 手伝うよ」

「じえんじえん、お客さんに荷物持たせたらおばあに叱られるもん」
「でもさあ」

「宿主は俺だからね」

草むらを抜けるとそこには碧い海と白い砂浜が広がっていた。

「凄い、綺麗……」

「うひゃ！ こんな海初めて」

「こんなに綺麗なのに誰も居ないなんて不思議」

三者三様の驚きの声が上がった。ビーチには木陰が無いのでパラソルを立てて飛ばされないように固定する。

「日差しが強いのでちゃんと日焼け止めを塗ってくださいね。あまり焼きたくない人はパラソルの下に居た方が良いかも」

「OK！」

「藤堂、フリスビーしようぜ」

「俺は寝る」

「そんな所で寝ていると『背中に日焼け止め塗ってね』なんて格好の餌食になるぞ」

俺がそう言つと藤堂が慌ててパラソルから飛び出してきた。

双葉さんが悔しそうな顔をしていた。

「野神君って会社に居る時と全然違うのね。まるで子どもみたい」

「ハーフパンツの水着にTシャツだからかなあ？」

「凜子さん、そうじゃなくてお子様なの」

「でもね、花ちゃん。凄く大人っぽい時があるんだよ。頼れるって言うかいっぱい甘えさせてくれるの」

「それってお惚気？」

「はう……」

ぷしゅーと音がして凧子は真っ赤になってしまった。

「でもなんだか伸び伸びしているわね。あれが野神君の自然体なんでしょ」

「のっちって一人っ子なのかなあ」

「あのね、妹さんが居たって美紅ちゃんって言う名前の。でもお母さんと事故で亡くなったって、お墓参りに行った時に教えてくれたの。未だ思い出すと辛いつて、そして引き取られたお父さんの家にも妹さんと同じ年で一字違いの妹が居るって」

「そ、それって……」

「お父さんも再婚していつて事なのかしら」

「そこまでは聞けなかったです」

「複雑なんだ、のっちの家は」

「うん。何だかね、瑞貴君の過去って辛い思い出ばかりなんだなつて。おばさんも言つてた、お婆ちゃんもおばさんも肝苦しいつて」

「チムグルしい？」

「うん、心が苦しいつて意味だと思う。締め付けられるように」

「これからは凧子が楽しい思い出を作つてあげないとね」

「はい」

藤堂とフリスビーを投げ合う、久しぶりに走り回つて喉がカラカラになっていた。

するとナイスタイミングでクラクションの音がした。ビーチの入り口を見ると寿美子ネエがクーラーボックスを持っている。

「瑞貴い、置いておくからよ！」

「うん、ありがとう」

俺が手を振ると寿美子ネエがクーラーボックスを置いた。

「昼はどうするネエ？ ソバでも持つて来るサーネ」

「お願いね！」

寿美子ネエに返事をする、藤堂の声がする。

「のっち！ 行っただ！」

振り返ると目の前にフリスビーが飛んできた。

右足を1歩引きながら右手でキャッチして、そのまま体を回転させて投げ返す。

フリスビーは藤堂の遙か頭上を飛んでいく。

「野神！ どこに投げているんだ」

腰に手を当てて仁王立ちして叫んでいる藤堂に向って叫んだ。

「フォアー」

「なんだ、ゴルフのOBじゃあるまいし」

俺が片手を突き上げると同時に藤堂の後頭部にフリスビーが直撃した。

フリスビーは角度を着けて投げるとブーメランみたいに帰ってくる投げ方がある。

「てめえ！ 狙ったな」

「ちゃんと教えただろ！」

藤堂が血相を変えて追いかけてきた。

パラソルでは3人が腹を抱えて笑っていた。

クーラーボックスをパラソルに運んでジュースを取り出す。

「ぷっふぁー 染みる。炭酸の逆襲だ！」

「のっちって本当に子どもみたいだね」

「御手洗さん、別に良いじゃん。俺達以外は誰もいないんですよ、畏まる必要も無いし。誰かに気を使う必要も無いんだし」

「そうね、だからあの宿も長期利用者が多いのかも。私達も楽しみましょう。でもラブラブは控えめにね。花」

「うひゃ、言われちゃった。ラブラブなんてしてないのに！」

御手洗さんが我関せずの藤堂をチラッとみて拗ねていた。

「お手で、繋いで。公園を行けばあ」

「の、のっち、まさか……」

「新宿御苑だったけなあ、違うや。あれは国営昭和記念公園だ。会

社からも離れているし絶好のデートスポットだもんね」

「あんた、どこまで……」

「楽しかったよね、凜子さん」

「うん、池でボートにも乗ったしね」

「そ、それ以上は駄目！」

御手洗さんが真っ赤な顔をして追いかけてきた。

「一ノ瀬さんは訳が判らないのかポカンとしていた。」

「凜子、あなたは見なかったの？」

「何をですか？」

「そっか、凜子は野神君しか目に入ってたんだ」

「あう……」

「一ノ瀬さんが真っ赤になった。」

「しかし、藤堂君。君はなんでそんななの？」

「双葉さん、自分は暑いところが苦手なんです。海よりも涼しい山が好きなんです」

「それで、別荘を借りようとしていたんだ」

「……………」

藤堂がうな垂れて倒れこんだ。

「はあ、はあ、はあ、あちついい」

「逃げ回るな、のっち」

「もう、許してください」

「許さねえ、どこまで知っているか吐け！」

御手洗さんに首根っこを押さえ込まれた。

「御手洗さんが知らない事も知っていますよ」

「はあ？ 良いから言いなさい！」

「藤堂が高原にある専用露天風呂付きの貸し別荘を予約しようとしていた事」

「へえ？」

「誰と行こうとしたんですかね？ 温泉が好きで山好きな御手洗さ

ん」

御手洗さんの体から力が抜けて座り込んでしまった。

「のっち、それは本当なの？」

「ええ、パンフレット集めて必死だったんで少しアドバイスをしたけど、結局ここに召集されちゃって腐っていますけどね」

「し、知らなかった」

「あいつは、沈着冷静に見えるけど、本当は熱い奴なんです、感情を表に出すのが苦手なんでしょうね」

「私、なんだか自信が無くて」

「ファイトですよ。藤堂はちゃんと見ていますから」

「ありがとう」

「それと、あいつは暑い所が苦手ですからね」

「うん、それは知ってる」

パラソルに戻ると藤堂は横になっていた。双葉さんに何か言われたのだろう。

「野神君、ほったらかしで良いのかしら？」

「何をですか？」

「り・ん・こ」

「放っておいている訳じゃないですよ。目がキラキラとして楽しそうじゃないですか」

「そうね、子犬みたいな顔しているものね。思いっきり尻尾を振って」

「あはは、海で泳いで来ます」

調子が狂うなあ、みんなの前で声をかけたりするのが照れ臭くって仕方が無く海に走り出した。

「はあ、大胆なんだか初心なんだか。凜子、のっちと遊んできなさい」

「はい！」

一ノ瀬さんの声で俺が振り返ると白いＴシャツを脱いで走ってきた。

一ノ瀬さんの水着は黒のビキニで胸元とスカートに白いレースがあらわれていて大きな目のリボンがついていた。

初めてみる水着姿に後ろにひっくり返りそうになる、かなりポリュームのあるバストだった。

思わず海に頭から飛び込んだ。

「ぷはあ、気持ち良い」

「瑞貴君、待ってよ」

「おいで」

両手を広げるといつもの笑顔で海に飛び込んできた。

「しょっぱい！」

「海の水だからね」

「でも、気持ち良いね」

「でしょ、最高の気分転換だよ」

「うん」

「ねえ、先輩。近くない？」

『おいで』と言ったものの水着姿での至近距離はギガトン級の破壊力だった。

「うう、いつも一緒に寝てるのに」

「いや、ここは海だし。それに……」

「ああつ、後輩君のエッチ！」

一ノ瀬さんが胸を隠した。

「いや、だって気になるでしょ普通。俺だって一応男なんだから」

「もう、馬鹿」

「拗ねた顔も可愛いですよ」

そう言っただけ軽くキスをした。

「な、な、何を馬鹿なんだからあ！」

「ここまでおいで」

浅瀬をザブザブと逃げ出すと追いかけてきた。

パラソルの方に目をやり御手洗さんにアッカンベーをする。

『ブチッ』と何かが切れた様な音が……

「藤堂君！ 泳ぐよ！」

御手洗さんが藤堂の手を無理矢理引つ張りこちらに向ってきた。

「えい！」

そんな声がして腰の辺りに軽い衝撃を感じると、一ノ瀬さんが飛びついてきて海に倒された。

「捕まえた。お姉さんをからかつてはいけません」

「ふふふ、はい」

「何が可笑しいの？」

「可愛いなって」

「もう、私の方が年上なのに」

するとザブザブと直ぐ横で水の音がした。

「はい、そこ邪魔、どいてどいて」

「御手洗さん……ゴボツ！」

御手洗さんの突き刺すような視線が振り下ろされた瞬間。御手洗さんの足も俺の腹の上に振り下ろされた。

海に沈められて起き上がろうとすると今度は藤堂に踏みつけられた。

「げふお、げふお。死ぬ……」

「大丈夫？」

「大丈夫よ、のっちは殺しても死なないから」

藤堂を見るとサムズダウンをしていた。

御手洗さんと並んで海に入っていく。

「その先は……急に深くなっていますからね」

俺がゆっくりした口調で言うとお手洗さんの悲鳴が上がった。

「きゃー」

そして藤堂にしっかり抱きついていた。

笑顔でサムズアップする。

「のっち、覚えておきなさい！」

「逃げる！」

一ノ瀬さんの手を取ってパラソルの方に駆け出した。

昼食は寿美子ネエが運んでくれた宮南そばだった。一ノ瀬さんに手伝ってもらって皆にそばを配る。

どんぶりに入っている麺を一度出汁に通してから再びどんぶりに出汁を注ぐ。

具は平カマボコと細切りの豚肉に島ネギだった。

「うわぁ、美味しい」

「海でおそばなんて始めてだわ。でも、太目のラーメンみたい」

「瑞貴君、この出汁は？」

料理好きの一ノ瀬さんらしい質問だった。

「基本は豚骨に鰹出汁ですね。家によって割合は様々です豚骨が多めだとアジクーターになって、鰹が多めだとサッパリ味になるんです」

「お家でも作れるかなあ」

「出来合いの出汁があるんでそれをいくつか混ぜて作ってもそれなりになりますよ」

「うん、でも本格的に作ってみたい」

「それじゃ、寿美子ネエに教えてもらいましょう」

「うん、ありがとう」

相変わらず、暑い所が苦手な藤堂は黙々と食べていた。

少し休憩して皆でシュノーケリングをする事になった。

波うち際で俺が講習しながら実演して少し練習してから海に入る。

「この辺の海は沖まで白い砂浜と点在する珊瑚があります。海の中は似たような感じなので遠くまで行かないで下さいね。助けませんよ」

「うう、本当に……」

「つな訳、無いじゃないですか。本気にしない」

「意地悪」

「はい、意地悪です。レッツ！ ラーゴー！」

あまり一ノ瀬さんと馬鹿をやっていると周りの視線が怖いので海の

中へ誘う。

泳ぎに自信が無い人にはライフジャケットをつけさせている。

御手洗さんと一ノ瀬さんだけがライフジャケットを着けていた。

「うふふ、クリームソーダの中を泳いでいるみたい」

「いつ来ても綺麗だな」

周りを確認しながら一ノ瀬さんと泳ぐ、御手洗さんは藤堂の腕にしがみ付いたままだった。

双葉さんを見ると優雅に1人で海を楽しんでいた。

しばらく水中散歩を楽しんでいると何かが暴れているような音在水中でした。

顔を上げると双葉さんが何かに驚いてパニックになっていた。

「藤堂！」

俺が叫ぶと藤堂も気付いて双葉さんに向って泳ぎ出した。

「凜子、これを持ってて」

「ええっ」

「大丈夫だからね」

「うん」

一ノ瀬さんを落ち着かせてマスクとシュノーケルにフィンを預けてクロールで双葉さんに向う。

途中で顔を上げると藤堂と目が合った、簡単に手で指示する。

藤堂が正面からゆっくりと、そして俺は潜水で双葉さんの背後に回った。

前から進んでくる藤堂に気を取られて双葉さんは俺に気付かなかった。

藤堂が手を差し出す、パニックになっている双葉さんが必死に手を伸ばした瞬間を見逃さず双葉さんの首に右腕を巻きつけた。

驚いた双葉さんが暴れる。

「動くな！」

耳元で叫ばれた双葉さんは体が硬直して俺の右手を両手で握り締め

た。

双葉さんのマスクをはずすと過呼吸気味に呼吸が乱れている。

「もう大丈夫です。ゆっくり落ち着いて、吐いて、吸って、吐いて、吸って」

耳元で囁きながら落ち着かせると双葉さんの体から力が抜けた。

「何もしないで力を抜いてそのまま。浜に向います」

双葉さんの顎に腕を当てて顔に水がかからない様に後ろ向きで泳ぎ出す。

途中で一ノ瀬さんの方を見ると藤堂に連れられて御手洗さんとビーチに向って泳いでいるのが見えた。

背中に砂浜を感じて双葉さんを見ると体が恐怖で震えていた。仕方なく抱き上げて波打ち際まで運ぶ。

3人は先にビーチに戻って心配そうに見ていて声を掛け様としたので首を横に振って止めさせた。

双葉さんを静かに砂浜の上に座らせる。

「息苦しく不是吗？ 痛い所は無い不是吗？」

俺の質問に双葉さんは首を振り続けた。

双葉さんの瞳からは涙が溢れていた。

「少し驚いてパニックになっただけです。もう安心です。ね」

そう言いながら双葉さんの頭を撫でると泣き崩れて抱きついてきた。不安がる子どもを落ち着かせるようにしっかりと双葉さんの体を抱きしめた。

ヒクッヒクッとしゃくり上げているが落ち着いてきた様子だった。

「あのね、海蛇が……」

「今は何も言わなくて良いですから」

「うん……」

しゃくり上げるのが納まった頃を見計らって藤堂に声をかけた。

「藤堂、頼む」

目でパラソルを見て合図をすると藤堂が双葉さんの腕を取って腰に手を当てて歩き出した。

藤堂の反対側で御手洗さんが双葉さんの体を支えていた。

「はあく死ぬかと思った」

力が抜けてビーチに倒れこんだ。

「瑞貴君、大丈夫？」

「駄目みたい」

「えっ」

「嘘です、凜子さんがキスしてくれたら元気になります」

「それだけ冗談が言えれば十分です」

一ノ瀬さんに言われて飛び起きた瞬間、視線が傾きその場に座り込んでしまった。

「瑞貴君？」

一ノ瀬さんの声に藤堂と御手洗さんが振り向くが手で『行け』と合図した。

「はははは……だっせえ、今頃になつて震えてきやがつた」

掌を広げると有り得ない位に震えている、そのうち震えが全身に伝わり堪らず自分の体を抱きかかえて俯いた。

「クソッ、止まらねえ」

不意に頬に手が当てられた。少し顔を上げると一ノ瀬さんが優しくキスをしてきた。

「馬鹿なんだから」

ふっと体から力が抜けて震えが止まり胡坐をかいて自分の体を抱きしめたまま横に倒れた。

「もう、ふざけないの」

そう言つて俺の右手を引つ張り上げると一ノ瀬さんの動きが止まった。

見ると俺の右腕を凝視している。

一ノ瀬さんの視線の先にある俺の右腕には双葉さんが掴んだ手の後が痣になりそして爪が食い込んだ痕がくつきりと残っていた。

「火事場の馬鹿力と言つやつですよ」

立ち上がるとまだ膝がガクガク言っていた。

「本当に大丈夫なの？」

「大丈夫です、直ぐに治まりますよ」

なんとか安心させてあげたかったが体は正直だった。

足が動かない、膝に手を着いていると脇に一ノ瀬さんが手を差し込んで俺の腕を自分の肩にまわした。

「すいません」

「もう、なんでそんな事を言うの？」

一ノ瀬さんの肩を借りながら何とかパラソルの近くまでたどり着き横になった。

「野神、平気なのか？」

「なんも、なんも。久しぶりにマジで泳いだから体がびっくらこいただけ。双葉さんは？」

「だいぶ、落ち着いた」

「そんじゃ、一休みして撤収しますか」

蝉の鳴き声と優しい風の音と静かな波の音。

時が止まったように時間が流れていく。

クラクションの音で現実に戻された。

ビーチの入り口を見ると寿美子ネエが食器や道具を回収しに来ていた。

御手洗さんが食器やかんを一ノ瀬さんがシュノーケルのセットを運んでいた。

「お、重い……」

「ほら、貸して」

一ノ瀬さんの手からメッシュバッグを受け取る。

「もう、大丈夫なの」

「平気だよ」

「でも、こんな重い物を持って来たの？」

「一応、男だからね」

メッシュバッグを寿美子ネエに渡す時に腕の傷に気付いて寿美子ネ

エが俺の顔を見た。

直ぐに笑い返すと何事も無かったかのように話しかけてきた。

「こんばんはB B Qで良いね」

「OK！ もう直ぐ帰るから」

「あいよ」

寿美子ネエは何かがあっても俺が笑顔で答えれば何も聞いてこなかった。

前に一度だけ理由を聞いた事がある。

「瑞貴いが笑顔なら、瑞貴いが答えをだした違う？ それで良いサ
ーネ」

そんな風に笑いながら言ってくれた。

#7・5・触った事がないから判りませんよ

屋敷に帰ると庭にＢＢＱの用意が大方は準備されていた。準備があるので先に風呂を使わせてもらい部屋に戻ると一ノ瀬さんが待ち構えていた。

「手を出して」

「何をするんですか？」

「消毒」

「凜子さん、それは正解じゃありません。綺麗な水で洗い流したから平気です」

「でも」

「凜子さんは俺の言葉が信じられませんか？」

「そうじゃないけど」

少し暑いのを我慢して白いロンティーを着る。

「暑くないの？」

「目立つし気にするでしょ。双葉さんなら」

「あつ、そんな事まで」

「少し我慢して夜になれば涼しくなりますよ」

まだ、気にしている一ノ瀬さんの肩に手を置いてキスをする。

「お返しです。でもしよっぱい」

「もう、馬鹿。お風呂に行つて来よう」

一ノ瀬さんが部屋を後にした。そして俺は準備に取り掛かった。

「さあ、じゃんじゃん焼きますから、ガンガン食べてくださいね」
ＢＢＱが庭先で始まった。何だか乗りが悪い、双葉さんが溺れた事をみんな気にしているのだろう。

「双葉さん、もう体は大丈夫ですか？」

「ええ、ありがとう。瑞貴君は平気だったの？」

「俺ですか？死ぬかと思いましたよ」

「えっ！」

「だって青いビキニの双葉さんが抱きついて来たんですよ。一ノ瀬さんより大きくて柔らかい物が体に当たって、心臓が止まるかと思いましたよ」

「あ、あなたって子はねえ」

双葉さんが握り締めた割り箸が『バキッ』と音を立てて半分に折れた。

「もう勘弁してくださいね。次は我慢できるかわかりませんから」

「次なんてありません！ 凜子の前でなんて事を言うの！ そこに直りなさい！ 許さないんだから！」

「ひいえー」

「藤堂！ 御手洗さん助けて」

俺が逃げ回ると双葉さんが怒った顔で追いかけてきた。

御手洗さんと藤堂が笑い出した。

「凜子さん、助けて」

一ノ瀬さんの後ろに隠れると一ノ瀬さんがそっぽを向いた。

「ええ、どうせ双葉さんより小さいですよ。後輩君は大きな方が好きなんだ」

双葉さんを見ると肩で息をしていた。

「はあ、はあ、野神君。許してあげるからこれでチャラいいわね。

さあ、皆。お肉が炭になるわよ」

「はい」

「へいへい」

御手洗さんと藤堂が返事をして肉や野菜を取り始めたが、一ノ瀬さんはまだ拗ねたままだった。

「凜子さん、食べましよう」

「後輩君なんて知らない」

「凜子さんを引き合いに出してすいませんでした。まだ、触った事ないから判りませんよ」

頭を下げて、一ノ瀬さんの耳元で囁いたつもりだが周りにも聞こえ

てしまったらしい。

「え、ええええ……」

「あなた達って一緒に暮らしているのよね」

「馬鹿が」

一ノ瀬さんが真っ赤になり、俺は……

「ヨンナ〜ヨンナ〜で良いんです、俺達は」

「ヨンナ？」

「はい、ゆっくりって言う意味です。双葉さん」

「そっか、優しいんだ。野神君は」

「相手は凜子さんですよ」

「ああ、瑞貴君がなんだか酷い事を言ってる！」

一ノ瀬さんが拗ねて肩を叩いてきた。

焼きたての三枚肉を箸で取り少し冷まして一ノ瀬さんの前に差し出した。

「はい、あ〜ん」

「うぐう、騙されないもん」

「美味しいですよ。アグーと言う黒豚ですから」

一ノ瀬さんが小さな口を開いたので肉を口に入れる。

「うう、おいひいい」

そんな事をしながらワイワイガヤガヤとBBQを楽しんだ。

片づけが終わって皆でお喋りして私がお風呂に入ると瑞貴君は先に部屋で横になっていた。

布団は前の日と同じように隣に敷いてくれている。

顔を覗き込むと寝息が聞こえる。

横になり瑞貴君の顔にかかっている髪の毛を指で救い上げると瑞貴君が目覚ましてしまった。

「ゴメン、起こしちゃった？」

トロンとした眠たそうな瞳で私の顔を見ている。

「凜子さんだあ」

笑顔がとても可愛い。

「体はもう平気なの？」

「うん」

疲れているのか眠たいのかいつも以上に子どもぼく見える。

「少し、話しても良い？」

「うん、良いよ」

それからお母さんと妹さんの事を教えてくれた。

とても優しくかった事。

妹と一緒に遊んだ事。

そして……

「母さんと妹は海で亡くなったんだ。僕が遠足に行っている間に。家の近くに海があつてその日は風が少しあつて波が高かった。たぶん僕が遠足に行ったから美紅がどこかに行きたいと言ったんだと思う、そして2人で海に行つて……僕が家に帰ると……誰も居なくて

……」

「うん、判ったからね」

泣きそうになるのを必死に堪えた。

「だから、色んな事を覚えてんだ。人を助ける為にはどうしたら良いのか」

「それで、あんなに落ち着いていたんだね」

「凄く怖かった。でも、僕に出来る事はしなきゃね。それでも安心したら力が抜けちゃった」

「うん」

「凜子さん？」

「うん？」

「お願いがある、今日はギュってして」

「うん、判った」

私は優しく瑞貴君の頭を抱きしめた。

「柔らかくて……良い匂いが……」

瑞貴君は安心した子どもの様な顔をして眠ってしまった。

#7・6・あ、言ったな

翌日は車にシュノーケルセットを積み込んで水着に着替えて宮南島へドライブに向った。

島を出て橋を渡り城辺方面に車を走らす。

「この島には山が無いのね」

「ええ、平らな島ですからね。台風の時なんかは遮る物が無いから凄いですよ」

「大変そう」

「まあ、毎年の事ですからね」

車を右折させて海に向かい走ると綺麗に整備されたビーチが見えてきた。

「野神君、ここは？」

「イムギヤーマリンガーデンです。あそこの橋の下にはクマノミが沢山いるんですよ」

「ええ、それは二モなの？」

「御手洗さん、それは見てからの楽しみですね」

車を駐車場に止めてとりあえず遊歩道を歩いて橋に向う。

「瑞貴君、牛が居るよ」

「一ノ瀬さんが向いにある小高い丘？の上を指差した。」

「あそこは展望台です。あれは牛のモニュメントですよ」

「ふうん、変なの」

「何で牛なのかは聞かないで下さいね。あそこまで登った事がないんで」

「どうして？」

「面倒だから……」

「馬鹿」

橋の上に着くと皆が下を覗き込んでいた。

「うわ、高！」

「この下の展望台側にクマノミが沢山居るはずですよ」

「のっち、居るはずは曖昧じゃないの？」

「ここに来たのは数年ぶりですから」

「はあ？ あんた毎年何をしているの？」

「来美島から出ないですよ。海を見ていたり釣りをしたり。夜は星を見えています」

「何もしないわけね」

「御手洗さん、一番の贅沢ですよ。それが」

「そんなもののなの？」

「はい」

言い切つて徐にＴシャツを着たまま橋の中ほどまで後ずさりする。

「のっち、まさか……」

「まさかです、願いが叶うらしいですよ。イムギヤー名物、イムギヤージャンプです！」

少し助走をつけて欄干に足を掛けて思いっきりジャンプして両手両足を思いっきり伸ばす。

「馬鹿！」

ドボンと音がして空気の泡が炭酸水の様になる。

「気持ち良い！」

「本当に野神君は子どもね」

「わ、私も……」

「り、凜子は止めなさい」

双葉さんが止めるのも聞かずに、一ノ瀬さんが欄干を乗り越えようとしていた。

笑顔で『おいで』と両手を広げると俺のＴシャツを投げて捨てて一ノ瀬さんが飛び降りた。

目の前に水柱が上がりシュワシュワと空気の泡が立ち昇る、直ぐに一ノ瀬さんの体を抱き上げた。

「水着は平気ですか？」

「うん！」

満面の笑顔で俺に抱きつきながら橋の上に居る3人に手を振っていた。

「はぁ、本当に凄いわ、凜子さんは」

御手洗さんが呆れていると双葉さんは笑って手を振っているだけだった。

藤堂が欄干を乗り越えて御手洗さんに手を差し出した。

「ええ、わ、私も行くの？」

「あいつ等には負けたくない」

「はぁ」

俺と一ノ瀬さんが橋の下から離れると御手洗さんが渋々欄干を乗り越えて藤堂の手を握った。

「せーの」

皆の掛け声と共に2人が飛び降りて水柱が上がる。

「うつしゃ！ 気持ち良い！」

御手洗さんが雄叫びを上げた。

「私は荷物を持ってビーチに行くわよ」

そう言つて双葉さんは島ゾーリやTシャツをかき集めてビーチの方へ歩き出した。

シュノーケルをつけてクマノミを見たりしているとビーチに乾いてあったTシャツはすっかり乾いていた。

車に乗って移動を開始する。

少し走ると岬の先に灯台が見えてくる。

「あそこが、宮南島で一番有名な東平安南崎です」

車で岬の道を走り先端の灯台の近くに車を止めた。

「うわぁ、絶景かな、絶景かな」

「石川五右衛門ですか、御手洗さんは博識ですね」

「あ、あはははは」

「……………」

「つて、突っ込んでよ。放置されたら恥ずかしいじゃん」
「す、すいません。なんだか突っ込みづらくって」

目の前には太平洋と東シナ海が一望できた。

そして岬に沿って珊瑚礁が広がっている。

「ねえ、瑞貴君。どこからが太平洋でどこからが東シナ海なの？」

「……………」

一ノ瀬さんの子どもの様な質問に沈黙してしまった。

「なんか言つてよ。まるで私が馬鹿みたいじゃない」

「いや、可愛い質問だなと思って」

「あのね、凜子。あなた海に境界線なんてある訳が無いでしょ」

「ええ、双葉さん。でもどこら辺かは判らないんですか？」

「はあ、野神君に任せた」

「あの、辺かなあ……………」

曖昧に指を差してみた。

「うっ……………酷いよ」

一ノ瀬さんはとりあえず放置して双葉さんを見ると顔が少し引き攣っている。

双葉さんの視線の先には藤堂に寄り添う御手洗さんの姿があった。

「もう、放置しましょう」

「はい」

小声で話して車に向かい、車に乗り込んで2人を呼んだ。

「おーい、置いていくぞ！」

藤堂と御手洗さんが慌てて走り出した。

新城海岸に行き皆でシュノーケルをして珊瑚や綺麗な魚を見て西に向う、西平安南崎には風力発電の為に白い大きな風車が3基立っている。

風車を横目に見ながら池野大橋を渡り池野島に渡る。

「あっちの大きな島は何？」

「あれは伊良辺島です、あの島の向こうにもう一つ島があってそこ

にも空港があつてジェットパイロットの養成をしているんです。時々ジャンボジェット機がタッチ&ゴーをしているのが見られますよ」「へえ、のっちは詳しいんだ」

「伊達に毎年来ている訳じゃないんですよ」

「それにネットオタクだしね」

「そう言うことにしておきましょう」

池野島はあまり来た事もないし観光する所も思いつかなかったのので一周して島を後にする。

「ええ、もう終わりなの？ 野神君」

「あはは、すいません双葉さん。ここにはあまり来た事が無いし観光するスポットが思いつかないんです」

来た道を戻り市街に向けて車を走らせ途中から標識を見ながら次の場所に車を走らせた。

「着きましたよ」

駐車場に車を止めると、皆が車から降りて伸びをしていた。

「今度は何なの？」

「宮南島で一番有名なビーチです」

駐車場を出て左に進むとそこは少し高台になっていた。

「うっひょー、真っ白い砂のスキー場みたいだ」

御手洗さんがいの一番に駆け下りる。

それを見て藤堂が慌てて追いかけた。

「藤堂君も尻にしかれそうね」

「それが一番いいかもしれませんよ」

「あなた達はどうかなの？」

「お互いに寄り添う感じですかね。行きますよ、双葉さん」

一ノ瀬さんと双葉さんの手を取って駆け下りる。2人は必死になつて着いて来た。

坂を降りきるとそんなに広くないビーチだが目を引く景色だった。「ああ、この洞窟みたいのポスターで見たことがある」

御手洗さんが指差したのは隆起珊瑚に出来た洞穴だった、そしてその先にはエメラルドグリーンの海が広がっている。

「綺麗だね、瑞貴君」

「そうだね、だいぶ日が傾いてきているけどね」

「砂がサラサラだ」

「珊瑚の欠片で出来ているからね」

日はだいぶ傾いているが東京からはるか南西にある島の日の入りは7時過ぎだった。

「さあ、お土産でも買いに行きますか？」

「うん、そうだね。瑞貴君は誰にお土産を買うの？」

「総務にいる同期の宮里くらいかな」

「それだけなの？」

「そうですね、親父と名乗る人とは絶縁状態だしね」

一ノ瀬さんが俺の手を強く握り締めた。

「うつひや……これを登るんだ……」

「はい、御手洗さんは楽しそうに駆け下りていたじゃないですか」

「でも、砂の坂は登りにくいでしょ。それにこれじゃ砂の山だし」

「だから砂山ビーチって言う名前なんだと思いますよ」

「はあ、仕方が無いか」

確かに御手洗さんの言うとおり砂の山は登りづらかった。

駐車場に着く頃には皆無言になっていた。

市街に行きお土産などを買った物して来美島に戻る。

屋敷に戻るとすっかり夕食の準備が出来ていた。

「瑞貴い、難儀だけど片付けね」

「判ったばーよ、寿美子ネエ、ありがとうね」

入り口で寿美子ネエとすれ違った。

「うふふ、瑞貴君。すっかり島の子みたい」

「やらびい？」

「やらびいって言うんだ」

「うん」

食事を済ませいつもの様に一ノ瀬さんに手伝ってもらって片づけを終わらしても皆疲れたのか風呂にも入ろうとしなかった。

「ずーと、ここで暮らしたいなあ。クーラーは要らないし」

「誰かさんがげんなりした顔をしているけど、花」

「仕方が無いか、来年は山だな、温泉付きの貸し別荘とか」

「うふふ、花も言うようになったわね」

「だって私が言わないと何も言わないんだもん」

縁側で皆と涼んでいる。

庭は暗闇に包まれ、虫の声とそよ風が渡る音だけがしている。

「明日は沖縄本島だね」

「まだ、3日もあるのか波乱万丈なんだろうな。奇奇怪怪・空前絶後・戦々恐々……」

「終わり良ければ全て良しだよ。私は後輩君と一緒に居られるだけで楽しいからね」

「そうありたいなあ」

視線を真つ暗な庭に投げると御手洗さんが小さな声で話しかけてきた。

「のっち。あのさあ、お願いがあるんだけど」

「御手洗さんのお願いは何だか怖いな」

「もう。あのね、夜は涼しいでしょ。だから、あの星を……」

「はいはい、藤堂とビーチでまつたりしっぽり降る様な星空を眺めたいと」

「そ、そこまではつきり言っただけでしょ、まあ……」

尻すばみになって虫の声に掻き消されてしまった。

幸いな事にまだ誰も風呂に入っていない。それに明日はもう本島で星など見られないだろうと思った。

一ノ瀬さんの顔を見ると既に乙女チックな顔になっていた。

思いつきり足を振り上げて立ち上がる。

「さて、お立会い。私、ケット・シーが抱腹絶倒の、もとい。百花

繚乱の星の花園にご案内いたしましょう」

「胡散臭い」

「藤堂！ ウダウダ言わずに来れば良いんだよ。あつと驚くなよ」

「それじゃ、参りましょうか。ただし条件が私の指示には絶対に従ってもらいます。Are you ready？」

「「「Yah!!」」」

「それじゃ、皆様。お手をどうぞ」

俺・一ノ瀬さん・双葉さん・御手洗さん・藤堂の順番で手を繋ぐ。

「行きますよ。ルールその1・良いというまで顔を上げない」

手を繋いで真っ暗な夜道を歩いていく。俺の手にあるペンライトだけを頼りにビーチに出る。

そして砂浜の上を歩きしばらく進む。

「後ろの2人はそこでストップ」

数歩進んで声をかける。

「止まって、ルールその2・目を瞑って横になる」

「面倒臭い」

「藤堂、ブラックキャットになるぞ」

「す、すまん」

皆が横になるのを確認する。

双葉さんは一ノ瀬さんの直ぐ横に居た。

「それじゃ、目をゆっくり開けて」

俺の言葉で皆が息を呑んだ。

「ふうわあ〜」

「す、凄い……」

「あ、あり得ない……」

「……………」

「藤堂、感想は？」

「あ、ああ……」

「あ、言っただな」

「馬鹿！」

そんな御手洗さんの突っ込みが聞こえてきた。

「おいで」

小声でそう言うとな、瀬さんが体をずらして俺の肩に頭を乗せた。潮風に運ばれて甘い匂いが鼻をくすぐる。

「こんな星空、生まれて始めてみた。あれが天の川だよな」

「そう、ミルキィー・ウェイ」

「他の星座は？」

ペンライトで大まかな星を指しながら囁く。

「鷲座のアルタイル、琴座のベガ、白鳥座のデネブ。これが夏の大三角形、そしてカシオペア、北極星の小熊座・北斗七星の大熊座・ヘラクレス・乙女座・天秤・蠍・いて座・山羊座・水瓶にペガサス。こんな所かな、星が多すぎて星座にならないかもしれない」

「本当に言葉に出来ないね」

「言葉なんて要らないんだよ。こうして何もしない時間って一番の贅沢で何にも変えがたいんだよね」

耳を済ませると波の揺らぎの音と風の音しかしない。

肩には愛しい人の温もりこの幸せが続きますようにと星に願った。

8 - 1 . 誰が食べるんだ

沖縄本島・那覇の初日は移動日になった。

移動と言っても飛行機で一時間足らずだった、空港でレンタカーを受け取りそのままホテルに直行してその日は自由行動になった。

那覇2日目は知らない間にドライブに決定されていた……

「運転は？」

皆に指を指された。

「指を差すな！ で何で？」

皆が肩をすくめて両手をひじから挙げた。

「アメリカ人か！ 俺の行きたい所に行きますからね」

皆がサムズアップした。

「……………」

撃沈……

早めに朝食を済ませたにもかかわらずウダウダしていると昼前になつていた。

「のつちがグダグダだから」

「うはあ、俺の責任なんだ」

「そう言う訳じゃないわよ。ただ時間は有意義にネ」

「双葉さんまで……」

そつと一ノ瀬さんを見ると胸の前で小さく両手を合わせていた。

うう……可愛過ぎて何も言えない。

沖縄自動車道を北に向けてひた走る。

1時間ほどでインターを降りて町に入ると実弾射撃演習が行われる米軍の大きな施設が見えてきた。

近くの有料駐車場に車を止めて歩き出した。

「な、なんだかディーブな町だなあ」

「御手洗さん、米軍の大きな施設や基地がある町はどこもこんな感じですよ」

「瑞貴君、兵隊さんがいて何だか怖いよ」

「凜子さん、大丈夫ですよ。藤堂が居ますから」

名前を出されても我関せず歩いている、それとも暑くて頭が沸いているのか……

「何で野神君はそこで『俺が守る』って言わないの？」

「だって怖いじゃないですか。藤堂はあれでも羊の皮を被った狼ですから」

「あなたも変らないでしょ」

「双葉さん、俺は猫の皮を被った猫ですから」

「リンクス（大山猫）のクセに」

ここが日本だとは思えない裏通りを歩く、アメリカでも日本でもないカオスの町。

沖縄風に言えばチャンプルー（混ぜこぜ）な町。

夜は歩きたくない様な歓楽街の奥にその店はあった。

「へえ、店内もチープだな、赤いビロードの椅子って……」

「とりあえず座っていてくださいね。注文してきますから」

カウンターに行き、タコライスチーズやサイ3つとチキンバラバラ1つを注文して席に戻る。

「のっち、何で3つなの？」

「百聞は一見にしかずです。御手洗さん」

無愛想な姉ネエと呼ばれて取りに行き、水やスプーンケチャップにサルサソースをテーブルに置いてからタコライスを真ん中に3つ置いた。

「キンタコ元祖タコライスになります」

「……………」

「……………」

「……………」

「野神、誰が食べるんだ？」

秘書課の3名は口をあぐりと開けて声も出ないようだった。

大盛りのご飯の上に溢れんばかりのタコスミート・チーズ・レタスの千切りが……

「1つは藤堂、1つは俺、1つは3人で」

何も言わずに3人が頷いている。サルサソースをドバドバ掛けて食べ始める。

3人は少しずつケチャップやサルサソースを掛けながらタコライス
の山を切り崩し始めた。

「！」

「！」

「！」

「う、美味しいな」

何も言わずに黙々と食べる、サルサソースの辛さで水を飲むと汗が噴出す。

お構いなしにスプーンを口に運ぶ。

俺と藤堂が半分くらい食べたところでチキンバラバラが揚げ上がった。
てきた。

「皮がパリパリ」

「中はジューシーです」

「なかなかいけるわね」

秘書課の3人があられもない姿でチキンに齧り付いている。

会社の人間が見たらなんていうのだろう。

「野神君、くだらない事を考えてないでしょうね」

「あはは、会社の皆に見せたいなあなんて考えてないですよ」

ゴン！ ゴン！ ゴン！ と鈍い音が3回して脛に激痛が走った。

「すいませんでした。許してください……」

「馬鹿が」

「お前は良いよな、何も喋らなくて良いんだから」

「喋る必要が無い」

「一応、メインキャラクターなんだから登場くらいしろ」

「藤堂一弥です」

「……アホ」

車に乗り南に下り石川から西海岸にでて残波岬に向う。

タコライスとチキンバラバラで腹が満たされ誰も喋らない。

ラジオから流れてくるFM沖縄が独特の雰囲気醸し出していた。

駐車場に車を止めても誰も動こうとしなかった。

「あの、俺に喧嘩売ってます？ 倍返しにしますけど」

「さあ、着いたみたいだから降りましょう。野神君、案内よろしくね」

「双葉さん？ 白々しくねえ？」

「瑞貴君、黒いのが出てる黒いのが。ほら藤堂君も花ちゃんも降りた、降りた」

灯台まで歩いていく、ゆっくりゆっくりって牛か？ それとも……

一ノ瀬さんに小突かれた。

「止めようね、変な事を考えるのは」

「凜子さん、何気に黒いです」

「にこっ」

うつ、はあゝ怖……可愛らしい顔の下には何がかくれているんだろう。

「凄い、断崖絶壁だ」

「本当だ、何だか怖いなあ」

「でも、風が気持ち良いわね」

3人のワンピースが風に揺れる。一ノ瀬さんは相変わらずのガリィで、御手洗さんは小さな花柄のワンピース、双葉さんはシックな落ち着いた大人のワンピース姿だった。

「綺麗だけど、何だか宮南島と比べてしまうと見劣りするわね」

「双葉さん、あそこは離島の離島ですからね」

「やっぱり沖縄は良いなあ。のどかで」

「そうですね、御手洗さん。でも忘れちゃいけないのが沖縄は太平洋戦争で唯一地上戦になった場所ですからね」

「瑞貴君、どの位の人が亡くなったの？」

「民間人だけで約10万人……そして米軍が目指していたのがこの残波岬で、上陸したのは直ぐ南にある浜からです」

「確か、鉄の暴風雨よね」

「双葉さん、それなんですか？」

「砲弾が雨の様に降りそいだんです、御手洗さん。地形が変わってしまっくらい」

皆の言葉数が少なくなってしまった。

「まあ、歴史の勉強はこのくらいにしましょう。これから北谷に向いますけど途中で沖縄が抱えている基地の大きさを知る事が出来ますから」

8 - 2 ・ カデナ

車に戻り南に下って嘉手納^{かてな}に近づく^{かてな}と軍用車やYナンバーの車が増えてきた。

「うわ、あれが基地なの？」

「そうです、あれが沖縄で最大の基地・カデナです」

「野神君に一つだけ聞いて良いかしら。こんな事を聞くのは酷なんだけれど、あなたは米軍をどう思っているの？」

「嫌な質問ですね。基本係わりたく無いですよ、でも知り合いも居ますしね。トラブルだけはごめんですね」

そんな事を話している矢先に道路の遥か前方で観光客らしき日本人カッブルと米軍関係者がレンタカーとYナンバーの車を道路脇に止めて揉めているのが見えた。

「野神、止めろ」

「あのなあ、藤堂。俺はどうなってもしらねえぞ」

「良いから止めろ。放って置けないだろ」

「放っておけ、警察に任せろ」

「止めろって言っているんだ！」

藤堂が後ろから俺の肩を掴んだ。

「好きにしろ！」

声を荒げて車を止めると藤堂が車を降りてトラブっている所に乗り込んでいった。

俺はハンドルに突っ伏していた。

「野神君」

「のっち」

「……………」

双葉さんと御手洗さんが良いたい事は良く判るが俺は躊躇った。

「瑞貴君、私の事は気にしないで良いから。ね」

一ノ瀬さんの瞳からぼろぼろと涙がこぼれた。

「ごめん、また泣かせちゃったね。俺が何とかするからね。たとえば何があっても俺を信じてくれる？ 必ず守るから」

「うん」

人差し指で優しく涙を拭う。

「後ろの席に移って待っていてね」

運転席のドアを開けて外に出て助手席のドアを開け一ノ瀬さんの手を引っ張る。

一ノ瀬さんを後部座席に座らせて深呼吸をして歩き出した。

「大丈夫かなあ、双葉さん」

「厄介な事になったのは間違いないわね。『Yナンバー』の車には気をつける』なんて言葉があるくらいだから。藤堂君が先走って問題を起こさなければ良いけど」

「でもあいつは沈着冷静だから」

「そうかしら、熱い男よ。藤堂君は」

「それじゃ、のっちは？」

「底が知れないわね。2人を信じましょう」

俺が現場に近づくのと藤堂は米軍関係者とヒートアップしていて、観光客のカップルはただ怯えているだけだった。

仕方なく米軍は藤堂に任せて俺は怯え切っている観光客のカップルに声をかけた。

「大丈夫ですか？」

「……………はい」

大丈夫じゃない様だ、とりあえず少し離れさせて話を聞いた。

ただの接触事故のようだが如何せん言葉が通じないので意志疎通が出来なかったらしい。

「それじゃ、急いでレンタカー会社と警察に連絡を入れて。ここは

『カネク』と言えば判るはずです」

「あ、ありがとうございます」

男性が震える手で電話をし始めた。藤堂を見るとまだ揉めている。

額に手を当てて溜息をついて顔を上げると、軍用車が3台通り過ぎて俺達の車を挟むように止まって米兵が数人降りてこちらに向ってきた。

「最悪だ」

藤堂の肩を掴むと払い除けられた。

かなり熱くなっている、殆ど喧嘩腰の怒鳴りあいだった。

「いい加減にしろ！」

藤堂の首根っこを掴んで引き寄せ足を払うと、藤堂が尻餅を着いて俺を睨みつけ向ってこようとした。

「彼女達に何かあったらどうするんだ！」

胸倉を掴んで押し倒すと流石に気づいたのだろう目を逸らして俯いた。

「車に戻れ！ 馬鹿が！ 少し頭を冷やせ！」

俺が怒鳴り飛ばすと藤堂は苦々しい顔をして立ち上がり渋々車に向って歩き出した。

振り返り米軍関係者らしき男2人に向うと、首を大きく横に振ってNOのジェスチャーをしている。

目を大きく見開いているのを見ると、俺と藤堂のやり取りに驚いているようだった。

「キッド？」

不意に声を掛けられてこちらに向い先頭を歩いてくる黒人の米兵を見る。

「マイク？」

「イヤァー、キッド！」

俺が懐かしい名前を口にすると身の丈が2メートルはある大男が抱きついてきた。

「は、離せよ。マイク、苦しいって」

「久しぶり、キッド。何をしているんだこんな所で」

「トラブルだ。巻き込まれた」

昔から頭の切れるマイクは状況を見ただけで粗方の事を理解したよ

うだった。

「OK！」

そう言つて米軍関係者と話を始めた。

「マイク、警察とレンタカー会社には連絡したから」

「OK、それじゃ行こうか、キッド」

「はあ？ おい待てよ。マイク！」

殆ど小脇に抱えられるようにして軍用車に押し込まれた。

「マイク、連れがいるんだ。丁重に扱えよ」

「ノープロBLEM」

瑞貴君が出て行つてしばらくすると3台の米軍の車が私達の車を挟むようにして止まり。

兵隊さんが数人降りてきて瑞貴君達の方に歩いていった。

先頭を歩いている黒人の人もそうだけど皆体が大きく屈強そうだった。

「どうしよう、双葉さん」

「凜子、落ち着きなさい。今は野神君を信じるしかないわね」

「はい」

でも心配で堪らなかった。あんなに嫌がっていたのに私達の為にトラブルに巻き込まれに行つてしまったのだから。

少しすると藤堂君が戻つてきて後部座席を覗いて助手席に座り込んだ。

「藤堂君、どうなったの」

「さあ」

「さあつて」

状況が全く判らずに後ろを振り向いて見ても、大きな軍人さんに囲まれてしまつていて何も見えなかった。

しばらくすると軍人さんが私達の横を通り過ぎるのが見えた。

「瑞貴君……」

瑞貴君が一番偉そうな黒人の軍人さんに連れられて前の車に押し込

まれている。

我慢できずにドアに手を掛けた。

「凜子、落ち着いて」

「で、でも……」

すると運転席に白人の軍人さんが乗り込んで来てエンジンを掛けた。心配になりもう一度藤堂君に聞いてみる。

「藤堂君、何があったの？ 何で野神君が？」

「判らない」

「一弥！ 判らないじゃないでしょ。あんたが止まれなんていうから」

御手洗さんが後ろの席から体を乗り出して藤堂君に喰ってかかった。

「Be quiet」

軍人さんが静かにそう言つて車を出した。

マイクに軍用車に乗せられて後ろを確認すると俺達の車で何か揉めているのが見えたけど、軍人に何かを言われて直ぐに納まったようだった。

とりあえず、なるようにしかないのでマイクの思う通りにさせた。

車はしばらく走りゲートから基地内に入つていった。

「マイク、こんな所に連れてきて何をするつもりだ？」

「キッド、飯は食ったか？」

「あのなあ、俺達は観光で来ているんだ」

「久しぶりに会ったのにか？」

「判ったよ。食事は済んでるよ」

車が止まりやつと降りることが出来た。

直ぐに一ノ瀬さん達の所に向う。

「野神君、何があったの？ まさか」

「なんも、言つたじゃないですか知り合いが居るって」

「それじゃ」

「大丈夫ですよ、問題はありません。ただここは日本であって日本じゃない所ですから」

「良かった……」

「うう、怖かったよ!」

一ノ瀬さんが半べそで抱きついてきた。

「大丈夫だったでしょ」

「うん」

「藤堂も時化した面をしてるんじゃないよ。御手洗さんが可哀相だろうが、馬鹿が」

「すまん」

藤堂が柄にもなくしょぼくれている。

「謝るくらいなら最初からあんなに熱くなるな。クールでいろ、お前らしくない。一つ貸しだからな」

「ああ」

藤堂の腹を軽く小突くと小さく返事をして、照れた様に頭を掻いていた。

「キッド!」

マイクが来いと手で合図をしている。

「しょうがねえな」

「瑞貴君……」

「あいつは俺より年上だけど弟子だから爺ちゃんの」

「古武道の?」

「そう、心配ないよ。何があっても凜子さんは俺が守るからね」

マイクに連れられて広大な敷地の中にあるレストランに連れて行かれる。

中に入るとそこはまさしくアメリカンだった。

はつきり言えばむさ苦しい体の大きな男達がガツガツと食事をしていた。

俺達が入ると声上がる。

「目立ち過ぎだな。秘書課の3人は外人さんにも大人気と」

「いけない事をメモらないの」

双葉さんに小突かれた。テーブルにすわり適当に飲み物だけを注文するがどれもアメリカサイズだった。

「はあ……なあ、マイクお前らあんなもん毎日食べてるのか？」

「キッドも沢山食べて大きくなれよ」

「なるか！」

ここでもこんな役柄だった。それでもマイクのお陰で場が和んできた。

食事を済ませてマイクのワゴン車に乗り換えて基地内を見学させてもらえる事になった。

「凄い、広い」

「軍事施設と住居スペースに分けられていて幼稚園、小学校、それに大学の機能も備わっている所だからね」

「ねえ、のっち。さっきのレストランの女の子って日本人が多かったけど」

「かなりの難関らしいよ。基地内で働けるのはエリートさんなんだよ」

「御手洗さんなら通るんじゃない」

「いや、遠慮しておくわ」

一ノ瀬さんは俺の腕にしがみ付いて不安そうな顔をしている。

判らなくもないか、俺があんな事を感情に任せて言ったんだから。

「大丈夫？」

「うん、瑞貴君がいるから平気」

全然、平気そうに見えず不安感満載なんですけど……

住居スペースは綺麗に整備されていて住宅の周りには青々とした芝が眩しく見えた。

「本当にここはアメリカなのね」

「そうですね」

その後で戦闘機が展示されている所や格納庫なども見せてくれた。
そして基地内の史跡周りをする。
ゼロ戦の格納庫などが当時のまま保存されていて旧日本陸軍航空隊
の飛行場だった事がわかる場所だった。

「キッド、頼みがある」

「なんだ、マイク」

「手合わせを願いたい」

「ああ、もう……好きにしろ。少しだけだぞ」

マイクは大喜びして体育館みたいな武道場に案内された。

床は畳ではなく少し固めのマットが敷き詰められている。恐らく格
闘術の鍛錬をする場所なのだろう。

「野神君、何をするの？」

「少しだけ時間を下さい。マイクと手合わせをします。一応、兄弟
子なんで」

「大丈夫なの？」

「同門ですからね、心配ないですよ」

少し、体を動かして温める。一ノ瀬さん達は少し離れたところで見
ている。すると、マイクが呼ばれた。

「ジョーンズ少佐、マクラーレン中佐がお呼びです」

「判った」

あの泣き虫マイクが少佐？ 思わず吹き出しそうになるとマイクが
サムズダウンしていた。

しばらくしてもマイクは戻って来なかったが、マイクの代わりに柄
の悪そうな連中が5人ほど武道場に入ってきた。

明らかに軍の人間だ。体格が良く俺たちより遥かにでかい。

そして顔には日本人が嫌いを書いてあり、その中のリーダー格の少
し小柄な男はどことなくあの友長を髣髴とさせる虫唾の走るような
奴だった。

「うひょー！ ヤマトナデシコ」

「ビューティフル ガール」

そんな事を口々に言っている。

「俺達はジョーンズ少佐の友人としてここにいるんだ。構わないでくれ」

「ジョーンズなんて僕のパパにかかれば一捻りだよ。はあん」

「皆、とりあえず出よう」

俺が藤堂達に声を掛けると入り口に鍵を掛けられてしまった。

「どけ、邪魔だ」

「逃げるのか、ニップは腰抜けだな」

「俺達は観光でこの島に来たんだ。お前達に用はない」

「はん。こつらは特殊部隊だ。ちよつと遊んで行けよ、まあ、ここで部外者のニップが居なくなつたつて誰も不思議に思わないさ」

「この時代にまだ、そんな事を言うか」

「何も判つちやねえなあ」

友長もどきがそう言うと言の目に前に居た男が口角を上げニヤつくといきなり何かで殴りかかってきた。

一ノ瀬さんの悲鳴と共に鉄パイプでコンクリートを殴りつけた様な音が武道場に響き渡る。

俺は吹き飛ばされて壁にぶつかり壁に掛けてあつたと木刀などが体の上に落ちてきた。

そして俺を殴り飛ばした男の手には特殊警棒が握り締められていた。

「おい、おい、いきなり殺しちやつたのか？」

「NO！ ニック、手ごたえが無い……」

「さあ、楽しませてもらおうか」

友長似のニックと大男4人が藤堂達を取り囲んだ。

藤堂も素手で敵う相手ではなく秘書課の3人の盾になるしか出来ない。

泣き続ける一ノ瀬さんが腕を掴まれ悲鳴を上げた。

「イヤアー み、瑞貴！」

その瞬間、一ノ瀬さんの腕を掴んだ大男の体が崩れ落ち方膝をつく

と近くに木刀が転がった。

「な、なんだ？」

「特殊部隊が特殊警棒だ、笑えネエ冗談だな。お陰でチタン製の腕時計が壊れたじゃねえか！」

立ち上がり左手の時計を床に叩き付けるとニツクと呼ばれている友長似の男が驚いている。

「そ、そんな馬鹿な」

「何だ？ ゴーストでもいるのか？」

「の、野神君？」

「のっち？」

「み、瑞貴君」

「悪い、遅れた。耳がキンキンする、ちょっと意識が飛んだ」

男達が動揺した空きに藤堂が木刀を拾い上げる。

俺が声を掛けようとすると一ノ瀬さんが飛び出してきてしまった。

「凜子さん！ 動かないで」

俺の叫び声もむなく男に捕まり首に腕を回され押さえ込まれてしまった。

「クソ、最近の米軍は人質も取るんだな」

「勝てば良いんだよ、どんな手を使ってもな」

「そうかどんな手を使っても勝てば良いんだな。それが今時の正義か。藤堂、手加減はいらねえ。剣を持ったお前は無敵だ。ただ、殺すなよ。殺しさえしなければ俺がケツを拭いてやる」

「何をゴチャゴチャ言ってやがるんだ？ この状況で」

「売られた喧嘩は全てお買い上げの倍返しなんだよ！」

俺の声と共に藤堂が双葉さんと御手洗さんを背にして木刀を構えた。普段の藤堂からは考えられない殺気があがる、さすが軍人とも言うべきか直ぐに間合いを開けた。

そして俺はすかさず一ノ瀬さんを押さえ込んでいる男に向かい全力疾走をする。

「野神君！ 駄目！」

双葉さんの制止の声を振り切り。

男の目の前でフェイントを入れ。

男の左側に飛び込み右足を軸にバックターンですり抜ける。

そして男の真後ろに左足を着き勢いに任せて体を捻り込む。

遠心力を乗せて手刀を男の脇に叩き込んだ。

鈍い音がして手刀が男の体にめり込み男の体が揺らぎ、一ノ瀬さんを堪らず放す。

右手を引き抜き、後ろ回し蹴りで男の頭に踵を撃ちつける。

男の体が倒れこむ所に体をもう1回転させ、わき腹に止めの膝を叩き込んだ。

声を上げる間もなく男は動かなくなった。

「大丈夫？ 怖かったね」

「う、うん」

「もう少しだけ我慢してくれる」

「うん」

俺が声を掛けると一ノ瀬さんが唇をかみ締めて小さく頷いてくれた。
一ノ瀬さんを背にしてニック達に向う。

「さあ、次はどいつだ」

「お、お前は何者だ……」

「ニックとか言ったな。俺は野神瑞貴。野神流古武道宗家・野神宗司の孫だ」

「ミスター鬼神の孫……こんなチビが」

「島唐辛子はなあ、小粒でも激辛なんだよ！」

2人目の男がボクシングの構えで向ってきた。

当たれば一溜まりもない様なヘビー級のストローレートがぶっ飛んでくる。

それを右手で払い受け流す。

同時に上段の横蹴りを顔面に向けて突き出す。

突っ込んできた勢いと蹴りの勢いで男が白目を剥いてその場に崩れ落ちた。

藤堂を見ると梃子摺っているようだった。

「藤堂、ちんたらしてんじゃねえよ」

「ふざけるな、加減が……」

「真面目だな、頭以外なら大丈夫だ。花さんに良い所見せてやれ。気を抜いたらやられるぞ」

「そうは言ってもな」

「ああ、面倒ちい。セイい！」

雄叫びを上げて藤堂に対峙する2人の内の一人に向かい駆け出す。男が振り向いた瞬間に俺の膝が男の顔面に炸裂する。

同時に藤堂が風の様に男の横をすり抜け炸裂音が重なるように聞こえる。

「うひよ、痛そう。鎖骨粉碎で肩が亜脱臼。肋骨も5番6番辺りが粉々だ」

藤堂が倒した男を指で突付きながら俺がおちゃらけた。

「野神が……」

「まあ、うちの姫君達に怪我が無いんなら問題ないか」

「馬鹿！ 問題あるでしょ。野神君は」

双葉さんに左腕を掴まれた。

「腕が……？」

「なんも、子どもの頃から鉄パイプの様な爺の蹴りを受けているんですよ」

フルフルと手首を回すと、双葉さんも御手洗さんもそして一ノ瀬さんも呆れた顔をしていた。

「あれだけ自分から横に吹き飛ばばなんて事無いよな。のっち」

「のっち言っな、藤堂。それに時計が粉々になっただろ、安くないんだぞ」

「で、あれはどうするんだ？」

藤堂が指差す。そこには腰を抜かして放心状態のニツクの姿があった。

「一応、×ておくか」

俺が横蹴りを入れようとしたところで武道場のドアが開いてマイクが血相を変えて飛び込んできた。

「マイク、遅いぞ」

「き、キッド。これは」

マイクの話ではニックとその取り巻きは基地でも問題視されていたがニックが上層部の身内という事もあり黙認されてきたらしい。

そしてマイクが呼び出された後でマイクの部下が武道場に入っていくニックを見かけて慌てて呼びに来たという事だった。

「で、マイク。なんで俺達が護送されなきゃいけないんだ？」

「ソーリー。一応、あいつらは特殊部隊なんだ。その連中が一般の日本人に潰された。事情説明だけでも」

「あのな、喧嘩を売ったのはあいつらだぞ」

「全員、病院送りにした」

「それで、俺達はフォスター送りかよ」

俺達は全員、軍の車に乗せられて半護送されている。

ご丁寧に俺達のレンタカーまで運んでいた。

「野神君。私達はどうなるの？」

「双葉さん。なんも、心配ないですよ。俺が全力で何とかします」

「なんだか頼りないなあ。喧嘩は強いのが判ったけど」

「それって、俺がスポーツ馬鹿って事ですか？ 御手洗さん」

「だって、のっちは営業成績いつも中の下じゃんか。交渉が上手いとは、ねえ」

「良いんです、瑞貴君は。これで成績が良かったらモテモテになっちゃうから」

「何だか酷い言われ様な気がしますんですけど、一ノ瀬さんまで……一弥、慰めて」

「知らん、もう少し成績を上げろ」

うな垂れていると横でマイクが肩を揺らして笑いを堪えていた。

「笑うな、少佐！」

「イエス サー」

そんな話をしていると到着したようだ。

拘束こそされていないが周りを取り囲まれながら殺風景な会議室の様な所に案内された。

そして、事情聴取が始まるが話は平行線のままだった。

「いい加減にしてくれないか俺達はジョーンズ少佐の知り合いで正規の手続きを踏んで基地内を案内してもらって武道場で手合わせをしようとしただけだ」

「しかしねえ、もう少し何とかならなかったのかね。何もあそこまでする必要が」

「襲われそうになったんですよ。いい加減にしてください」

煮え切らない相手に双葉さんが口を挟んだ。

「はあ、我々も頭を悩ませているんですよ、お嬢さん。彼は議員の息子さんでネエ」

行き着く所はそこだった様だ。『権力』俺が一番大嫌いなものだ。

しかし、それに対抗できるのはやはり『権力』でしかないのだろう。

「なあ、おっさん。トップと話がしたい」

「な、何だね。君は非礼にも程があるだろう」

「もう面倒なんだ。トナカイのルドルフが直々に会いに来たと伝える！」

「トナカイのルドルフ……まさか」

「信じる、信じないはあんたの勝手だ。見誤るなよ」

マイク達の上官と思える男が直ぐに連絡を取り始め困惑の表情を見せ始めた。

「ドーナッツ好きのドナルドにホットラインで直に話してもいいんだぞ」

この言葉で判ってもらえたらしい。

「それじゃ、貴殿1人で」

「俺はマイク以外の軍人は信用しない」

「しかし……判りました。それでは直ぐ隣の別室をご用意しますの
で」

話は急転直下で解決した。

ニツクと取り巻き以外はお咎めなし、他言無用のおまけつきだった
が当然のことだろう。

誠心誠意謝罪をしてくれた事で皆は納得してくれた様だった。

8 - 3 ・おいで

結局の所、その日は時間がなくなってしまい予定を全てキャンセルするしかなく。

食事を済ませてホテルに戻った。

「ねえ、瑞貴君もお風呂に入ったら」

「あ、うん」

ホテルのベッドで横になっていると一ノ瀬さんが顔を覗き込んできた。

「汗臭いから、近づかないで下さいね」

「嫌だもん」

そう言いながら俺の体の上に飛び乗ってきた。

「これで、動けないでしょ」

一ノ瀬さんが俺の両手首を掴んで押さえて俺に馬乗りになってきた。

「凜子さん、大胆過ぎます」

「えへへ、ここなら良いでしょ」

「何がですか？」

「もう、女の子に言わせるかなあ」

一ノ瀬さんが顔を近づけてくる。抑えられている手首に少しだけ一

ノ瀬さんの体重がかかった。

「凜子さん、シャワーを浴びたいのだけど」

俺がそう言つと凜子さんの顔が一瞬だけ曇った。

「うん、判った」

一ノ瀬さんが体を退かし俺が起き上がってバスルームに向おうとすると左手首を掴まれた。

「な、何ですか？」

「後輩君、何か隠してない？」

「なんも」

「嘘つき、それじゃこのままこの手首を捻って良い？」

お見通しだったようだ。さすが秘書課と言つべきか。

「すいません、勘弁してください。大丈夫ですよ、手首は動きますからただの打ち身です」

「じゃ、なんで本当の事を言わないの？」

「気にするでしょ、皆。特に藤堂は気にしいですからね」

「そこで、大人しくしていなさい」

一ノ瀬さんはそう言うと言つてフロントに電話を掛け出した。

そして近くの病院を探してもらつていようだった。

その真剣な顔は普段じゃ見られない顔つきで、恐らく仕事をしている時もこんな真面目な顔をしているのだらうと思うとなんだか嬉しくなつてしまった。

「なんで笑っているの？ 私は本気で怒っているのに」

「すいません、仕事の時もこんな風になっているのかなあと思って思つたら。なんだか嬉しくなつて」

「反省する気は無いみたいね」

「すいません……」

その後、近くにある大きな病院に連れて行かれてレントゲンを撮られた。

時間外で整形外科の医者が不在と言う事もあり骨には異常が無いがきちんと専門医に見てもらふように言われホテルに戻つて来た。

「瑞貴君は、これ以上病院に行く気は無いんだよね」

「凜子さんの命令なら聞きますよ。でも自分の体は自分が一番判つているつもりですから」

「勝手にしなさい」

そう言つて一ノ瀬さんは隣のベッドにもぐりこんでしまった。

不安だった、瑞貴君は私が言えば全て受け入れてくれるだらう。

でも私はどうだらう……

私の知らない彼がとても大きく感じる。

全てを打ち明けられた時に私は受け止める事が出来るだらうかそんな

な事を考えていた。

基地から開放され、皆で食事をしていた時も瑞貴君はいつもの瑞貴君だった。

「なあ、のっち。お偉いさんと何を話していたんだ？」

「なんも、軍の上層部に伝がある知り合いがいるんで、その人に直談判するぞって」

「その人ってどんな人なの？」

「大統領の次に偉い人かなあ」

「ぶっ」

「うわあ、御手洗さん。汚い」

「大統領って、もう少しまともな事を言えないの？」

いつもと変わらずどこまでが本場でどこまでが冗談なのか良く判らない。

「野神君のお爺さんって」

「爺さんですか？ 時々あそこに呼ばれて総合格闘技の指南をしていたみたいです」

「みたいって」

「あはは、そうですね。でも俺も詳しい事は知らないんです。マイクと出会ったのも島だったし、まあ鬼の様な人でしたね。稽古の時は特に」

「そうなんだ、でも野神君は底が見えないのよね」

「双葉さん、底ですか？ 無いですよ、底なんて。器じゃなくて板切れみたいなもんですから。表面張力で乗り切らない水は駄々漏れです」

「はあ、本当にのっちは凄いんだか馬鹿なんだか」

「紙一重って良いますからね。藤堂はどうなんですか？ 御手洗さん」

「な、なんでそこに振るかなあ」

「いや、一応。ここに藤堂が居る事をアピールしておかないと」

掴み所が無い様にしているけれど、大きな闇がそこにある様な気が

する。

でもそれを知ってしまうのが怖い。
そんな事を考えて横になっていた。

少し喧嘩をして怒って1人で寝るのは良いけど寝付かれなかった。
どれ位経ったのだろう目を開けると部屋の電気は消されていた、けれど部屋の中は明るかった。

とても優しい光、青白いような透明感のある紫色のような。

不思議に思っただけで起き上がるとその光が月明かりである事に気付いた。
窓を見ると月の光が差し込んでいるその窓辺には瑞貴君が座っていて外を眺めていた。

優しい目をしている、でもどこことなく寂しそうに見える。

「どうしたの？ 眠れないの？」

優しい声を掛けてくれる。この声を聞くと年上なのを忘れて甘えたくなってしまう。

でも、不安で、不安でたまらない。

「ゴメンね」

「なんで謝るの？」

「俺が凜子さんを不安にさせているのが判るから」

「大丈夫だよ」

「でも、ゴメンね。今は話すことが出来ないけど必ず全部話すから」
瑞貴君はいつもそう、私の不安をわかってくれる。

でも私だって瑞貴君が不安なのが判る。

判るけど私には何も出来ない。

「おいで」

「うん」

私は側にいよう何があっても側に居よう、それが私に今出来る事の全てだから。

9 - 1 . て、テニス……？

営業にとって辛い夏が終わっていく。
心地よい秋風が頬をすり抜けていく。
静かな平凡な日々が続いていた。
それはいつも隣に愛しい人が居てくれる幸せ。

つて一瞬、夢見てた？

俺はここで何をして居るんだ……

「はぁ、はぁ、はぁ……勘弁してください」

「ほら、のっち。立って」

「もう無理、心臓が口か出そう」

週末の土曜日だというのに俺はテニスコートで倒れていた。

「鬼が二頭見えるんですけど」

「鬼言うな！」

御手洗さんがそう言うのとテニスの硬式ボールが唸りを上げて飛んできた。

「鬼だ……」

フラフラになりながら立ち上がる。

「はい、次！」

双葉さんがサービスをして飛んできたボールを何とか打ち返した。

俺は何をしているんだろう……

金曜日の帰り際に藤堂が話しかけてきた。

「野神はテニス出来るのか？」

「はぁ、テニス？」

「そうだ」

「うんにゃ、出来なくは無い」

「曖昧だな、明日」

「お先！」

藤堂の会話を瞬殺してブリーフケースを持つと会社を飛び出した。

「ふう〜危ない、危ない」

テニスは出来ない訳ではないが嫌な思い出がありあまりやりたくなかったのだが……

マンションに帰ってくると未だ一ノ瀬さんは帰ってきていなかった。

基本料理が出来ない俺は彼女がいないと食事に事欠く状態だった。

まあ、帰りにコンビニでも寄って弁当を買ってくれば良いのだが、何度が実践して怒られた経験があった。

「なんで、待てないの？」

「いや、毎日じゃ悪いなと思って……」

「それじゃ、私一人で食事をしると？ 電話ぐらい出来ないかなあ」

「ゴメンなさい」

「まあ、瑞貴君は私が作る料理よりコンビニ弁当の方が好きみたいだからネ！」

その後、数日はコンビニ弁当の容器に詰められた晩御飯を食べさせられた。

それもと丁寧な冷凍食品まで買って来て味付けまで再現されていた。そんな訳で、とりあえず風呂に入り自分の部屋に籠りネットを始める。

しばらくすると一ノ瀬さんが帰ってきた。

「お帰り、お疲れ様でした」

「ただいま、瑞貴君こそ」

「んにゃ、俺はぼちぼちなんで」

「ぼちぼちじゃなくてももう少し営業成績を上げた方が良いんじゃない？」

「ん〜、平々凡々が座右の銘なんで」

そんな話を話していると一ノ瀬さんが着替えを済ませて食事の準備に取り掛かった。

独り暮らしの時には食事は外食か弁当、スーツやシャツはクリーン

ングにそれ以外は全自動洗濯機に放り込むだけ。
掃除も時々するくらいだったので、俺の家事能力は皆無だった。

時々思う事がある。これで良いのか……

一ノ瀬さんに甘えばなしで……

そんな事をリビングで考えていると食事の用意が出来たらしい。

「瑞貴君、ご飯にしよう」

「はい」

今日はイタリアンだった。カポナータにベーコンが入っている Pasta にカプレーゼとイタリアンオムレツ・サラダ etc

「いただきます」

「はい、いただきます。ゴメンね、何だか時間が無くって簡単な物になっちゃって」

「んにゃ、簡単じゃないよ。凄く美味しいし」

「うふふ、ありがとう」

「でも、良いのかな？ こんなに凜子さんに甘えてて」

「そんな事ないよ。私だって甘えさせてもらってるもん。家賃も払ってないし光熱費だって、それより何よりこんな広いお家に私一人じゃ住めないもん」

「まあ、無駄にデカイからね」

「それに、大好きな人に何かをしてあげられるって幸せな事なんだよ」

そう言われて俺は考えてしまった。

俺は凜子さんに何をしてあげられるんだろうと……

凜子さんを守ると言いながら実際の所は自分が怪我をしてしまって心配ばかりかけている。

俺にしてあげられる事なんてあるのだろうか……とても不安になる。

「瑞貴君？」

「ん？ 何？ 凜子さん」

「何を考えているの？」

「……………」

「あ、またどうでも良い事考えているでしょ」

「どうでも良い事？」

「そう、たとえば私に何をしてあげられるとか」

「何でこんなに鋭いんだろうと時々思う事がある、不思議だ。」

「女の感かな」

「う、うう。あははは」

「堪らず笑ってしまった。」

「瑞貴君でも不安になる事あるんだ」

「まあ、色々だね」

「たとえば？」

「俺の事を全部話したら凜子さんが居なくなってしまうんじゃないかとか……………」

「平気だよ、瑞貴君は瑞貴君だから」

「それじゃ、俺が経済界を牛耳る大物の息子でも？」

「うん」

「それじゃ、世界有数の大企業の社長でも？」

「うん、瑞貴君は瑞貴君でしょ。何も変らないよ、そんなのただの肩書きじゃん」

「そうだね、ありがと。ただの肩書きか……………」

「ただの肩書き、そんな事を言う女の子は凜子さんが初めてだった。本当に俺自身を見ていてくれる。」

「それがただ嬉しかった。」

「あのね、私の不安は瑞貴君が時々そんな哀しそうな顔をする事だよ」

「ゴメンね」

「もう、直ぐに謝るんだから」

「そうだね」

「食事を済ませて片づけをする。」

「片づけを手伝うのが俺の唯一の家事だった。」

片づけを終わらせてリビングでまったりとする。それが金曜の夜の過ごし方だった。

「それじゃ、お疲れ様」

「うん」

俺はウイスキーをそして一ノ瀬さんは紅茶にブランデーを少し入れて飲んでいる。

「美味い！」

「何を飲んでいるの？」

「スコッチウイスキー・『ウシユクベー ストーン フラゴン』だよ」

「ウシユクベ？」

「うん、生命の水と言うゲール語でウイスキーの元になった言葉をつけたウイスキーだよ」

「ふうん、そうなんだ。お願いがあるんだけど」

「凜子さんのお願いなら何でも聞くけど」

「本当に？」

「うん」

「明日、買い物に付き合って欲しいの」

「買い物？」

「うん。テニスのウェアを見に行きたいの」

「て、テニス……？」

藤堂に言われた言葉が蘇り滅茶苦茶に嫌な予感がしたが何でも聞くと言った手前、それ以上突っ込む事が出来なかった。

「それでね、その後……」

「もしかしてテニスがしたいと」

「うん。瑞貴君はテニスできるんですよ。ラケット持っているみたいだし」

「あははは……一応」

土曜日。午前中の早い時間に買い物を済ませて、一ノ瀬さんに連れ

て行かれるままテニス場に向うと……

秘書課の双葉さんと御手洗さん、そして藤堂が手招きをして立っていた。

そして軽く手合わせをする。

「野神君の実力はこんな物じゃない筈」

「のっち、真面目にやってるの？」

そんな事を言われて双葉さんと御手洗さんに2人掛りで扱かれる羽目になったのだ。

「もう、無理。本当に勘弁してください」

隣のコートでは藤堂と一ノ瀬さんが楽しそうにラリーを続けていた。

「完全に騙された……」

9 - 2 ・ ○二スの王子様

そして昼食……クラブハウスのカフェ。

「死ぬ……」

「だらしが無い」

「藤堂は良いよな。楽しそうで」

「楽しいだろ」

「楽しくないわ!」

こうなるであろう予測はしていたものの、流石に現実となると凹んでいた。

食事を済ませてテーブルに突っ伏す。

「珈琲でも飲もうかしら」

「私はアイステイーが良いかなあ」

人を扱きまくった双葉さんと御手洗さんは俺を横目に見ながら素知らぬ顔をしていた。

「それじゃ、私はホットアップルパイのセットで紅茶が良い」

「疲れたからアイスクリームのバニラ」

「子どもか野神は」

「うるさい、それじゃウイスキーボトルで」

「あるかそんなものが」

「じゃあ、バニラアイス」

そんな馬鹿な事を言っていると注文した食後のドリンクが運ばれてきた。

一ノ瀬さんの焼きたてのアップルパイの香りが立ち込めていた。

「本当に凜子は甘い物が好きね」

「凜子さん太りますよ」

双葉さんと御手洗さんの忠告にもどこ吹く風だった。

「私、食べても太らないから」

「それは喧嘩を売っているの?」

2人の声が揃った。

「野神、アイスが溶けるぞ」

「うんにゃ、こうする」

一ノ瀬さんのホットアップルパイの横にアイスに乗せた。

「うふふ、ありがとう。美味しいよね。はい、あぐん」

「はぐ」

テーブルに突っ伏したまま口を開けると一ノ瀬さんがスプーンで口の中に運んでくれた。

「あの……見ているこっちが恥ずかしいんだけど」

「まあ、大目に見てあげましょう。今日は」

双葉さんの言葉が正解だった。せっかくの週末に何が楽しくてやりたくもないテニスなんかせにやいかんのか……

そんな事しているとこんな日に限って一番聞きたくない声が聞こえてきた。

「おや、藍花商事の秘書課の面々じゃないですか」

声の主は、住倉の営業部のエース『王子様』こと中原真治だった。

「うへえ」

思わず顔を背けた。

「おや、藍花の営業部1課の藤堂君とおまけの人」

「なんだ、おまけに負けた中原王子様じゃないですか」

爽やかな笑顔でさらっと嫌味な事を言われる。

テーブルに突っ伏したまま嫌味を言い返すと中原の顔が引き攣っているのが判った。

顔を上げると中原の後ろに住倉の秘書課の女の人が3名立っていた。

「ああ、もしかして。中原さんを三球三振にとってホームスチールを決めた人って」

「こいつですよ。営業成績は程ほど、運動神経はそこそこ。でもいざと言う時は頼りになる野神です」

藤堂が嫌な紹介をすると住倉の秘書課の3名がキャツキャツと飛び

跳ねて喜んでいる。

まずまず中原の顔が引き攣り始めた。

火に油を注いでどうする、標的にされるのは俺なんだぞ。そんな事を考えていると中原が口を開いた。

「どうですか、午後は一緒に試合でも」

「うんにゃ、嫌……」

「ええ。是非」

双葉さんの即答に椅子から崩れ落ちそうになった。

住倉の方々が食事を終えるまで待つ事になってしまった。

「なんで、○二スの王子様と試合をしなきゃならんだ？ 藤堂」

「野神、変なところを○するな」

「にやんで？」

「夕行なら良いが……」

「中原はある意味、パ行だろ」

「パ行言うな」

藤堂に頭を小突かれた。

「野神君も下ネタなんて言うんだ」

「今日はそんな気分なんです」

「そんな顔をしていると凜子に嫌われるわよ」

「凜子さんを餌に釣られたのは俺ですから」

「そんなにテニスが嫌なの？」

「はい！ ウインブルドンを目指せとか言われて散々扱われましたから。扱かれたと言うよりおもちゃ扱いですね。今日みたいに」

双葉さんが溜息をつき頬杖をついて俺の顔を冷たい視線で見ている。

「楽しくは無imiたいね、野神君は。両腕に着けているリストバンドは伊達なの？」

「まあ、しんどいですから。でも、女性には花を持たせるようにって教え込まれていますから。今日だって……」

そこで住倉の面々から声がかかった。

「お待たせしました。行きましようか」

「行つてらっしゃーい」

「野神も来るんだ」

「うにゃ」

藤堂に首根っこを掴まれて猫以下のぞんざいな扱われ方でテニスコートまで拉致られた。

テニスコートのベンチに体を投げ出して藍花VS住倉の秘書課対決を眺めていた。

「皆、上手いな」

「んん、そうだな。一ノ瀬さんも中々やるじゃん」

かなり慌てん坊でドジな面があるので運動が苦手なのかと思っっていたが結構上手くラリーを続けている。

双葉さんは優雅と言うか可憐と言うかそれでいて上手かった。

そして御手洗さんはアグレッシブなテニスだった。

しばらくすると中原が一ノ瀬さんと何かを話している。

そして一ノ瀬さんが俺の方に真っ直ぐに走り寄ってきた。

「瑞貴君、一緒にダブルスをして」

「へえ？　だぶるすう？」

「うん、中原さんに試合を申し込まれたんだけど、ダブルスなら良いですって言っちゃったの」

「うはあ、マジデスカ……」

無下に断るわけにもいかず渋々、コートに向う。

ワンセットマッチつまり6ゲーム取った方が勝ちになる。

「ってマジですか？　6ゲーム先取って……」

「うう、ゴメンね」

「いや、一ノ瀬さんが悪い訳じゃないけど」

「う、一ノ瀬さんなんだ」

「あの……睨まれているんですけど」

中原にガンガンに睨みつけられている。

さすが○二スの王子様……

主審は双葉さんがすることになった。

因みに今日も眼鏡をかけてキャップを深く被っていた。

試合が始まってしまふ。

最初の内はお互い様子見と言う感じでラリーを続けている。そしてお互いに3ゲームを取っていた。

「暑っちい、それにしんどい。午前中の扱きが効いている……」

「大丈夫？」

「なんも、なんも。別に負けたって良いからね」

「ええ、勝ちたいよ」

「はにや？ 勝ちに行くの？ あれに？ いや、今日くらいは花を持たせてあげようよ」

「もう、瑞貴君がそう言うなら良いけどさあ」

あちやあ、言っちゃった。態々、俺が苗字で呼んでいるのに……王子様を見るとピクピクと引き攣りながら聞き耳を立てている、その仮面の様な顔の下は苦虫を噛み潰しているのだろう。

「一ノ瀬さん、あれ」

「あつ……ごめん」

一ノ瀬さんに小声で王子様を見るように言つと黒いオーラに気付いた様だった。

軽く水分を取り後半戦とも言えるゲームを開始するが、完璧に王子様の照準が俺にロックオンされていた。

そしてフォアサイドに居た一ノ瀬さんの少し前にボールが落ちて、慌てた一ノ瀬さんが辛うじて掬い上げた。

ボールがヒョロヒョロと王子様の頭上に舞い上がる。

王子様がニヤリと笑って目が光った。

完全にロックオンされている。

スパーン！

硬式ボールが唸りを上げながら俺の顔面目掛けてぶっ飛んできた。後ろに弾き飛ばされて被っていたキャップが吹き飛んだ。

「瑞貴君！」

「野神！」

尻餅を着いた所に一ノ瀬さんが駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫なの？」

「はにや？ なんも。ちょっと驚いただけ」

「驚いただけって……」

「2度は同じ手は喰わないですよ」

「はあゝ 野球の時と同じだったから……あれ？ ボールは？」

王子様の顔を見上げると舌打ちが聞こえてきた。

そしてボールが王子様の頭の上に落ちた。

「信じられない……」

審判台に居る双葉さんの声だった。

「すいませんでした。ボールしか見てなかったんで」

「いえ、一応試合ですからね」

王子様が白々しく言うてきたので社交辞令を返しておいた。

「なんで、あんな事を言うの？」

「スポーツだからね」

「スポーツなら何をしても良いの？」

「うんにゃ、そんな事は無いけど怪我して無いんだから一ノ瀬さんが……」

そこで一ノ瀬さんの手が俺の口を塞いだ。

「まだ、一ノ瀬さんって言うんだ」

「ゴメン、凜子さんが気にする事じゃないから」

その時、気付くべきだった。

俺が凜子さんを守りたい様に凜子さんも俺を守りたいと思っている事に。

その後、お互いに1ゲームを取って王子様のサービス。

流石に長丁場はきつくなってきた。

ラリーを続け40―30になり王子のサーブを何とか返す。すると王子様が俺の前にドロップボレーを落とした。

「クソ！ 届け！」

走りこんでラケットを辛うじてボールの下に入れ掬い上げる。

ヒョロヒョロとボールが上がる。

そこに王子様が走りこんできてラケットを振り上げる。

駄目だ、今度は避けられない。

前傾姿勢になり頭から突っ込んだ俺は格好の標的になった。

硬式テニスのボールが王子のラケットに叩きつけられる音がする。

避けられないと思い身構えるとラケットがコートに落ちる音がした。

……カランカラン……カラン？

「痛い……」

前のめりに倒れて頭を上げるとラケットが俺の横に落ちて一ノ瀬さんが尻餅を着いていた。

「凜子さん？」

俺の前に飛び出してボールを受けようとしたらしい。

「な、なんて事をするんですか？」

「わ、私は瑞貴君のパートナーでしょ！」

「怪我は無いですか？」

「少し手首を捻っただけだから」

念の為にベンチに行きコールドスプレーを一ノ瀬さんの手首にかける。

「本当に大丈夫なの？ 凜子」

「もう、双葉さんまで。私はそんなに運動音痴じゃありません」

「凜子さん、ここは……」

「嫌だ！ 絶対に棄権なんかしない！」

「でも、これは遊びなんだからね」

一ノ瀬さんが俺の顔を真っ直ぐに睨み付けた。

「本当に凜子さんは変なところで頑固ですよ」

「御手洗さん、止めてくださいよ」

「のっち、無理ね。こうなった凜子さんは誰も止められないわよ」

「はあ、凜子さんがこんなに頑固だなんて知らなかった……」

すると藤堂が俺にシューズケースを投げつけた。

「ウダウダ言っただけで売られた喧嘩は倍返しにして来い！」

「もう、一弥。お前まで」

「これ以上、ミス侍の綺麗な顔に傷が付いたらどうするんだ」

「はあ？ 傷？」

一ノ瀬さんの頬を見ると確かに少し赤くなり擦り剥けた様になっていた。

「凜子さん、その傷は」

「ラケットがぶつかったの。瑞貴君の責任じゃないからね」

「勝てば良いんですね」

「う、うん。瑞貴君？」

俺が少し投げやりと言うと一ノ瀬さんが俺の顔を覗き込んだ。

リストバンドを外して藤堂が投げたシューズケースに入っていたシ

ューズに履き替える。

「それじゃ、やりますか」

「瑞貴君、怒っているの？」

「怒っていますよ。自分自身に、滅茶苦茶ね」

コートに戻ると王子様がホッとしたような顔をした。誰の所為だと思っているんだ？

パ行の王子様は。

ゲームカウントは5―4で負けている2ゲーム取らないと勝てない。そしてサーブは俺の順番だった。

「野神、冷静になれ」

「うんにゃ、嫌だ。こうなったらタ行の王子様になってやる」

私の後ろでトントンとボールをバウンドさせている音がする。

瑞貴君が本気になっていた。

野球で怪我をした時、それに沖縄の基地でトラブルに巻き込まれた時と同じ顔。

普段は見せない裏の顔なのかな？

時々怖くなる時があるけれど、瑞貴君が本気になる時は決まって私を守るうとする時。

嬉しいけれど、凄く心配。

無理はしないで……

「はっ！」

瑞貴君の気合の入った声が聞こえた瞬間。

レーザービームみたいに中原さんの足元にボールが突き刺さった。す、凄いサーブ……

相手コートを見ると信じられないと言う顔をしていた。

「ふ、ファイティーン ラブ」

双葉さんの驚いた様なカウントが聞こえてきた。

トントンとボールをバウンドさせる音だけが聞こえる。

「はっ！」

瑞貴君の声が聞こえる。

バウンドしたボールが今度はフォアハンドで構える中原さんの顔目掛けて飛び跳ねた。

「な、なんなんだ？」

中原さんが尻餅を着いて驚いて声を上げた。

「ツイストサーブ？」

「サーティ ラブ」

双葉さんの声に続いて瑞貴君が低い声でカウントした。

「み、瑞貴君……」

「何ですか？ 凜子さん。大丈夫ですよ、これはスポーツですよ」

瑞貴君は笑っているけど口角が上がっているだけで背中に真っ黒い物が見えた。

次のサーブは普通のサーブだった。

中原さんが難なく返すと瑞貴君が走りこんできて右足でジャンプしてバックハンドでラケットを振り抜いた。

瑞貴君が打った球は中原さんのラケットを吹き飛ばした。

「じゃ、ジャックナイフ？」

「フォーティ ラブ」

驚いている中原さんの声の後を瑞貴君の低い声のカウントが続く。

最後のサーブもレーザービームみたいなサーブだった。

最終ゲームも瑞貴君の独壇場だった。

どこにこんなパワーを秘めているんだろう。

スプリットステップにライジングショット……

殆ど私が出る幕は無かった。

「凜子さん、スマッシュ！」

「へえ？」

瑞貴君の声に我に振り返りボールを見ると私の上に舞い上がっている。

「わぁ！ へえ？」

慌ててラケットに何とかボールを当てる事しか出来なかった。

「ゲームセット ウォン バイ 野神、一ノ瀬 6ゲーム トウ5」

双葉さんのコールでワンセットマッチが終わった。

「キヤー、な、何するの？ 瑞貴君？」

「暴れない！」

「は、はい……」

相手チームとの挨拶もそこそこに私は瑞貴君にお姫様抱っこをされてベンチに座らされた。

「どうしたの？ のっち？」

「御手洗さん。どうもこうも無いです」

「何を怒っているの？」

瑞貴君が私のシューズを脱がせて靴下を剥ぎ取った。

「あ、うう……」

「……………」

「ゴメンなさい」

私がうな垂れると瑞貴君が腫れている足首にクーラーボックスに入っていた氷をタオルに包んで患部をアイシングしてくれている。

「野神君、いつ気付いたの？」

「違和感を覚えたのは、ゲームを再開して直ぐです」

「本当に凜子は。でも野神君も大概よね、最初に狙われたスマッシュをグリップエンドで返すなんて」

「あれは、まぐれです。偶然ですよ」

「本当に猫を被るのね」

「うにゃ」

「殴って良い？」

「すみません……双葉さん」

9 - 3 ・隠し事なんて

シャワーを浴びて更衣室で着替えを済ませて1階のホールで待ち合わせをする。

俺と藤堂が先になったようだ。

藤堂はスラックスに白いポロシャツと言う爽やかスポーツマンの格好をしている。

俺と言えば、ジーンズにTシャツを着てその上にグレーのカッターシャツを羽織っている。

「お待たせ」

秘書課の3人が着替えを済ませて歩いてきた。

一ノ瀬さんは少し足を引き摺っている。

双葉さんは相変わらずシックなワンピース姿で御手洗さんはスポーティーで藤堂と似たようなポロを来てタイトスカートを穿いていた。凜子さんは、ゆったりとしたワンピースに薄手のカーディガンを羽織っている。

「今日は、ここでお開きね」

「仕方が無いか。凜子さんが怪我しているんじゃない」

「そうね、今日は打ち上げ無しで」

双葉さんと御手洗さんが言い終わると一ノ瀬さんが俺の顔をみている。

それも捨てられた子犬みたいな潤んだ目で。

「あう、瑞貴君……」

「お願いですからそんな目で見ないで下さい。仕方が無いでしょ、怪我しているんだし」

「うう、私の所為で……」

「はあゝ 仕方が無い僕等の家で打ち上げしますか？」

「うん！」

一ノ瀬さんの顔が一気に明るくなった。

「一つだけ条件があります。絶対に動き回らない事いいですね。明日の仕事に差支えるでしょ、その足じゃ」

「う……うん」

きちんと前もって釘を刺しておく、そうしないと一ノ瀬さんは絶対に嬉しいがって動き回るはずだから。

仕方なくタクシーでマンションに向う。

タクシーの中でも凜子さんは何故かご機嫌だった。

30分程でマンションの前に付くと凜子さんが嬉しそうにタクシーから降りて皆の事を案内しようと足を引き摺るように歩き出した。

「はあゝ 何であれだけ言ったのに動き回ろうとするんですか？」

「だ、だって皆がお家に遊びに来てくれると思うと嬉しくてつい」

「つい、何ですか？」

「うう、瑞貴君怖いよ」

「怒っているんだから当たり前でしょ。藤堂、悪い荷物を頼む」

そう藤堂に告げて凜子さんの荷物を肩に掛けてから凜子さんを抱き上げる。

いわゆるお姫様抱っこだ。

「ひゃ、は、恥ずかしい……」

俺が凜子さんの顔を覗き込むと『ゴメン』そう呟いて俯いてしまった。

「行きますよ」

双葉さん、御手洗さんに藤堂の3人に声を掛けるとマンションを見上げてポカンと口を開けている。

「あの、行きますよ」

「ああ」

「あ、うん」

「ほえゝ」

再び声を掛けると三者三様の気の抜けた声を上げている。この大きな街では珍しくも無いマンションだと思うのだけ。

構わず凜子さんを抱き上げたまま歩き出すと慌てて3人が後を追いかけてきた。

エレベーターに乗り凜子さんに声を掛けた。

「凜子さん、両手が塞がっているのをお願いします」

「うん」

凜子さんが認証装置に暗証番号を入力して指をスキャナーに差し込むとエレベーターが動き出した。

「の、のっちって一体何者なの？」

「何を御手洗さんは言っているんですか？ ただのリーマンですよ」

「ただのリーマンがこんなマンションに住める訳が無いでしょ」

「凜子さんに聞いてないんですね。ここは友人のマンションで安く借りているんです」

「へえ、そうなんだ」

双葉さんと藤堂は落ち着いてエレベーターの表示を見ていた。

「ん？ 野神、何処まで上がるんだ？」

「一番上だよ」

エレベーターが止まってドアが開くと天窓から日が差して明るい玄関先が現れる。

独り暮らしの時には何も置いていなかったけど、今は凜子さんがポトスなどの観葉植物を置いていた。

「うわぁ、セレブな匂いがする。開けるね、あれ？」

「花ちゃん、開かないよ。鍵が掛かっているから」

「ええ！ 鍵穴なんか無いじゃん」

「うふふ、こうすると開くの」

凜子さんがドアの取っ手を掴むとカチャンと音がして鍵が開いた。

「す、凄い。どんな仕組みになってるの？」

「あのね、指が鍵の代わりなの」

「へえ、指紋認証って言うやつだ」

先に凜子さんを抱きかかえたまま部屋に入ってリビングの丸いソファに凜子さんを座らせ、足を上段に乗せて足を高くする。

「その辺で適当に寛いでください」

「う、うん。って凄い。なんなのこの眺めは」

「凄いなこれは」

藤堂と御手洗さんは2人でルーフバルコニーに出て景色を眺めている。

双葉さんは凜子さんの側に座って部屋を見渡していた。

俺がキッチンに向うと凜子さんが動こうとした。

「あの、お茶を」

「そこ、動かない」

「はう、でも」

「怒りますよ。凜子さん」

アイシングパックに氷を入れて凜子さんの捻挫している足に当てると凜子さんが自分で抑えようとするのでマジックテープが付いたバンドで軽く固定をする。

「本当に野神君は凜子の事になると過保護と言うか、まあ応急処置としては満点に近いわね。何処でそんな事を覚えたの？」

「爺ちゃんですよ。道場ではちゃんと体を温めるので怪我は少ないですけど時々無茶をして怪我をする事があるんで自然に覚えちゃったんです」

「そうなの、RICEが自然に身に付いているのね」

「RICEって何ですか？ 双葉さん」

「Rest＝安静・Ice＝アイシング・Compression＝圧迫・固定・Elevation＝拳上の頭文字を取ったものよ。この応急処置をする事で治りが早くなるの」

「凄いんですね」

「野神君がね。凜子はのっちの言う事をちゃんとと言う事を聞かないと駄目よ」

「まるで私が瑞貴君の子どもみたい……」

「足が治るまでの辛抱です。しばらくテーピングして仕事に行って帰ってきたらアイシングですからね」

「はい」

そんな話をしているのも藤堂と御手洗さんは部屋に戻ってこなかった。ルーフバルコニーを見ると……あの馬鹿は……

「藤堂！」「花！」

双葉さんと俺の声が重なると慌てて2人が戻って来た。

「藤堂、冷蔵庫からお茶を持って来て」

「ほら、花も。グズグズしない」

2人は顔を見合わせながら照れ隠しのように渋々とキッチンに向かい、冷蔵庫から適当に飲み物をリビングのテーブルに運んでグラスに注ぎだした。

「何を考えていたのかな？　結婚したらこんな所に住もうなんて考えてないよな」

「あのな、どうやったら今の給料でこんな広い所に住めるんだ？」

「頑張れ、未来の旦那さん」

「のっち、お前な」

「そうだ、藤堂。悪いけどテニス道具を奥の部屋に運んでくれないか？」

凜子さんの足にアイシングを当てながら藤堂に言っていると御手洗さんが直ぐに動き出してしまった。

「私が運んであげる」

「いや、あの御手洗さん」

ドスンと鈍い音がして御手洗さんが片手で持とうとした俺のシューズケースを床に落とした。

双葉さんと御手洗さんの視線がシューズケースから俺に向いた。

「あはは、何ですか？」

「のっち、このシューズケースの中に何が入っているの？」

「ええ、テニスシューズですよ」

「野神君、なんでテニスシューズがあんな鈍い音がするのかな？」

「さあ？　ちよっとトイレにや？」

双葉さんに襟を掴まれた。

「のっち、このシューズ。尋常じゃないくらいに重いんだけど」

「花、野神君のバッグからリストバンドを出してみなさい」

「はい」

咄嗟に手を出したが及ばずバッグは御手洗さんの手中に落ちてしまった。

「うわあ、何これ」

「花、ここに置きなさい」

双葉さんに指示され御手洗さんがテーブルにリストバンドを置くと鈍い音がする。

「さあ、野神君。理由を聞かせてもらうわよ。何故、こんなモノを着けてテニスをしていたのかしら？」

「あはは、言っただじやないですか。女性には花を持たせるようにと教え込まれているって」

「それは、私達を見くびっていると言う事なのね」

「違いますよ。皆のテニスの腕を見極めてからと思っていたんですけど」

「けど？」

「いきなり猛練習が始まったので外すに外せなくなっただけ」

「そこまで言つと双葉さんは溜息を付いて顎に手を当てた。

「そうねそうだったわね、シューズとリストバンドで何キロあるの？」

「シューズが片方1キロでリストバンドが片方で500グラムかな」

「さ、3キロもつけてあれだけの動きをしていたの？」

「御手洗さん、だからへばっていたじゃないですか」

驚いていた御手洗さんが呆れたような顔になった。

「野神君、それじゃウィンブルドンがどうのも本当の話なのね」

「僕は基本、嘘は付きませんよ。言わない事がありますけどね」

「黒いわね」

「でも、誰にしたって一つや二つ人には言えない事ってあるんじゃない？」

ないですか？ 因みにウィンブルドンを目指せって言って僕に無理矢理テニスをさせたのはイギリスにいた頃の友達の彼女です」

「ふうん、女の子に仕込んでもらったんだ。どんな感じに仕込んでもらったのかしら？」

「今日と変らないですよ。超スパルタで一つの事を出来るまで延々やらされるんです。出来るようになれば次の事を延々とやらされて出来なければ……思い出したくない」

「言いなさい。凜子が不安がるでしょ」

「言った方が不安になると思いますよ」

「まったく、どんな仕打ちを受けたのかしら。それでテニスが嫌いになったのね」

「まあ、そうですね」

「それじゃ、花。私達はキッチンを借りて打ち上げの料理でも作りましょう。野神君、勝手に使っわよ」

「どうぞ、存分に使ってください」

「何かデリバリーしましょうよ。双葉さん」

双葉さんが立ち上がると御手洗さんが慌てながらそんな事を言い始めた。

御手洗さんの顔を双葉さんが覗き込むようにしている、御手洗さんは気まずそうに言い訳をし始めた。

「あの、テニスの後で疲れているしデリで良い、かなって」

「花、あなたもしかして」

「な、何ですか？ お料理くらい出来ますよ。多少は」

「ふうん、多少なんだ」

苦笑いをしながら御手洗さんが恥ずかしそうにしていると凜子さんが動こうとした。

「私も……」

「野神君、凜子を確保！」

「はい」

すばやく凜子さんの背後に回り込んで腕を凜子さんの腰に回して立

ち上がれないようにすると観念したのか凜子さんが俺に体を預けてきた。

柔らかな感覚と鼻をくすぐる良い香りがしてくる。

「私だっってお手伝いくらい出来るのに」

「凜子？ あなた野神君と約束したわよね」

「う、うう。しました。大人しくしています」

双葉さんに言われて凜子さんはすっかり大人しくなってしまった。

本来なら家主の俺自身が動かないといけないのだが料理なんて殆ど出来ないし、俺が動けば確実に凜子さんが痛みに堪えて動き回るのが目に見えていた。

仕方なくどこ拭く風でソファに座りのんびりしている藤堂に声を掛けた。

「藤堂はそこで何をしているの？」

「はあ？ 一応招かれた方だからな」

「ふうん、双葉さんと御手洗さんが動いているのに？」

「あいな」

「俺が何も知らないとしても。まあ御手洗さんに花を持たせたいって気持ちには判るけどね」

「藤堂は料理が上手いからね」

一呼吸おいて声を上げてそう言うのと藤堂が真っ赤な顔になって俺に詰め寄ってきた。

それよりも早く双葉さんと御手洗さんが反応した。

「藤堂君？」

「一弥？」

思わず藤堂を下の名前で呼び捨てにしまった御手洗さんもキッチンで火が点いた様に真っ赤になっている。

すると、藤堂が声を荒げた。

「野神、いい加減にしろ！」

「それじゃ、いつまで黙っておくつもりなんだ？ 御手洗さんに花

を持たせているつもりか？ そう思っているのなら御手洗さんに失礼だろ、失礼と言うか侮辱している事にならないのか？」

「それは……」

「藤堂、言い訳なんてするな。ここではつきりさせてしまえば後々楽だろ、それに揉め事の種なんて早めに摘み取った方が良いんだ。隠し事なんて碌な事にならないぞ」

「野神の言う通り良い機会かもしれないなかもしれないな」

藤堂が双葉さんと御手洗さんの居るキッチンにしっかりと足取りで歩いていく、双葉さんが冷やかな視線で俺を見ているがその意味ありげな態度に思わず視線を外してしまった。

「ねえ、一弥は本当に料理が出来るの？」

「そうですね。一人暮らしが長かったので、野神が食って腹を壊さない程度の物なら」

「へえ、そうなんだ」

「それで俺は何をすればいいんですか？」

「それじゃ、キャベツを千切りにしてくれる？」

「判りました」

双葉さんに言われて藤堂がキャベツの千切りをし始める。

多分、双葉さんは藤堂の腕がどの程度の物なのか試しているのだろう。

双葉さんと御手洗さんが両サイドから藤堂の手元を見ている。

「上手いわね。かなり出来るわね、花より役に立つわ」

「うわあ、ふ、双葉さん、酷いです」

「あら、本当の事じゃない」

「か、一弥。今度から一緒に料理しながら教えてくれる？」

「俺でいいのなら」

「やった！ 一弥がいいの」

いろんな事が吹っ切れた御手洗さんが嬉しそうに飛び跳ねている。そんな姿を双葉さんは優しい眼差しで見ていた。

双葉さんと藤堂が手際よく料理をしている。それを御手洗さんが一

生懸命サポートしながら藤堂に料理を教えてもらっている様だった。

しばらくすると、リビングのテーブルの上には色々な料理が並べられていた。

「うわぁ、美味しそう」

「それじゃ、とりあえず乾杯しましょう。お疲れ様でした」

双葉さんの音頭で打ち上げが始まった。

韓国や東南アジアなんかのエスニック系の料理が多かった。

皆でワイワイと飲みながらお喋りをする。

凜子さんは色んな料理を味見しながら作り方や食材を聞いてメモをしながら楽しんでいる。

俺は少しだけお酒を控えて料理に舌鼓を打っていた。

いつもならアルコールがメインになるけど片付けぐらいはしなないと家主として面目が立たないし、凜子さんが気にすると思ったからだ。宴も酣になってきた頃に双葉さんが俺に話を振ってきた。

「ねえ、野神君？」

「何ですか？ 双葉さん」

「さっき藤堂君に言っていたわよね。隠し事なんて碌な事にならないうって」

「言いましたね。そんな事を」

「それじゃ、野神君は凜子に隠している事は無いの？」

「話していない事はありませんよ。行く行くは話すつもりですけど今は時期じゃないというか。それに誰しも話したくない事や知られたくない事はあるんじゃないですか？」

そこまで言うのと双葉さんが今度は凜子さんに話を振り始めた。

「凜子は野神君の過去を知りたいと思わないの？」

「知りたいと思わないと言えば嘘になるけど、瑞貴君は瑞貴君だし。少しずつ教えてくれるから」

「それじゃ、どこまで知っているのかしら？」

「妹さんが居た事。そして父親だと言う人の娘さん、つまり腹違いの妹が居て名前が一字違いだと言う事に……」

「に？ 高校を卒業して藍花に入社するまでは？」

「初めて出逢った時は瑞貴君が18歳でイギリスに居ただけど」

「それじゃ、何故イギリスに居たの？」

「偶々って」

「のっちは本当に何も話してないのね」

双葉さんはお酒が入って少し酔っているのか瞳が潤んで目が少し据わっている。

仕方なく海外にいた理由を話した。

「海外の大学に居たんですよ」

「はあ？ 留学していたの？」

「ええ、イギリスやアメリカの大学にです」

「どうして履歴には記載しないのかしら」

「事情があつて記載出来ないからです。双葉さんには話しましたよね、凜子さんの両親が亡くなったテロの事で。そう言う事情です」

「それじゃ、大学名も言えないの？」

「まあ、そう言う事です」

「それじゃ、お父様の事は？」

「それは話したくありません」

「あ、そう」

気がついた時には既に双葉さんと御手洗さんはアイコンタクトを取っていて行動は迅速なおかつ的確だった。

お酒が入っている事もあり戯れ半分、本気半分だったのか。

御手洗さんは戯れで双葉さんは本気だったのかもしれない。

御手洗さんに羽交い絞めにされ身動きが取れない、女の人の力なんて知れているかもしれないが2人掛りでは部が悪かった。

それに女性に怪我をさせる訳にはいかず手荒な真似も出来ず結果的に良い様にされるがままになってしまっていた。

それはテニスが嫌いになるに至った、思い出したくも無い光景がそ

こにあった。

「はあ、はあ、死ぬかと思った」

「のっちはもう少しまともな事を言えないかな」

「本当にね。経済界の大物？ 世界を股に掛ける社長？ つかみ所が無いと言うか本当に猫なのね」

不安が過ぎり凜子さんの顔を見ると真っ直ぐに俺を見つめ、その表情は……

急速に息苦しさを感じ始め手足が痺れ出す。

それは沖縄の海で双葉さんを助けた時とは比べ物にならなかった。

体が思う様にならず床に倒れこむ、心臓の鼓動が跳ね上がり胸に痛みを感じ体が痙攣し始めた。

「く、苦しい。息が」

「瑞貴君！」

凜子さんの不安そうな顔が視界に入る。

「た、助けて」

「瑞貴君、しっかりして」

「凜子、落ち着きなさい。過呼吸症候群よ。花、キッチンから紙袋を持ってきなさい。急いで」

「は、はい」

意識が飛ぶでもなく周りで起きている事は全て耳に入ってくる。

藤堂が俺の体を抑え御手洗さんが持ってきた紙袋を俺の口に押し当てた。

もの凄く長い時間に感じる。

少しずつ呼吸が落ち着いてきて時計を見ると然程時間は経っていないのが判った。

「お酒を飲んでいたとは言え無理強いをし過ぎてしまったみたいだね。ゴメンなさい」

「なんも、ですよ。少し疲れていた所為ですよ」

「本当にあなたって子は」

「あはは、猫ですから」

双葉さんの本当に申し訳なさそうな言葉にも力なく笑って答えるし
が出来なかった。

#10-1・恋人ですか

突然の野神君の過呼吸症候群の発作には私の心臓の方が止まるかと思った。

双葉さんには年上のあなたがしつかりしないでどうするのと言われってしまったけど、野神君の事になると我をわすれてしまう。

そんな事があってから野神君の過去について触れる事が怖くなり同時に私の不安も少しずつ募り始めていた。

天気予報で今年の冬は早くから寒くなるなんて言っていたけれど1月に入るとあつという間に冬日が訪れていた。瑞樹君は相変わらず優しく包み込んでくれるし変わらず私の側に居てくれる。

ただ、それが嬉しくって瑞貴君の過去なんて気にしないでいられた。それに過去に何があるうと瑞貴君は瑞貴君なのだからと。

そして会社では一大プロジェクトが立ち上がるうとしていた。

それはライバル会社である住倉との合同プロジェクトで藍花にも住倉から出向のスタッフが送り込まれ営業一課や秘書課にも住倉のスタッフが入り、キャンペーンも大々的に行なう予定でキャンペーンガールの選考なども近々行なわれる予定になっていた。

代表も今まで以上に精力的に動き回り必然として私もいつも以上に動き回っていた。

「一ノ瀬君、住倉から来ている谷野君はどんな感じなのかな」

「はい、彼は住倉の中原さんの右腕でかなりのやり手だと聞いていますが」

「そうか住倉のエースの右腕か腕前を拝見と行こうか」

車での移動中に代表は社内の事を少しでも知る為に色々と秘書である私達に色々と聞いてくる事が常であった。

住倉の谷野君は瑞貴君や藤堂君と同期で中原さんの腹心なんて言われていて、かなりのやり手で住倉の評価は高かった。

だけど、中原さんの腹心というだけあって表面上は見繕っているも

のの藍花の営業とは水が合わず特に瑞貴君とは折がすこぶる悪くしてお互い笑顔で嫌味の応酬をしていたりした。

私自身も中原さんや谷野君は要注意だと感じていたし、瑞貴君からも気をつける様に忠告されていた。

「あれは、1課の野神君じゃないか？」

「えっ」

会社近くの大きな交差点で車が止まると営業に向うのか歩道を歩いている瑞貴君の姿が目に入る。

しかし、瑞貴君の側には綺麗な女の子が纏わりついていて。

茶色いミディアムヘアに大きなサングラスを掛けてファアのついたキャメル色のムートンコートを着て白いミニスカートを穿いてコートと似た色のブーツを履いている。

大人っぽい見覚えがある様な女の子は親しげに瑞貴君の腕を掴もうとするが瑞貴君は邪険に扱い彼女の手を払い除けていた。

「一ノ瀬君、1課の課長にそれとなく本人に釘を刺すように伝えてくれないか？」

「は、はい。承知いたしました」

車が直ぐに動き出し、その後の2人の事は判らなかつたけれど代表の言葉以上に心が苦しかった。

その日は今にも泣き出しそうな雲が空を覆い、体の芯まで寒さを感じる日だった。

社内ではキャンペンガールの選考会が予定されていて従業員や関係者が忙しそうに動き回っている。

私は別件で動かなければならず営業フロアーに向っていると瑞貴君と女の子の言い争うような声が階段の踊り場から聞こえてきた。

「いい加減にしてくれ。これ以上付き纏うな」

「瑞貴は酷いよ。会いにも来てくれないで」

「金輪際、俺に係わるな。それにこんな所で関係者と会っているのが判ったら選考から確実に外されるぞ」

「それは困るけど、やっと瑞貴を見つけたのに」

その女の子は先日瑞貴君に纏わりついていていた女の子で瑞貴君の選考の言葉で誰だかはつきりと思い出した。

『御堂美希』

御堂財閥の令嬢にしてファッションブランドを立ち上げて、自らもモデルとして活躍している女の子達のファッション界の最先端を行う生粋のお嬢様だった。

瑞貴君がそんなお嬢様に呼び捨てにされて瑞貴君自身も彼女の事は知っていると言うかそれ以上の関係なのが直ぐに判った。

「瑞貴君？」

「り、凜子さん」

階段の上から声を掛けると瑞貴君が明らかに動揺していた。

「瑞貴、誰？ この人」

「美希には関係ない。早く会場に行け」

「パパに言いつけてやるから！」

御堂さんがそんな事を言いながら私を一瞥して階段を下りていく。すると瑞貴君が私の前まで階段を上がってきた。

「凜子さんに話したい事が」

「今は勤務中ですのでお話なら勤務外でお願い致します」

私は気がどうにかなりそうだった。

御堂さんは瑞貴君に対して誰が見ても判るほど親しみを感じている。そんな御堂さんを瑞貴君はあからさまに拒絶している。

2人の関係は？

堪らずに業務的に言い放って階段を駆け下りて営業フロアーに向かっってしまった。

今までも何度と無く香蓮さんや花ちゃんには瑞貴君がらみで迷惑を掛けてしまっている。

これ以上迷惑を掛ける訳にはいかない、2人だって大きなプロジェクトに向って仕事をしているのだし仕事が終わってからゆっくりと話し合えば良い事だと思っていた。

「一ノ瀬さん、顔色が悪いですが大丈夫ですか？」

「何も問題はありません。ただ今日は一段と冷えるのでそう感じるだけだと思いますよ」

「それなら言いのですが」

今は住倉商事から出向で来ている谷野君を会社側が用意したマンションに案内をしていた。

谷野君の住まいは藍花商事には通うのには遠く、プロジェクトに専念してもらいたいと言う会社側の配慮だった。

マンションは会社の近くでこの界隈の地理に詳しい私が案内するように入会に出席している代表に言いつけられていた。

しばらくすると今にも泣き出しそうな空が泣き始めてしまった。冷たい雨が2人に容赦なく降り注ぐ。

会社の近くだと言う事で傘を持たずに出たのが裏目に出てしまった。慌てて走り出すと私と瑞貴君のマンションが目に入りエントランスに駆け込んだ。

「タオルと傘を取ってくるのでここで待っていてもらえるかしら」

「えっ、ここって一ノ瀬さんのマンションなんですか？」

「はい、1人暮らしではないですけど」

「恋人ですか」

「おかしいですか？」

「いえ、出来れば体を温めたいので何か温かい物でも頂けると嬉しいのですが」

瑞貴君に対するやつかみが無かったと言えば嘘になるかもしれない、深く考えもしないで私は谷野君を部屋に案内してしまっていた。

「随分、セキュリティが強固ですね」

「この街はそれなりに栄えているし私の恋人はネット関係の仕事もしているの。一つだけ言っておくけど勝手な行動は絶対にしない事いいわね」

「それは十分心得ています」

リビングに谷野君を座らせてキッチンに向かい紅茶でも入れ様とポットを火にかける。

すると谷野君が動く気配がした。

「一ノ瀬さん、トイレをお借りしたいのですけど」

「トイレなら玄関の左手よ」

しばらくするとお湯が沸きティーポットに茶葉を入れてお湯を注ぎ蒸らす。

「広い部屋ですね」

「勝手な事は……」

私が顔を上げると谷野君が瑞貴君の仕事部屋を開けようとしていた。その部屋は恋人である私でさえ勝手に入ることは許されていない部屋だった。

慌ててキッチンを飛び出した拍子にナイフと小さなまな板が倒れ用意して置いたお気に入りのティーカップが床に落ちて砕け散ってしまふ。

そんな事など構わずに谷野君に駆け寄った。

「いい加減にしないさ」

「凄いパソコンですね」

「触らないで」

私の制止を聞いてか聞かず、谷野君がパソコンに触れてしまった。

その瞬間、部屋中の照明が落ち『Warning!』と繰り返す警報と共に赤い非常灯が点く。

慌てて谷野君とルーフバルコニーに出ようとしてサッシを開けようとするけどロックされてしまい開けられなかった。

すると今度は窓と言う窓に台風用に付いていると言うシャッターが降りて来て部屋の中は赤い非常灯だけになってしまった。

玄関に向かい開けようとしたが完全にロックされて私と谷野君は完全に閉じ込められてしまった。

「そうだ携帯で、駄目だ。圏外になっている。すいませんでした。僕の所為で」

「起きてしまった事は仕方が無いわ。野神君が来るのを待ちましょ
う」

「え、それじゃ」

「私の恋人は営業1課の野神瑞貴君よ」

#10-2・彼女を

凜子さんの誤解を解こうとしたが冷たく拒絶されてしまった。

これ以上は勤務に差し支えるので仕事が終わってから事情をきちんと打ち明けようと思っていた。

営業1課の自分のデスクに戻ると藤堂がいつもの様に声をかけてきた。

「野神、どうしたんだ？」

「んにゃ、別に」

「別にと言う顔じゃないけどな」

相変わらず藤堂には敵わなかった。

後からと言うとそれだけで藤堂は理解してくれたようだった。

仕事を再開してパソコンに向う。

大きなプロジェクトが動き出し仕事量は増えるばかりで、とりあえず目の前の仕事から手をつけていくしかなかった。

しばらくして仕事が波に乗ってきた時にあり得ない事が起きた。

デスクの上に置いた携帯がけたたましく警報を発し液晶は赤く点滅を続けている。

それは自宅マンションに誰かが侵入した知らせだった。

営業一課全員の視線が一気に俺に集まった。

「野神、何事だ？」

「藤堂。誰かがマンションに侵入した」

「そんな事があるのか？ あんなにセキュリティが万全なのに」

「間違いない。出てくる」

「待て！」

藤堂の呼び止めを無視して携帯を掴んで会社を飛び出した。

階段を一気に駆け下りて外に飛び出すと冷たい冬の雨が降り注いでいた。

物音一つしない赤い非常灯だけの部屋で座り込んでいるとまるで潜水艦で深海に閉じ込められてしまったかの様な気分になってきた。しばらくすると部屋の電気だけが点いて静かに玄関が開く音が聞こえた。

そして足音を忍ばせながら瑞貴君が革靴を履いたまま現れた。

瑞貴君の髪からは雨水が滴り落ちてスーツの肩も濡れていて強張った表情をしている。

その顔は米軍基地で襲われた時とは比べも似にならないほどの怖い顔だった。

「み、瑞貴君」

「はあゝ 凜子さんだったのか。どうして」

私の顔を見た瞬間に瑞貴君の体から力が抜けて力な微笑を浮かべた。

「すいませんでした。僕が勝手な事をしたばかりに」

「谷野か。お前はもういい、社に戻れ！」

「瑞貴君、そんな言い方は無いでしょ」

「それじゃ、どうしろと？ 今は勤務中じゃないんですか？」

それは瑞貴君が私に初めて見せた怒りの感情だった。

直ぐに力ない表情に戻ったけれど不安が止め処もなく溢れ出しそうになるのを何とか堪えていた。

谷野君は瑞貴君に強い口調で言われ会社に戻ってしまった。

すると部屋の中は圏外になっていた筈なのに瑞貴君の携帯が聞きなれない着信音を鳴り響かせた。

「Hello？」

瑞貴君が突然英語で話し始めた。

とても短い会話で内容までは聞き取れなかったけれどはっきりと瑞貴君の口は『万が一の時の覚悟は出来ている』と告げていた。

瑞貴君が携帯を切ると同時に窓のシャッターが開放していく。

「仕事に戻りましょう」

瑞貴君の平然とした言葉に堪えていた不安が堰を切ったように溢れだしてしまった。

「仕事に戻りましょうじゃないでしょ。今の電話はなんなの？」

「この部屋の持ち主、つまり僕の友達に警報を解除してもらったんです」

「それじゃ、覚悟ってなに？」

「全て仕事が終わった後に話します。今は勤務中だからと言ったのは凜子さんですよ」

「そうだけど、あの時と今じゃ状況が全く違うでしょ。このまま戻ったって仕事になるわけ無いじゃない！」

「お願いです。ほんの少しで良いですから時間をください」

「そんな言葉は信じられない！ 一体何をしようとしているの！ あなたは何者なの？ 私の知っている瑞貴君じゃない！」

「凜子さん。手を……」

「嫌だ、怖い。触らないで！」

瑞貴君が揺れる瞳で私に差し出した手を思わず振り払ってしまったて怖くなってしまった。

得体の知れない瑞貴君のなかにある大きな何かを知るのが怖くて。

違う、それを知ってしまった時に受け入れられなかった時の自分が怖かった。

全てを失ってしまいそうでマンションから飛び出してしまった。

また全てを失ってしまうかもしれない。

それでも可能性を求めて凜子さんに打ち明けようと手を差し出すと完全に拒否されてしまい。

凜子さんがマンションから飛び出してしまった。

追い掛けようとしたが体に力が入らず床に崩れ落ちてしまう。

息が苦しい、再び過呼吸症候群の発作に襲われる。

凜子さんを失う訳にはいかない頭の中では判っていても体が全く自由にならなかった。

何とか震える手で携帯を掴み藤堂のナンバーをコールする。

「野神、何しているんだ？」

「と、藤堂。り、凜子 を探して くれ」

「お前、大丈夫なのか？」

「俺は くつうう」

「発作だな。直ぐに行く。マンションだな」

「来るな！ 彼女を」

携帯を放り出してのた打ち回ると背中じゃりと何かが当たる。見るとカップか何かの割れた破片だった。

恐らく凜子さんが慌てて落としたのだらう、そして床に落ちている別の物が目に入った。

それはお茶の時にレモンなんかを切るためにキッチンに置いてあったペティナイフだった。

ナイフを何とか掴み力任せに振り下ろした。
一か八かのショック療法だった。

左手にはタオルをきつく巻きつけて街を彷徨っていた。
降り続いていた雨は霏に変わり身も心も冷え切り意識が朦朧とし始めていた。

日が落ちて暗くなり始め街に明かりが灯り始める。

左手からは血が止め処なく滴っている事さえ気がつかなかった。

どこをどう歩いたのか繁華街の外れにあるホテル街に来ている事に気付いたのは、どれくらい歩いた後だらう。

タクシーが止まり何となく顔を上げると探し続けていた凜子さんの姿がタクシーの向こうに見え隣には谷野の姿が、谷野に肩を抱かれるようにして2人はタクシーに乗り込み何処かに走り去った。

何とか繋ぎとめていた糸がぶつつりと途切れた瞬間だった。

#10-3・ふざけるな

体が鉛の様に重く生きているのかさえ曖昧だった。

それでも時々俺の名前を呼ぶ声がするが彼女の声ではなかった。薄目を開けると誰かが俺の顔を覗き込んでいる。

ぼやけていた視界が定まってくるとそれが女の看護師さんだと気付いた。

「生きているか？」

「ああ、生きているみたいだな」

看護師さんの気配が消えて聞きなれた藤堂の声が聞こえる。

視線を横に移すと疲弊しきった藤堂の顔があつた。

「一弥が寝ていた方が良くないんじゃないか？」

「冗談も大概にしろ！ 本当に死ぬ寸前だったんだぞ」

「そっか、死に損ねたか」

「ふざけるな！」

藤堂が俺の胸倉を掴み揚げると看護師さんが慌てて駆け込んできて、藤堂を羽交い絞めにと俺の体は力なくベッドに落ちた。

それから藤堂はこつ酷く看護師さんに激怒されている。

あまりにも可哀想になり重い口を開いた。

「何日経っているんだ？」

「野神が担ぎ込まれてから3日だ」

「そっか」

「お前、他に聞くことがあるんじゃないのか？」

「藤堂が俺を見つけてくれたのか？」

「そうだ」

「あの場所で見ただよ。彼女が谷野と居る所を。どうしてあそこに居たのか理由は判らないけどな」

「本当に世話の焼ける奴だな」

「悪いな」

変らないか、藤堂は俺の考えている事はお見通しの様だった。

今までも入院までは至らないが独りの時にインフルエンザなどに罹り動けなくなつた時は何度もあつた。

その度に道場で爺ちゃんに叩き込まれて来た事を実践しながら今まで生きてきた。

それは今の状況にも有効だろうと思ひ、嫌と言つほどやらされた腹式の深呼吸を繰り返す。

徐々に血の巡りが良くなつていく、すると冷え切っていた指先に温もりが戻ってくるのを感じる。

しばらくすると重かつた体が少しだけ軽くなり意識もはっきりとし始める。

大きく伸びをして体をゆつくりと起こすと藤堂が驚いたような顔をしている。

「大丈夫なのか？ 無茶は2度とゴメンだぞ」

「はあゝ外傷は左掌だけだろ」

「その傷はどうして？」

「シヨック療法かな」

「まさか」

「そう、そのまさかだ。一か八かだつたけど効いた。この程度の怪我なら直ぐに治る、もう大切な物を2度と失いたくないんだ。それに俺が倒れたのは多量の出血か低体温だろ。輸血をしたのだろうし体温が上がれば問題ない。そうでしょ先生」

俺の意識が戻つたと連絡を受けて病室に現れた担当医に話しかけると困惑した様な顔をしたが頷くしか出来なかつた様だ。

体が本調子じゃないので食事は病院食をと言われたが無理を言つて藤堂に食べ物を買つて来てもらった。

未だ血が足りなのは自分自身が良く判る。

今は食う物を食つて血を作り体温を上げて免疫力を高めるしか出来ない。

藤堂の心配を他所に俺は藤堂が買つて来た物を片っ端から食べ始め

た。

「野神は一体何者なんだ？」

「なあ、藤堂。凜子さんの両親の事を知っているよな」

「ああ、テロでつて奴か」

「そう、あのテロで一人の男が死んだんだ。そいつは少年の頃にそれまでの思い出を全て失い。全てを守る術をコンピューターの中に見出した。それはネットを駆使して作り上げられた。しばらくして彼は海外に飛び出し3人の仲間と知り合いその技術を高めていった。するとその高度な技術にある国が目をつけた。見えない敵から国を守る為に、そしてその所為で少年は命を狙われてしまった。あのテロで男の全てが抹消された。生きてきた証もそして死んだ証も全てな。それから俺はしばらく日本ともお別れだ、後の事は頼む」

「野神は何を無責任な事を言っているんだ。凜子さんはどうするんだ」

「これ以上、彼女を巻き込む訳にいかないんだ」

「そこまで一気に喋ると流石に血が足りない体では目眩がして横になる。」

一息つくとも藤堂が心配そうに俺の顔を覗き込んだ。

「そんなに覗き込むな。男に見られても嬉しくない」

「そのままが良いから俺にだけでも訳を言え」

「あのマンションのオーナーである俺の友達は死んだ男が作り上げた技術を世界に広めたIT企業の人間で俺が使っているパソコンは殆どそいつの持ち物なんだ。だから指紋認証や静脈認証を使った高度なセキュリティが施されている。そして万が一の為に完全に侵入者さえロックするような仕掛けがしてあったんだ。それが今回の事で発動した。この意味が判るよな」

「つまり情報が漏れたかもしれないという事か。でも今回は」

「良くは無いがそんな事はどうでも良いんだよ。まあ、俺だけが質問されれば良い事だ。凜子さんは関係の無い事だ」

「査問つて野神。まさか……」

「戻ってこられるかは不明だ。何かあれば査問を受ける事は大昔に了承している。だからこそ親友であるお前に頼みたいんだ」

「あのな」

「急にそんな事をか？ 悪いが時間が無い。明日にでも大挙してお迎えが来るだろうよ」

藤堂が事の大きさに戸惑い黙り込んでしまった。

俺が藤堂の立場なら逃げ出してしまいかもしれない。

そんな雰囲気の中に眉間に皺を寄せた双葉さんが現れた。

「ご心配をお掛けして申し訳御座いませんでした」

「野神君、査問って本当なの？」

「言った筈ですよ。『僕は基本、嘘は付きませんよ。言わない事はありますけどね』って」

「言わない事じゃなくて言えない事だったのね」

「さあ、どうでしょう。僕は生きていますし過去もありますから」

「本当に猫なのね」

「これからはキャットですよ」

「マジで殴りたくなってきたわ」

「勘弁してください。まだ守らないといけない物があるんです」

「それじゃ、選考会に来ていたあの子の事を話してもらえるかしらもう、隠す必要も無い事なので双葉さんと藤堂には話してしまった。これから2人には凜子さんや会社の事をお願いしなければならなのだから。」

マンションを飛び出すとそこには社に戻ったはずの谷野君が立っていた。

私は誰とも係わりたくなって無視をして雨の中を歩き出した。

私の後をしばらくしても谷野君は付いてきた。

社に戻るように言っても自分の責任ですからの一点張りで私が社に戻らないのなら自分も戻らないと聞かなかった。

どれだけ歩いたのだろう身体が冷え切った頃に腕をつかまれ近くにあったファミレスに連れ込まれてしまった。

そして谷野君はどこかでタオルを買ってきて温かい飲物まで注文してくれた。

濡れた体を拭いて温かい飲み物を飲んでも体の真ん中だけは温まらなかった。

どれだけ何も喋らずに座っていたのか、外を何となく見ると一つの傘で仲良さそうにするカップル達が街を行きかっている。

瑞貴君を信じる事が出来ないでいる自分が情けなく、何も言わないで居る谷野君に甘えている自分に腹が立ち店を飛び出した。

無我夢中で囊の中を走り回り足がもつれそうになるといつの間にか谷野君に肩をつかまれてしまった。

我に振り返りを見るといつの間にかホテル街に迷い込んでいて谷野君に促されてタクシーで社に戻った。

重い足取りで秘書課に行くと言蓮さんと花ちゃんが待ち構えていて誠心誠意頭を下げる事しか出来なかった。

「申し訳御座いませんでした」

「住倉の谷野君も戻ったのね」

「はい、無理矢理つき合わせてしまったみたいで」

「そう、その件はもう良いわ。なんとか会社には事情は説明しておいたから。明日にでも花が彼をマンションに案内する手はずになっ

ているから」

「ありがとう御座います」

「花、凜子をシャワー室に連れて行って着替えさせなさい」

「判りました」

まるで花ちゃんに監視されているみたいだった。

それは仕方が無い事なのかもしれないプライベートな事で仕事を放棄して一時的とは言え行方不明になっていたのだから秘書としては失格だ。

シャワーで冷えた体を温めると強張っていた心も少しだけ解れた気がした。

予備のシャツとスーツに着替えて秘書室に戻ると香蓮さんがソファに座り指を組んで今まで一度も見なかった無強張った表情で一点を見つめ続けていた。

「凜子、話があるの。座りなさい」

「は、はい」

香蓮さんのただならぬ雰囲気には恐る恐る香蓮さんの前に座ると、花ちゃんが私から視線を外して香蓮さんの横に腰掛けた。

言い辛そうに香蓮さんの瞳が僅かに揺れている。

何度と無く口を開きかけて溜息をついている。

重い空気が3人に押し掛かると香蓮さんが顔を少し上げて私の目を真っ直ぐに見据えた。

「野神君が生死の狭間を彷徨っているわ」

「えっ……」

何を言われたのか全く理解できない、それでも体は直ぐに反応して血の気が引いていくのを感じる。

「出血多量と低体温でどうなるか判らないと藤堂君から連絡があったの。凜子がマンションを飛び出した直後に過呼吸症候群の発作に襲われて、藤堂君に必死に電話をしてきて凜子を探して欲しいと言ったそうよ。直ぐに藤堂君から連絡を受けて彼は凜子を探しに行き、

私は花に野神君のマンションに行くように指示しての」

「香蓮さんに言われて直ぐに野神君のマンションに行ったけれど入れ違いだった。何故だか理由は判らないけれどセキュリティーシステムがダウンしていてすんなりと部屋に入れて、部屋に入ると血の着いたナイフと夥しい血の跡がキッチンとリビングにあったの」

「恐らく発作を止める為に自分自身で手にでもナイフを突き刺したのね。そして止血もそこにあなただ探す為に闇雲に雲の中に飛び出した。これは私の想像なんだけど凜子は谷野君とホテル街に居なかった？」

「え、どうしてそれを」

「一弥が野神君を発見したのもホテル街だったの」

「状況が状況なら最悪ね。野神君は2人を目撃してしまったのかもしない、そして最後の糸が切れてしまった」

「私と谷野君は何も……」

「当たり前でしょ！」

香蓮さんの激しい叱責が飛んできた。

「それで瑞貴君は？」

「かなり危ない状態ね。今は藤堂君が付き切りで容態を見ているわ。昏睡状態だそうよ」

「そんな、私も病院に」

「凜子を病院に行かせる訳には行かないの」

「どうしてですか？ 私は瑞貴の恋人なのに、何で香蓮さんにそんな事を言われないといけないのですか！」

「それを本気で言っているの？ 凜子」

私が声を荒げて抗議すると香蓮さんは揺れる声で静かに言った。その声からは先ほどの怒りの感情は全く感じられなかった。

「どう言う意味ですか？」

「そのままよ。あなたは瑞貴君の事を信じられなかった、違う？ なんて瑞貴君が急にあんな発作を起こしたのかしら」

「それは……」

「考えなかった？ 違うわね、考えられなかった。凜子は良い意味でも悪い意味でも野神君の事になると周りが見えなくなってしまう。そして気付いた事があるの、野神君の発作はあなたが原因よ。野神君はあなたを失う事を極度に恐れている。それは凜子も知っていたはずでしょ」

それは知っていた、瑞貴君はいつも私を守ってくれて優しくしてくれる。

そんな瑞貴君ですら不安を抱え時々子どもの様に怯えていたから。香蓮さんに言われたばかりだった、年上の私がしっかりしなさいと自分の事しか考えられないでいた自分に気付かされてしまった。

初めて瑞貴君が発作を起こす前に瑞貴君が苦し紛れに言った言葉だけれど、それは以前に冗談交じりで瑞貴君が言っていた事と同じだった。

その事に驚いてももしかしたら本当の事なんじゃないかと疑ってしまった。

そんな私の感情に瑞貴君は敏感に反応してしまったのだ。

子どもの頃から周りに気を使って生きて来なければいけなかった瑞貴君にとって容易い事だったのかもしれない。

そして2度目は私が我を失い瑞貴君の事を拒絶してしまった。

今の状態で瑞貴君の所に行き瑞貴君が発作を起こせば危険極まりない事は私にでも理解できた。

全ては私自身の責任で瑞貴君を危険な目にあわせて、今回は命さえ危うい状態に追い込んでしまった。

私には瑞貴君の側に居る資格は無いのかもしれない。

それでも許して貰えるのなら……私は彼の側に居たい。

今はそれすら許されない事に自分自身が情けなく、至らない事ばかりなのに笑顔で居てくれた瑞貴君の事を思うと涙が溢れ出した。

しばらく仕事は休むように香蓮さんや花ちゃんに言われたけれどそれだけはしたくなかった。

周りに迷惑を掛けた分はなんとしても自分自身で汚名返上したいし、独りで居れば必然と瑞貴君の事を考えてしまうから。

自分に鞭を打ち仕事に集中した。

それでも夜になり独りであるマンションに居るのは堪えられなかった。

藤堂君が瑞貴君の所に詰めているので花ちゃんにマンションに泊りに来てもらい数日を持ち切る事ができた。

そして香蓮さんに瑞貴君の意識がもどり容態が安定したと聞いたのは、良く晴れた澄み渡る青空の日だった。

「凜子、あの子の事も聞いてきたわよ」

「え、御堂美希の事ですか？」

「そう、沖縄に行った時に瑞貴君が言っていた亡くなった妹さんと一字違いの妹が彼女よ」

「それじゃ」

「野神君は嘘なんか付いて居なかった。あれはでまかせでもなく真実だったの。野神君は妾の子とは言え御堂財閥の事実上のご子息よ。まあ本人はそんな事は思っていないでしょうけど。それにそう言われるのを毛嫌いするでしょ」

「それとこれはあなたの将来に係わる事よ」

その後の香蓮さんの話は殆ど耳に入らなかった。

私が深く考えずに他人を部屋に招きいれてしまった結果、瑞貴君は私を守る為に日本を離れてしまう。

それはある意味終身刑の様な査問を受けるために。

私が立ち上がり秘書課を飛び出しても香蓮さんは何も言わなかった。

タクシーを捕まえて病院へと急いだ。

何を言っても許してくれないかもしれない。

それでも瑞貴君に謝りたい。

それ以上に瑞貴君の顔が見たかった。

病院の前で物々しい黒塗りの車とすれ違った瞬間に瑞貴君の顔が見えた気がする。

タクシーが病院の入り口に着くと藤堂君が立ち尽くしている。慌ててタクシーから飛び降りて藤堂君に詰め寄ると藤堂君は力なく首を横に振った。

それは一目会つ事も一言だけ謝りの言葉を告げる事も叶わず。私の世界から誰よりも大切な瑞貴君が消えた瞬間だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6027t/>

ひそ、秘書？ばなし

2011年11月17日21時24分発行